

515

3



始



515

3

朝



藝樂道場叢書第六編

久保謙著



571-3

目次

朝.....(一)

白樺の戀人.....(一九二)

朝

初夏の爽かにすがすがしい朝、しつとりした空気は澄み切つた空と明るい地とに満ち亘つた。

高く高く白い雲の浮んでゐるあたりまで、空気は軽く細かくふくらんで、鳶が高く緩く輪を畫いた。子守は柔かい幼な兒の手を引いて、風呂敷包みを提げた俵夫の後について行つた。

子守と俵夫とは今日の晴々した天気を歡ぶ挨拶を取り換へてゐた。

「でもお坊ちやまはかうしておあるきになるのがそれはお好きなのですよ。」子守は靜かな調子でかう云つて短い話の句切りを附けた。

幼な兒は黒い小さな編み上げの靴をはいてゐた。半ば眠つたやうに無心にあるいてゐた幼な兒はこの時眼を睜つた。丁度薄桃色の霧の中に包まれてゐた肌に遠い蒼空から吹いて來る微かな風

が軽く觸つて過ぎた時の不思議な心地を確めようとするやうな、歡びと氣遣はしさとの間に幼兒はその臉をじつと靜かに開いてみた……彼の前には遠く平らかに白い道が續いた、平らかに遠

く遠く見えて、邊りは静かな初夏の朝であつた。静かな道には塵もなく、兩側には鮮かな根殻の垣根が続いて、その白い花も三つ四つ見えた。何處からともなく薔薇の花の微かな香が小兒のまはりに漂つた。

やがて幼な兒の瞳の前には大きな重い門が現れた。繁り合つた木立は斜めに奥の方へと續いて、その閉された門の中の廣い静かな園の中には逞しい白犬が蹲つてゐた。けれどその眼は優しく往來の方に注がれてゐた。陽の光の明るさ！

幼な兒は此の門を前に見た事があるやうな心地であつた。……籠を提げた誰かが彼を連れてこのやうな門の前に立つてゐた。重たけな調子で呼鈴の音が遠く奥の方に傳はると、何處からともなく大きな犬が現れて彼等の方を睨みながら、底に響くやうな聲で吠え立てた。幼な兒は犬の姿の大きさは怖れなかつたけれど、その吠聲を聞くと彼を連れて來た誰かの後に隠れるやうにした。やがて門の中に人の姿が現れて、籠はその人に渡された。犬の吠聲はもう聞えなかつた。暫らく經つとその籠には眞白な卵が一杯になつて僅かに開かれた門の戸の間から彼等の方に渡された。

其間誰も一言も云はぬやうであつた。……子守は幼な兒の手を引いて門の前を通り過ぎてしまつた。

「お坊ちやま、お坊ちやま、お母様がもう餘程お待ちでいらつしやいますよ。」と彼女は云つた。

「未だ餘程あるかね。」太い俣夫の聲が聞えた。

「いいえ、あの角を曲れば直ですよ。お坊ちやまは伯母様の處にいらしても平氣でいらつしやいますね。眞闇なお二階に一人で上つていらしたつて伯母様が驚いていらつしやいましたよ。」子守は獨り言のやうにさう云つた。

やがて彼等は新しい家の前迄來た。その立關口には猶篋笥などが荷拵への儘で置並べてあつた。襷掛けをした母は幼な兒を抱きかかへた。

「まあ、割合に早かつたね。未だ中々片附く迄は大變だよ。」彼女は子守に向つて忙しげに言葉を掛けた。

小石川の高臺の静かな處に移り住んでから一家には何事もなく日が過ぎて行つた。幼な兒は健康に育つた。彼は夏の暑さを知らずに暮してゐた。夏の太陽の燦めく日でも、彼の歩く處には涼しい木蔭の濃い緑と白い花の風に揺めくのがあつた。幼な兒は邊りの空氣に穩やかに包まれて育つて行つた。

幼な兒は鋭い意識は持つてゐなかつた。總ては夢の中に顯れる姿であつた。彼の心には重苦しい苦痛もなかつたけれど、また自らの享けてゐる静かな幸福をも明らかに知らなかつた。

「芳夫さん、芳夫さん。」と彼を呼び寄せて抱き上げた近所の娘は、此の幼な兒が誰に向つてもあどけない笑顔を向けるのを愛してゐた。けれど彼自身はそれらの愛をどれ程深く感じてゐたであらう？ 彼はただ楽しく、そして誰に向つても微笑むのであつた。

彼は未だ迎々しい足取りであつたけれど、一人で歩く事が好きであつた。子守は何時も後から笑ひながら隨いて來た。彼女はもう十六にもなつてゐて、時としては年の割にはませた物の云ひ

方もしたけれど、矢張未だ無邪氣な少女の心を失はなかつた。彼女は幼な兒の後を歩みながら、傍に長く續いてゐる枳殻の垣根を手についた細い棒で軽く打ちながら歩いてゐた。彼女は孰れかと云へば細そりした姿で、その顔も細面の、血色も薄い方で、時にはそれが淋しさうに見えるのであつた。けれど彼女の心は無邪氣で、何事にも煩はされてはゐなかつた。

幼な兒は遠い遙かな所まで來てゐる心地がした。そこには廣く遠く、白い静かな路があつた。垣根を透して平らな芝生が美しく刈り揃へてあるのが見えた。そして彼は晴れた日などによく彼の夢心地を誘つた。芝刈器械の音がからからこゝろと何處からともなく聞えて來るやうに思つた。夏の夕方の静かな空に淡い薄桃色の雪が浮んでゐるのを彼は無心にじつと見詰めた。その垣根の中の洋館には異人さんが住んでゐると彼は誰かに教へられて知つてゐた。彼は遂にその外國人を見た事はなかつたけれど、幼な兒の幻想には美しく静かな人々が、穩やかに夢のやうに、乳色の霧に包まれて浮んで來た。

然しながら夏の暑さのまだ衰へぬ中に一家は一つの突然な不幸に襲はれた。それは芳夫の病氣であつた。何處からともなく彼は病の原因を身に受けた。そして彼が苦しさに母を求めた時には、もう避け難く彼は激しい熱を病つてゐたのであつた。忌はしい傳染病の名が醫師の口から云はれた時、母の惱ましげな顔と父の嚴重な顔とが見合された。傍で子守はその蒼ざめた顔におどおどした色を浮べた。そして彼は赤十字病院の病室に送られた。考へ深い父はその時まだ五歳であつた幼な兒を唯一人病室に送つた。母の願も子守の望も總て退けられた。

幼な兒は然し恵まれてゐた。間もなく病は軽くなつて行つたのみならず、彼は悩む事が少なくなつた。彼は肉體的な苦痛を感じる事も少なく、不快をも極めて僅か知つたのみであつた。その上に總て苦痛の經驗は容易く幼兒の記憶から消えて行つて、甘く嬉しい追憶のみが美しく残り、それが總て彼の心を楽しくした。

廣く靜かな病室に、大きな眞白な寢臺の上に芳夫は寢かされてゐた。白い毛布が軽く掛けられ

てあつた。そしてもう幼な兒は此室に出入する若い看護婦の名を一々覚えてゐたのみならず、未だその姿を見ぬ中に、廊下を此室の戸口に近寄つて来る足音から、その誰であるかを明らかに區別する事が出来た。若い看護婦達はそれに興味を持つてゐた。

「今来るのは誰？」彼女の一人は尋ねた。

「Aさん。」彼が答へたやうに戸を押してAと呼ばれる看護婦がにこにこ笑ひ乍ら這入つて来た。

彼女達の看護衣の純白と高い白い帽子とは美しく見えた。

「ああ、皇后様、皇后様！」彼はかう云つて嬉しさうに小さい手を彼女の方に延した。

このやうな事からも幼な兒は彼女達の愛らしいものの一つであつた。

そしてもう其頃は夏も終りに近く、折々は病室の窓から見える高い空の青く澄んだ色や、靜かな夕暮に軽く起つて来る微風等に秋の氣の仄かに窺はれる頃であつた。朝な朝な明らかな色に登つて来る太陽の光は病室の窓に忍び寄つてゐた冷たい霧を拂ふやうであつた。そして彼は醒める時看護婦の誰かが必ず持つて来て呉れる小さい花束の露に濡れてゐるのを云ひ難い歎ばしさで

眺めた。若し誰も花束を彼に與へないやうな不幸が起つた時には、彼の心は曇り日の空のやうに物足りなかつた。そして「花を、花を。」と心の中の叫びが遂に口まで出るやうになつた。朝々の牛乳よりも前に芳夫は花を見るのが好きであつた。彼はそれが撫子であるか、遅れ咲きの朝顔であるか、咲き残つてゐた白百合であるか知らなかつた。けれどその淡い桃色や、燃えるやうな紅の色や、さてはまた雪のやうな純白は彼の瞳に心地よく沁み入つた。そして彼に與へられた玩具が稀であつたやうに花の與へられない日も稀であつた。

芳夫の病の全く癒えたのは初秋のある空氣の冷たい日であつた。迎へに來た母は彼を俾に抱き乗せて其の頭を撫でてやつた。彼は嬉しさうに笑つてゐた。そして母は途中で彼の爲めにビスケットや飴を買ひ調べた。

二

芳夫の父は一家と共に云はば今迄轉々として旅の生活をしてゐた。それは彼の職業が官吏であつた爲め、自分の意志からでない場合にも、地方から地方へと移り歩かねばならぬ事もあつた。既に芳夫が生れてからも、東北地方や近畿の方面に一二年宛を過したのであつた。その上東京に住むやうになつてからも麻布から小石川の方へと移り歩いてゐた。

新しく興つた此國は破壊と創造とを餘りに速かに、餘りに惶しく經驗した。芳夫の父は、彼がまだ十六歳の若い血潮を躍らして南方の努力的な藩の戦士として船路を大阪に向つた頃には、官軍とか賊軍とか云ふ名が人々の口の上つてゐた時代であつた事を考へると、凡ては夢のやうに不思議であつた。彼は其後の長い年月と經驗との後に、それを振り返つて見る時に軽く微笑まれるのであつた。そして總ての青年が髪を長くし、洋服の着方とナイフやフォオタの扱ひ方に巧みになつ

た頃には、更に又奪はれて行く傳統を恢復しようとする運動が既に總ての上に其の強い力を延ばしてゐた。其頃の青年の心には國家といふ烙印が何物よりも最も鮮明に刻せられてゐた。彼等の理想は政治であつた。彼等の或者は其の生命を賭して其の理想に熱狂した。芳夫の父もその青年時代をかかる空氣の中にはぐくまれ、官吏としての生活も必然的に其間から生じたものであつた。そして其後彼には長い官吏生活が続いた。種々の政治上の變動の間に、彼は多様な、それは簡単な言葉では容易に形容する事の出来ない複雑な經驗を通つて來た。或時は弛緩した状態に少なからぬ不満をも生じ、或時は急激な、理解し難い改革に對して反抗的な氣分をも味はねばならなかつた。それは華々しい生活とは云ひ難かつた。寧ろ勤勉と忍耐との地味な繼續の道程とでも云はねばならなかつた。そして其の間に彼は其の賦性の鷹揚な趣味に嚴密な思考で事件を處理する傾向を加味した性格を發展させて行つたのであつた。

秋の半ばを過ぎた頃のある夜であつた。芳夫の父は長官の前に展けられた北海道の地圖を熱視してゐた。明るい臺ランプの光は斜めに照して地圖の色彩の區別を示してゐた。其の上にはいく

つかの行政上の區劃が朱線で示されてあつた。

麴町の高臺の靜寂な空氣の中に長官の邸の庭には蟲が啣つやうに鳴いてゐた。彼は地圖から眼を離して長官の瘦せた頬の邊りに白髪が見えて淋しげなのを見上げた。總ては靜かで寂しかつた。暫らく彼等はこの新しい地方の拓殖事業に就て話を交換してゐた。

「さう、それでは御苦勞でも一つやつて頂かうか。」

長官はさう云つて彼の顔を見て微笑んだ。彼等は其の外はもう云はなかつた。夜が更けて庭の蟲の音も次第に沈んで聞えるその室には、彼等の間の碁盤の上に石の音が冴えて聞えた。

大きな一つの水の動搖がその上に數知れぬ小波を起す時、その波動は悠久に至つて始めて止む。一つの家族の運命は新たな動因に促進せられて豫期しなかつた方向へ展開しようとしてゐた。何事をも知らぬ芳夫も父と母とに伴はれて未知の北の國へと旅して行く事になつた。けれども父と母とは旅には馴れてゐた。芳夫も別れを惜しむ程には未だ何事にも愛着を持つてゐなかつた。

彼は長く親しんだる天子守が彼等から離れて行く事をすら知らなかつた。

芳夫は新しい境遇と周囲とに對する期待もなく、別れを惜む心もなく、停車場に見送りに來た伯母達の顔をにこにこ笑ひながら眺めてゐた。それは千乾びたやうな東京の街路に冷たい風が吹き渡つて柳並木の枯葉の寂しく塵埃に混つてゐる初冬の夕であつた。旅に出る人々の心は惶しく、停車場の燈火は彼等の顔を薄暗く照し出した。人々の挨拶は却つて深い調子を失つて長く忘れ難い言葉は口に浮ばなかつた。彼等の胸には未知の北の國の寒さ、怖しさ、寂しさが誇張して考へられてゐた。そしてその冬の夕の果敢なさのやうに、遠く旅して行く一家の上に如何なる運命が與へられるかは全く取留もなく佗しけにも思はれた。然しブラットフォームに洋服を着て立つた主人が見送りに來た友に何事か笑顔で云つてゐる姿は常よりは若々しく元氣らしく見えた。そして芳夫は眠たけな眼でその賑やかさを喜んでゐるやうにも思はれた。彼は眞白な毛糸の帽子を目深く冠つて車窓に掴まつてゐた。そして母の傍らには小さな柳行李に蒲團を敷いて假に揺られた搖籃の中に芳夫の弟が靜かに眠つてゐた。そして一家は未知の運命の中に旅に出て行つた。

冬の海は灰色の霧に包まれて沖の方はただ茫漠たる深みと見えた。然し肌を刺すやうな風が粉雪を伴つて耳の邊りを吹き過ぎると思ふと、沖の深い底からの唸り聲が、碎けるやうにどどつと岸を打つ波の音に怖い激しさを見せた。その頃はこの海を渡つて北の國に旅する者は未だ數多くはなかつた。そして寂しい青森の港は波が荒く、不思議な形をした二つの岩が港の中に突立つてゐるのが、霧の中に朦朧と眺められた。空は塗り込められたやうに曇つて、水鳥も飛ばず、何處からも舟唄も聞えなかつた。波のしぶく音の間に舳の船頭は殊に櫓を押し艱んだ。

大きな重たい雪は黒いやうに見える波の間に解けて、舳の上に芳夫の父は外套の襟を立てて幼児を白い毛布に包んで抱いてゐた。芳夫は白い毛糸の帽子を目深に冠つて母の肩掛を哀れにその頸に巻き付けて寒さを凌いでゐた。母はコートの肩を窘めて芳夫の手を掴みながら、舳の揺れ方の激しさに苦しさを顔にも現はしてゐた。

「親船に乗りさへすりや大丈夫だから。」船頭は太い聲の、訛つた解り難い言葉で親切に勵ました。

その時うねる波は舷に碎けて、激しく揺れる舳は氷のやうな潮の飛沫を受け、空からは雪交りの風が冷たく吹き亂して來た。母の胸には今更ながら遠く淋しい處へ旅して行く頼りなさがあつた。そしてもう二度と姉達にも逢へないやうな果敢ない心地がしてきた。芳夫は寒さに震へながら母の手を堅く握つた時、母の手にのみ暖かみがあるやうに思はれた。激しく揺れる舳の上で彼は海を怖れて母の手に縋つてゐた。その時の母の淋しい顔とお高祖頭巾の上に白く積る雪を見詰めてゐた時、彼の心にも言ひ難い淡い悲しみに似た心地があつた。それは恐らくは彼の生涯の始めての悲哀であつた。

汽船に登る舷梯は揺めいて、母と芳夫とは船頭に助けられた。然し父だけは獨りで巧みに甲板の上まで登つて來た。寂しい一家は哀れに灰色な冬の海に漂つた。然し父の胸の中にあつた力強い生活に對する努力と確信とは一家を導いて海峽を渡つた。其頃は室蘭の港からある炭鐵會社の鐵道が石狩平野を貫いて後志の國の方へ走つてゐた。

三

石狩川の岸邊からやや離れて砂土で覆はれた曠野の眞中に寂しく家が並び立つた町があつた。粗い木造の家は不規則に竝んで、町の中にも彼方此方に空地が畑になつてゐた。長い冬籠りの後に一家が見出した彼等の住んでゐる町がそれであつた。濁つた豊かでない小川が粗雑な感じのする町を斜めに貫いて流れてゐた。そして町の外には赭く木のない丘が夕日の光の中に痛ましく苦しげに眺められた。其の岳には夏は雜草が茂り合つて、町の子等は朽木に甲蟲を探したり、叢に蠹斯を捕へたりする所であつた。

空氣の澄んだ日には、南の方の空遠く、夕張岳の姿が眺められる事もあつた。

粗い風の吹く此町には春も來ないかと思はれた。芳夫は其の春から赭い丘の麓の小學校に通ふ事になつたけれど、彼の心には何事にも楽しさはなかつた。何處かに遠く美しい國のあつたのを憶ひ出す事の出來ぬやうな物足りない心地であつた。そして彼の意識の片隅に臙に残つてゐる、彼

を抱いて愛撫してくれた懐しい幾人かの人々に、はつきりと訣れの言葉を云ひたいやうな心地でもあつた。今は誰も彼を愛してゐないやうであつた。そして物の記憶に鋭く、笑顔の美しかつた幼な兒は冬籠りの後の春には物を云はぬ、笑はぬ少年となつた。彼の心は周囲の濕ひのない粗さの爲に曇らされたやうに見えた。彼の感覺は鈍く、彼は何事にも大きな喜びも苦しみも知らぬ少年となつた。

母には何故に彼がそのやうに變つて行くのか解らなかつた。若し環境の突然な變化が自然の美と明るさとを彼から奪つた事がその原因である事が明瞭に彼女に領解せられたならば、寂しい此町に住む彼女の不安は更に如何とも爲し難い苦痛を伴つたであらう。母は學校から歸つて來た芳夫が室の中でぼんやりしてゐるのを見ては讀本を開いてその讀方を復習してやつた。彼はそれを理解してゐるのかどうかさへ解らなかつた。そして母はいつも心許ない眼で少年の曇つた瞳を怖しいもののやうに見詰めた。何よりも潔癖な彼女には此町の水の悪い事は堪へ難い苦痛であつた。澄んだ水は丘の麓に清水の湧き出る處の外からは得る事は出来なかつた。どの井戸の水も精く濁

つてゐた。そして手拭は直に異様な色に染まつてしまつた。

然しながら父のみは其の間に常に元氣で快活に見えた。何事にも器用な彼は大工の使ふ程の道具を一通り揃へて持つてゐた。そして雪解の後の濕つた土の上に建てられてゐた粗末な家の塀や羽目板などに修繕を加へたりした。彼はまた屢ば乗馬で屬官を従へて地方の巡回に出掛けた。そして短い暇を見出すと彼は手頃な廣さの畑を耕す事を始めた。其様にして彼は生活に倦む事を知らぬやうに見えた。

彼は畑にとまことや玉菜のやうなものをも作るやうにした。そして毎日夕暮の一時間程を其の邊りて費した後に晚餐に歸る事にしてゐた。芳夫は其の様な時父の後に従つてゐた。そして父が夕陽の明るい光を豊かな頬に受けて彼の方を見て樂しげに笑つてゐるのを見た。

父はまた日曜などには子の爲に張つてやつた一坪程の大風を揚げて見た。初春の荒い風を受けた風はどのやうに高く登つても、他のどの風よりも強く大きく空に其の位置を保つてゐた。けれども風が次第に遠く小さく彼方の空に退いて行くのを見てゐた少年の顔には急に悲しげな色が浮

んで来た。

「ああ、風が通けて了ふ、通けて了ふよ、お父さん。」彼はさう云つて父に訴へた。父は緩めてゐた糸を控へて一瞬間子の方をいぶかしげに振向いた。然しやがて彼は微笑みながら云つた。

「通けるか、ぢや通けない様に縛り付けてやらう。」彼は糸を芳夫の體に幾重にも捲き付けた。少年は風を引きずられて前の方へと次第に動いて行つた。

晚餐の時父はいつもの楽しげな笑ひと共に其の話を母にした。然し母はその事には何とも答へなかつた。

そして彼女は考へてゐた。幼なかつた時の澄んだ瞳と晴れやかな笑顔とを恢復する爲には、彼女は常に其の子の後に立つて見張りと勵ましとを加へて行かねばならぬやうに思はれた。

驟な霧の中に起つた事のやうに、少年は其の周囲の様々な出来事を眺めてゐた。少年の心をば何事も強く感激せしめなかつた。彼は云はば生暖い空氣の中に方向もない動き方をしてゐた。♫

年の前には常に厚い扉が閉されてゐた。其の重々しい姿、その巧みな彫刻、其處に大切な美しいものが秘められてあるやうであつたけれど、彼はそれを開く鍵を持つてゐなかつた。

彼の魂は何故か愚かに育つた。彼の瞳は周囲の澄み渡つた光を見る事はなかつた。敏い魂の経験する感じ易さや苦痛を彼は知らずに育つた。彼を取り捲く空氣は生暖く茫漠としてゐた。

そして其の數年の間にも一家はなほ漂浪者のやうに平原の町から繁華な港町へ、其處からまた高原の町へと移り住んでゐた。芳夫は其頃は既に二人の妹を持つてゐた外に、或日門口に着いた人力車の幌の中から、豊かな穏やかな笑を湛えて現れた髪の色純白な老いた女——芳夫の祖母とも其後の數年を共に暮す事になつてゐた。

最初の町は少年に何物をも與へなかつた。彼は追憶の絲を手繰り寄せて、佗しい繪巻物を開く時に、其處に一つの古びた橋、哀れに蝕んだ杭や、その下を流れる暗く澱んだ水、そして其の橋の上には夕陽の光の中に幼な兒を背負つた子守等の群が楽しげに走り廻つたり、耳打したりする外は、彼は最初の町に就て知らなかつた。そして彼の一家がやがて他の町に移り住むといふ事を

知つた時には、彼の心は大きな楽しさを前に見るやうに躍つた。然し少年の瞳はそれ自身には何の變りをも見せず、新しい港町へと移された。そして様々な映像は彼の眠つてゐる心を勵ますやうに、嘲けるやうに過ぎて行つた。

少年の移り住んだ日本海岸の商港は賑やかと云ふよりは亂雑な町であつた。海岸通りは時節に依つて、鯨や鮭や昆布などを積んだ汚れた荷馬車ががた／＼と通り過ぎた。丘の上の芳夫の家の椽側からは彼方に低く小川を見、其の彼方には緑の濃い山が近く見えた。臺所には大きな深い井戸がいつも片隅に薄暗さを感じさせた。

其の町は殊に道の悪い所であつた。雨の後には其の泥濘は文字通りに膝をも埋める程であつた。少年は長靴を穿いて學校に通つてゐた。彼の眼は殆んど何物をも見なかつた。彼は教科書を學校に持つて行く事を知らなかつた。彼は學校への途中に怖い大犬が徘徊してゐる爲、學校とは反對の側の野に行つて茫然と半日を過した。そして犬の怖しさを遁れやうとするだけでも少年の心

は暗く苦しく、何人も彼の心を理解しなかつた。彼は其の友が總て上草履にはき換へる學校に泥靴の儘で登つて行つた。彼は上草履を持たぬ爲、それに穿き換へる事にも氣付かないのであつた。そして彼はその靴の儘で運動場を馳け廻つて、他の少年が遊戯などの際に、意地悪く彼を苦しめやうとする時には怖しく反抗した。彼は其の靴で荒々しく其の小さい敵を蹴散らした。

彼は教科書を持つて來ぬ理由を教師から訊ねられても決して一言も答へる事が出来なかつた。特殊な關係で彼の父を知つてゐた教師は決して少年を叱責する事はなかつたけれど、屢ば皮肉な眼で彼の方を睨むやうにした。然し其の時の彼の表現の乏しい眼付には恐怖よりもむしろ彼にとつて全然理由の無い事のみを命ずる教師を心に憎む色が浮んでゐた。實に少年は愚かな心と曇つた瞳とを持つて育つて行つた。彼は自分の帽子を何處かに失つて歸つて來た事にすら氣付かないのであつた。

「まあ、お前は何といふ子だらうね、自分の帽子を無くして知らないといふ事があるものですか。」少年は瞳を上げて母の蒼褪めた眞面目な表情を見て、また下を向いた儘黙つてゐた。

「學校に忘れて来たのだらうね。」母はや、優しい調子で尋ねてみた。

「學校に行つた時にはもう無かつた。——歸りに、あの、坂の下の鍛冶屋の釘に掛けてあつたのかも知れないけれど……」

彼には確かに其の帽子が自分の冠つてゐた紺のリボンの附いた麥藁帽子に相違ないやうに思はれた。母は少年の途切れては云ふ言葉を一言づつ待つて聞いてゐた。然し彼女は其の中に遂に何物をも見出す事は出来なかつた。彼女は失望の溜息をついて、暫らくじつと少年の額を見下してゐた。彼の臉からは涙がこぼれ始めた。彼は凡てを母に訴へたかつた。けれど彼は云ふべき言葉を知らなかつた。彼は其様にして屢ば母の前に涙を流した。そして少年の心は暫し閉された薄暗と暗れやらぬ霧との中にさまよつてゐた。

四

餘りにも惶しく一家はまた其の港町を去らねばならなかつた。或る秋の霜の冷たい朝、彼等を乗せた汽車は神居古潭と呼ばれる石狩川の峡谷の険しい斷崖に添ふて白い煙を上げながら走つてゐた。其處には釣橋が揺めき懸り、其下には怖い程蒼い水が緩くたゆたひ、又急に白く泡立つて流れた。そして危ふげに聳立ち、或は滑かに不可思議な形をした岩の群の上には燃えるやうな紅葉が覆ひかぶさるやうに輝いてゐた。やがて汽車は一つの小さいトンネルを過ぎて、細い鋭い汽笛の響は高原の白い霧の中を貫いた。そして朝の太陽は霧を破つて薔薇色に輝いた。

芳夫はクツシヨンの上に眼醒めた。

「此様に彼は幼ない時から夜汽車の窓を太陽の光が明るくするのを何度か経験してゐた。併し彼は其の朝程耀やかしくまた生々した野の姿を見た事は無かつた。總ての野は黄金色に映え渡つて、彼方の空には鮮やかな薔薇色の雲が輝いた。實に朝の太陽は鍊金術を野に施してゐた。そして凡

ての野の燦めきの間に、一人の女王は微笑ましく、つつましやかに立つてゐた。彼女は黄金の冠を戴き、乳のやうに白く清い肌を顯はして、野の眞中に立つてゐた。女王のやうに、白樺は朝の光の中に輝いてゐた。そして少年の瞳もそれを見た時には輝いた。彼は窓に擱まつて瞬きもせず、にそれを見詰めてゐた。

高原に立つ少年を取り巻いて秋冬春夏はめぐり過ぎた。其等總てはむしろ佗しい姿であつた。汽車の窓から彼の瞳にあの綺羅びやかな艶麗な姿が映つたのは、むしろ不思議であつた。

初夏の楽しく鮮やかな輝きの猶ほ残つてゐる頃に、既に初秋の氣は此の高原の到る處に見られるのであつた。澄み切つた空の青にも、また高原を取り巻く山脈の峡谷を埋める白い霧にも、秋の色は次第に鮮やかに窺はれて來た。その澄み渡つた空はやがて暗い灰色の雲で覆はれ、冷たい時雨を見る頃となれば、人々は長い冬籠りの用意に忙しい頃であつた。そして時の移り變りは慌しく、冬のみが長く變らぬ姿を保つてゐた。かさかさとした佗しい風に鳴り渡る玉蜀黍も野に末枯れて

立ち、大きく強く巻いた玉菜も荷車や籠で何處へか運び去られて了つた頃、野に初雪が降つた。次第に時と共に雪は深く積り、寒さも次第に人々の骨迄沁み透る様に迫つて來た。寒さを防ぐ用意を人々は充分にしてゐた。それでも往來に出れば人々の吸ふ空氣は鼻から肺へと氷つて了ふやうであつた。吐く息は眞白に霜のやうに鬚などに氷り着いた。ひしひしと迫る冷たい空氣は自然の氣息其物であつた。其時幾萬かの人口を持つてゐる芳夫の住む町とても、唯哀れなかよはいものに過ぎなかつた。廣い大きな野の間に、暖爐の煙突から騰る煙がかぼそく消えて了つた。自然は沈黙して大きな灰色の空を町の上に覆ひとした。陰のやうに其の空を雲が動いてゐた。野は眞白に重く雪に包まれた。

總ての木立は骸骨のやうに立つてゐた。そして寒さの最も激しい一月二月の頃には、時として細い枝が見て氷つて、恰も銀で鑲められたやうな、美しく又驚くべき姿となつて芳夫の眼に映つた事もあつた。然し徐々に燃えるやうに延びて行く彼の生命に對しては、寒さは些の障壁をも加へなかつた。そして大きな沈黙した自然の命令に服従してでもゐるやうに、彼も沈黙して毎日學

校に通つてゐた。然しその沈黙の底に、或る説明し難い楽しさが、彼も意識しない間に孚まれてゐた。彼は新しい学校の若い教師が彼の方を見ると何故ともなく楽しさを感じて微笑む癖が附いてゐた。

長い冬の雪の一時に解け去るのが春であつた。やがて再び鮮かな初夏がめぐつて來た。

或る日若い教師は生徒を連れて郊外に出て行つた。其の町の一方を石狩川が流れ、猶ほ多くの支流が複雑な形を作つて此の町を取り巻いてゐた。教師は若々しい充實した心地であつた。學校を出て間もない彼は理想に憧れながら現在の仕事に勤勉であつた。彼はいつも羅紗の詰襟の上着の鈕を一つか二つ外してゐた。そして屢ば眼鏡の位置を氣にして手を其の方に持つて行つた。

石狩川の廣い河原は若い川場の柔らかな緑で覆はれ、水は稍濁つた色で暖かさうに見えた。彼は其處で生徒に解散を命じた。そして彼自身は三四人の生徒を呼び寄せて傍の大きな石に腰を下した。其の中には芳夫もゐた。彼は新しく學校に這入つて來た芳夫が彼の顔を見て微笑むのを愛好するやうになつた。彼は快活で勤勉であつた。彼は折々生徒と共に運動場を馳け廻つた。そし

て教壇では彼は熱心な調子で話した。歴史の時間には殊に熱心に話す彼は唱歌が巧みであつた。芳夫は彼に對して親みと尊敬とを感じてゐた。

河原には明るい日が照してゐた。石に腰掛けた若い教師の後には水の音が延びやかに聞えた。彼の心は穏やかで楽しかつた。

「どうだ、中々佳い景色だね。あの山は北海道で一番高い山だけれど、何といふ山か皆知つてゐるか」

彼は東の方を指して尋ねた。

「ヌタクカムシユベ。皆はさう答へた。」

其處には北海道の中央山系が高く中空に聳えてゐた。それは云ひ難く崇高な姿を持つて野の上に玉座のやうに尊く見えた。鋭い輪廓と云ふよりは巨大な重い力に満ちた姿であつた。蒼く沈んだ山の肌、其處には中腹にさへ眞白な雪が縞になつて残つてゐた。河原の彼方には若い落葉松の林に心地よく緑色が陽に輝いた。野の何處にも綺羅びやかな花は咲いてゐなかつたけれど、それ

は無限な宏大な姿を暗示した。

芳夫は教師の尋ねる言葉に一々返事はしなかつた。それは煩しい爲ではなく、彼は未だ打付けに總てを容易く云ふ習慣を知らなかつたからであつた。彼は多くは俯いて微笑んでゐた。

次の作文の時間に此の散策が課題として與へられた時、芳夫は彼が見た儘を書いた。教師はそれを讀んだ時、その單純な筆致の中に、彼自身も其様に描くであらうと思はれる要點が巧みに充分に言ひ表はされてあつた。其の作文を返す時、彼は芳夫の顔を眼鏡越しに凝と暫らく眺めてゐた。

いつも快活に見える若い教師は晝食の後の三十分程の時間に必ず何かの物語を生徒の前で讀んで聞かせた。少年達の前には様々の空想的な幻影が、或るものは濃く、或るものは淡く浮んで來た。食後の時間を少年達はどの時間よりも好むやうになつた。物語の主人公は大抵は勇ましく力強い青年であつた。然し時には神祕な美しさを持つた乙女の事もあつた。彼等は總て不可思議な

運命の下に、様々な立妙奇怪な經驗をするやうに物語られてあつた。少年達の心には或時は冒險的な血が軽くさざめき、或時は薄く弱い彼等の心臓は怖しい悪魔や魔女の叫びに慄え戦いた。勇ましい物語はやがて細かく果敢ない物語と變つて行つた。王子と姫君との物語は總て希臘の神々と勇士の物語となつた。そして或時は少年達は「レミゼラブル」の世界の前に小さい心を惑はしてゐた。

若い教師はいつ迄も倦む事なく物語を讀み續けてゐた。

希臘の勇士の激しい戦ひの野の空には色様々な奇しき形の雲が燃えてゐた。その雲がまた此の高原に生れ出でたやうであつた。秋も終る頃、彼は夕陽の沈まうとする野を町の方へと歸つて來た。野は荒れてゐた。廣い芝原はうら枯れて、處々に強く根を張つて、高く空に聳え立つ樹やあかだもの樹の間から、遠く彼方に兵營が見えて、其處からは物悲しい喇叭の響が聞えて來た。もう秋も終る頃であつた。少年の心は其頃軽く生々としてゐた。彼と彼の弟とは他の數人の仲間と共に屢ば町を取巻く野の木立で甲蟲を探したり、小川で小魚を掬つたりした。甲蟲には様々の種

類があつた。少年達は其の各の種類に義経、辨慶、アイヌといふやうな名稱を與へて各別に特殊な興味を感じてゐた。義経の小柄な勇ましい姿、アイヌの偉大な強さうな姿！

また彼は網を持つて川揚が垂れ下つて水の面の暗いやうな處を探してざぶざぶと川の中を歩き廻つた。仲間は竝んで魚を追つて來た。彼は急いで網を上げた。彼の心は其度毎に期待に満ちてゐた。

「やあ、厭だなあ、またさるがにとかじかだ。」彼はさう云つて網を逆様にして水の中にその魯鈍な姿をした獲物を捨てて了つた。彼は腹が銀色に光つて、網の中でびちびちと跳廻る、うぐひを望んでゐたのであつた。

芳夫は夕陽の光の中を町の方へと歸つて來た。むらむらと東の山脈は雲で包まれてゐた。そして其の複雑な色の中で、一處廣い野を這ふやうに照して來る夕陽の光の接吻する邊りの蔷薇色は最も艶やかであつた。それが希臘の空の雲に似てゐた。

然し野は佗しかつた。物悲しい喇叭の聲が後から少年達を追ふやうにした。町の灯が見え始め

る頃、冷たい秋の終りの風が吹き始めた。そして急に空は暗い雲で覆はれ、惶しく冷たい雲が芳夫の襟を締めさせた。彼は町の方に走り出した。

彼は何事も知らなかつた。然し其の夕は彼の家では彼を待つてゐた。

「まあ、お前は今日に限つてこんな遅く迄何處を歩いてゐました。おばあさんがね、とうとう、お前……」母は言葉を續けなかつた。彼はただ不可思議な心地がした。母の臉は涙で濡れてゐた。

奥の室には日頃見馴れぬ人々も坐つて音を立てぬやうにしてゐた。其處に彼の祖母が寝てゐた。そして其の顔は白い布で覆はれてあつた。彼には始めてそれが何であるかが解つた。彼の心は急に小さく俯目勝になつた。

けれど祖母は眠つてゐるやうであつた。日頃よりはやや其顔は蒼褪めてゐたけれど、矢張りいつものやうな穏やかな調子が其の顔に残つてゐた。

「でもまあお年の方から申しますと、もう本當に御珍らしい程なので御座いますから。それにこんな穏やかな御最期は私共は存じません。」

其處にゐた一人の女はかう云つた。

「はい、どうも致し方も御座いません。何と云ふ間も無い位で御座いました。先程迄はいつもの通りなので御座いますし、急にあなた、爐の灰の上に俯向になりましたね。起しました時はもう物も申しませんでした。」母はさう答へた。

「いや、是はもう自然に木が枯れたやうなものです。本當に壽命が盡きたといふものです。」その時歸り支度をしてゐた醫師は軽くさう云つて立ち上つた。皆は悲しげに臉を濡らしてゐた。けれども芳夫には悲しみよりも不思議さと驚きとであつた。彼の心は暗く沈んだ。彼は失つて後にその持つてゐたものを始めて知つた。彼は此様に容易く先程迄彼の上に穏やかな微笑を投げた彼女から近付き難く離されて了ふ事は理解出来なかつた。芳夫は其時始めて祖母の姿を明かに知つた。毎夕佛壇の前で彼女が燈心に明るく灯を點す時の彼女の白い手の上の黒い珠數、色々な絹の小切

を丁寧にはぎながら炬燵にあたつてゐた彼女の大きな眼鏡、……彼の心には取留めた心地もなく、唯何事をか悔いるやうな心地があつた。

彼は其日も次の日も其の翌日も全く沈黙してゐた。彼は殆んど食事もしなかつた。

「まあ、お可哀想に。」彼の元氣のない姿を見て、此頃の無頓着に氣輕な彼を知つてゐる手傳に來合せてゐた夫人達は云つた。

五

時は流れた。芳夫が聽て中學に這入るのも間もない頃には彼の幼ない二人の弟が更に一家を賑はしてゐた。

一家には變動があつた。それは芳夫の父が官吏の生活から實業家の生活に移つた爲であつた。彼は其の長い官吏生活を忠實と潔白とで過した。彼は其の管轄内の土地に出来るだけの改善を加へる事に努力してゐた。灌漑溝や道路の修繕や町の並木や、其等の實際的な、總て誰の仕事とも知られずに残る事業の幾分を果す事に、質實な成就の喜びを感じてゐた。然し漸く彼に官吏の生活を去るべき時が來たやうに思はれ始めた頃、彼の周囲の事業はそれを導びくやうになつて行つた。彼の事業の性質は急に變つた。そして事業其物に興味を感ずる彼の心からは、更に生々した更に直接な、謂はば、動機は行爲を、行爲は影響を直截に導き出す新しい生活の様式は左程の不調和なく、間もなく彼に適應して行くやうに見えた。一家は前よりも常に忙はしく見えた。芳夫

の父は屢ば俾で外出したり旅行したりした。そして一家は事業の便利の爲に札幌の町に移り住んでゐた。

札幌、其の町に移り住む爲に高原の町を去る時、若い教師が芳夫を彼の傍に立たせて、教壇の上から、皆の前で何事か別れを惜む挨拶を云つた時、彼は急に涙ぐんで、幼い心にも別れて行く悲しさから、小さい多くの友の顔も定かには見えぬ程であつたけれど、聽て新しい町の生活が彼に開けて行く時、彼の心には高原の町は遠い思ひ出の一つとして残り、新しい町の美しさは不思議に彼の心を歡びに誘ひ、彼の瞳を其の緑の木々の間に醒めしめた。

平原の其の町は美しかつた。總ての古い歴史を持たぬ其の町は舊蹟といふやうな物もなく、其の代りには軽く鮮やかな調子を持つてゐた。

石狩川の支流が其の町の東の野を貫いて流れてゐた。そしてそれから導びかれた水が南から北へと直線に流れて、町を東と西とに分けてゐた。總ての市街は十字形に交叉して、其の規則正し

町の所々にはアカシヤの並木が北國風な建物の多い其の町に少なからぬ異國的な味ひを加へてゐた。並木の縁の間の明るい電燈の灯影、うら枯れて立つたアカシヤの冬の木立を物凄く雪の上
に照し出す冷たい寒い電燈の光、川添の柳並木に春の鶯が暖い時、水に聖燭の影を映した教會か
ら、たゆたふやうに流れて來る讚美歌の響。

少年は町の散歩を好んだ。殊に彼の好んだのは夕暮の氣分であつた。

石狩平原の一方に位置を占めた此町は、其の始めには外國人の設計になつたと云はれてゐた。そして洋館の多い事は其の町にふさはしく見え、街を通る外國人の派手な服装なども左程物珍らしくは見えなかつた。

町のほぼ真中には一つの古い時計臺があつた。ペンキも剝け落ちて、時間を示す數字も臙になつた所もあつたけれど、其の鐘の音のみは朗かに圓味を帯びて、しかも鮮やかに澄み互つて聞えた。何故か其の時計は亞米利加から持つて來られた物と人々に思はれてゐた。そして其の時を告げる鐘の音は芳夫には亞米利加の自由を宣言した鐘の音と常に結び付けられて考へられた。

芝草とクローバとで覆はれた廣い郊内のあかだもや楡の丈高い木立の下蔭を縫つてゐる平らな道の彼方に建つてゐる博物館、其處には入口に大きな熊の剥製が置いてあつた。また小さな白塗のボートを浮べた池のある公園、其等は芳夫がいつも好む所であつた。

古く大きな日本風な建物の周圍に廣い敷地があつた。そして築山の後には花の色の淡くて趣のないにも拘らず、味ひのよい美しい櫻坊の實る櫻の樹があつた。其外家をめぐつて梅、杏、李、林檎、西洋梨、葡萄、グスベリといふやうな果實は、初夏の頃から、其の邊りに甘いやうな酸いやうな香を漂はせてゐた。芳夫は日の暮れて行く頃、其等の果樹の仄かな香を嗅いで歩いてゐた。總ては自由で廣々としてゐるやうであつた。近所の少年達が林檎の樹の下に集つてゐるのを見ても、彼には別段な悪い感じも起らなかつた。やがて明るい月が靜かに登つて來て、其の光は木立の葉の繁みを透して美しく顔へた。彼の心は樂しかつた。

實を結ぶ秋の樂しさの中で、彼は夕陽に映える林檎の艶を最も好んでゐた。綠に紅に美しく、

輝くやうに艶やかな林檎の肌に、夕陽の黄金色が強く照り映えるのは限りなく美しかった。其處にささやかな葉影に黄金の林檎が竝んでゐた。少年の心は軽かつた。彼は、び仲間と共に高い樹に登つて、其處から往來と家々の屋根とを見渡した。高い處に、枝の都合のよい處に、彼は板片を結び付けて巧みな落着き所を作つて置いたのであつた。

其様にして彼の心は楽しく、やがて遊戯の外に何事をも知らぬ心の少年も中學に通ふやうになつた。其處でも多くの少年は唯無意味に集つてゐた。そして彼等は春も秋も冬も野に群をなして戯れ、蟠りのない心は廣やかに呼吸してゐた。

單に疲勞する事と旅宿の騷擾との外殆んど何事をも經驗させないやうな氣輕な修學旅行、川を徒涉したり、熱した林檎園の中を亂したりする秋の發火演習。冬の雪の中でも彼等は勇ましかつた。雪で城塞を築いて彼等は鐵拳で戦つた。城塞の高さは一丈にも近かつた。そしてそれは氷のやうに堅く滑らかに作られてゐた。そして勇ましい戦士の血が文字通りに雪壁を彩る事もあつた。そしてまた山と丘とが廣く雪で覆はれた時、群をなして彼等は兎を狩つた。

彼等が中學に通ふのは教室の椅子に腰掛ける爲ではなく、野に戯れる爲のやうでもあつた。其様にして彼等は高らかに校歌を歌ひ、彼等の校風を發揮した。芳夫はそれが何事であるかは知らなかつた。然し彼も人々と共に戯れ歌つた。そして彼の心は貧しく、彼は無意味な亂れた生活を送つてゐたけれど、彼自らは楽しく快活であつた。そして漸やく周圍の自然と人々に目醒めて來た芳夫は、其の少年の始めの時を、恰も眼を閉ぢてゐるやうに無意味に動いてゐる事を意識し始めた。そして靜かに四方を見詰めた時、彼は實は祝福少なく其處に立つてゐた。彼の心は何物をも見ずに、明るい光の中で茫漠たる楽しさの中にある事を長くは許されてゐなかつた。

「人の廻り合せといふものは不思議なものだね。お雪がね、石井さんの所にお嫁に来るやうになつたといふ話は、前から聞いてゐたけれど、今度石井さんが此方に来るやうになつて、一緒に來るといふ話だよ。」

縫物をしてゐた母は何か思ひ出したやうに芳夫に話し掛けた。彼は母の前で雑誌を讀んでゐた。石井さんといふ名は屢ば母の口から聞いて、稍遠い親戚に當る青年であると知つてゐるのみであつたが、お雪といふ名は彼には親しかつた。彼女の面影は芳夫には今はもう稍薄らいでゐたけれど、彼が幼ない頃、彼を守じた彼女であるといふ思ひ出は微かに残つて懐しさとなつてゐた。

「お雪を覚えてゐるかね、芳夫。」母は言つた。

「ええ、覚えてゐますよ。」

彼はなるべくはつきり彼女の面影や姿を思ひ出さうとしてみた。

「あの頃十四位だつたから、お前とは十程違ふ譯だね。もう何しろ一人娘があるつて云ふから。母は指を折つて數へて見た。年月は風のやうに過ぎてゐた。母は何事か色々思ひ出すといふ様子であつた。彼女は縫物を片付け始めた。芳夫も讀み掛けの雑誌を閉ぢた。臺所では夕飯の支度が忙しさうであつた。芳夫は彼女の事を考へてみたけれど、矢張り淡い懐しさの外は、大方は薄らいで了つた面影に似た微かな感情の外に、彼の胸に浮ぶものはなかつた。」

彼女達は札幌から汽車で一時間程の小さい町に住むやうになつた。そして彼女は折々愛らしい娘を連れて芳夫の家を訪ねて來た。娘は母によく似て面長な白い顔を持つてゐた。芳夫の母は嘗て心安く使つた彼女を再び親戚の家の主婦として見るのは喜びであつた。彼女達は色々な事を思ひ出すやうにして盡きぬ物語をした。そして其の娘は彼女が幼なかつた頃によく似てゐると母は云つた。

「おや、左様で御座いますか。もう十年で御座いますね。それでも不思議なやうで御座いますよ。」

お坊ちやまがもう中學にいらつしやるなどは夢にも思つて居りませんでした。それが矢張り自分の方を考へてみましても、もう此の娘が六つになりますので御座いますからねえ。」

「ええ、さうですとも、十年位は直ぐ經つて了ひますからね。私などはもうお婆さんになつて了ひました。」

「いいえ、奥様は矢張りお變りでは御座いません。いつもお若う御座います。」

彼女は急に調子を高くして云つた。

「でもお前さんは變りましたね。あの頃はどつちかと云へば、一向お構ひなしの方だつたけれど、よく芳夫を負つては棒切を持つて遊んで歩いてゐたのを今でもはつきり思ひ出しますよ。」

母はさう云つて彼女の顔を見直すやうにした。彼女は前より快活になつたやうに見えた。そしていつでも忙しさに歸つて行つた。彼女の結婚生活は餘所見にも幸ひな楽しいものに見えた。

靜かな池の水が急に吹いて來る風に誘はれて漣を立てる事があるのを人は知つてゐた。然し幸

福な生活が何故に突然な不幸に依つて其の靜けさを破られねばならぬのかは何人も悟る事は出来なかつた。彼女は世の荒波の苦しさに急に面接しなければならなかつた。それは餘りに怖しい事であつた。彼女が夢想さへもしなかつた不幸が餘りに容易く突然に起つた。彼女はどうしてよいか全く途方に暮れるより外に仕方がなかつた。未だ若くて弱い彼女は優しい夫に全く自分を委ね切つた心地で暮してゐた。それが彼女の幸福であつた。穩和な性情の彼女の夫は然しながら不運な生を受けてゐた。彼は未だ此世に何事をも爲さぬ中に、急に醫師から盲腸炎といふ宣告を受け、急に腹膜に故障を起して、哀れに此世を去つて了つた。それは餘りに惶しかつた。彼女は助けも憐みも乞ふ暇もなく、愛する夫を何者かに奪はれたやうな心地であつた。彼女は看病に疲れた身を投げ伏して泣いた。誰も彼女を慰める事は出来なかつた。

其の日は秋とはいひながら、夏の名残の猶消えやらぬ光と暑さとは、芳夫が乗つてゐる汽車の窓から見渡す兩側の野に、際立つて眺められた。それでも延び切つた玉蜀黍の畑の風に揺れる有

様や、其の向ふに擴がる青空の明るい色と軽い雲とを眺めてみると、大きな野の涯から、秋の歩みが除に近附いて來るのが頷かれた。

暇のない父の代りに芳夫は親戚の不幸を訪れるのであつた。

石狩川の濁つた川波の上を、船腹に不似合な大きな車を見せた河蒸氣が動いて行くのが見えた。其邊りから野の姿も佗しく樹木さへ少ないやうに思はれた。

夫を失つた不幸な彼女の前に芳夫が現れた時は、もう陽は西に廻つた頃であつた。町端れの緒い丘の斜面には粗末な拵へで人の遺骸を焼いて葬る所が見えた。限りない悲しみの重荷に堪へぬ彼女は人々に助けられて、爲さねばならぬ丈の事を果した所であつた。彼女には未だ總ては夢のやうであつた。併しそれは楽しい夢とは違つて、明らかに悩みの迫る心地が、定かならぬ心を寂しくしてゐた。悲しい調子の笛のやうな喇叭を吹く破れた乗合馬車は、野邊の送りを濟ませた彼女と人々とが、夕陽の丘の斜面を躓て降つて來るのを待つてゐた。

芳夫は人に導びかれて彼女の前に立つと、母に教へられた悔みの言葉を彼女に向つて云つた。

そして彼女の細面の顔が蒼褪めて、しかも惱ましげにのびせてゐるのを見て、悲しい心地で俯向いた。其邊りは心地悪く蓬や薊が生えてゐた。其の荒れ果てた姿は芳夫の胸に、彼が北海道に來て始めて住んだ町端れの丘の景色を思ひ出させた。彼は胸が迫るやうに覺えて、彼女の前に黙つて立つてゐた。

彼女は芳夫が中學の制服を着て、白い二本の線がくつきりと見える帽子に、雪の結晶の形の徽章が附いたのを手に持つてゐる姿を見詰めながら、彼の云ふ言葉を聞いてゐた。それは人々の云ふ通りの悔みの言葉であつたけれど、彼女はそれを聞いた時に急に悲しみが何倍かになつたやうであつた。彼女はその言葉よりは彼の姿を見た事から、一色に塗られてゐた悲しみの色に、嬉しさとは云はれなかつたとしても、或る複雑な他の色合が交つたやうな混亂を覺えた。

彼女は芳夫の肩に両手を掛けて、自分の方に引寄せざるやうにした。彼女がついてゐた色の褪めた青磁色のバラソルは、ぱたと微かな音を立てて地に倒れて軽く塵埃を揚けた。

「よく來て下さいましたね。」

彼女はさう云つてはらはらと涙を流した。足許に立つた細かい塵埃を夕陽が寂しく照してゐた。彼女は廣い野の涯にしみじみと自分の淋しい姿を見た。もう頼りにするものは彼女の前に立つてゐる小さい芳夫の外に何も無いやうな心地となつた。幼な兒であつた時の芳夫を抱いたやうに、今も彼を抱き上げて頬擦をしたいと彼女は思つた。彼女は丘の斜面に立つて遠く遠く野の涯に沈んで行く太陽に向つて涙が止め度なく流れた。過ぎて来た娘の時と死んだ夫、今の悲しさと佗しさ、何事の不幸とも定かには知らないで今も家で彼女を待つてゐる幼ない娘。

彼女は人の世の旅路に迷つたやうに丘の斜面に立ち盡してゐた。

彼女が死んだ夫の面影を其の胸に秘め隠すやうに守つて生きてゐる心地と、彼女に迫つて来る周圍からの壓迫とは全く關係のない、互に調和する事の出来ない浮世の矛盾の一つであつた。運命と人は簡単に云ひ慣はしてゐたけれども、それは彼女には餘りに苦しくあられもない事に思はれた。夫の死は指を折つて數へてみれば既に一年程前の事になつてゐた。併し彼女には其の一年

程は殆んど瞬きの間に過ぎて行つた。彼女は未だ遠く去つた人が眞に此世に居ないものと明らかに思ひ信ずる事すら出来ぬやうな心地であつた。彼女は臉を閉ぢる時に、彼女の前に浮ぶ其の人の面影と、彼女の胸の隅の最も靜かな處にささやかな言葉で話し掛ける其の聲とを、共に失はないやうに努めてゐた。運命、浮世、彼女が其様な言葉に思ひ當つて、其の弱い心を曇らさねばならなかつたのは、餘りに惨らしい事であつた。彼女は唯餘りに年若いといふ理由の下に、新しい結婚を周圍から勧められた。そしてそれは遂に遁れ難かつた。彼女は弱い優しい心と、獨りで泣く事の外には、何物も持つてゐなかつた。そして彼女は次の年の秋の終には、日本海岸の港から小さい汽船に乗つて、寒冷な波が際涯なく見渡される寂しい海岸の町へと旅して行つた。

一筆申し上げるませぬ。秋風冷たく身に沁む頃と相成りました。皆々様御變りも無く御暮しの事と存じ上げぬ。私事こちらに参ります時は御饒別下され、誠に有り難く厚く御禮申上げぬ。毎日皆様の事のみ御懐しく思ひ出し、そのみを頼りにて暮し申す。此處は鐵道もなく、

淋しき町にて、前の事のみ思ひ出しては獨りで悲しくなります。夜になると港は眞暗にて、波の音のみ怖しく響いて來ます。遠くの方に赤い灯が見えますけれど、海岸は眞闇にて、私は家に居るのが嫌で海岸を歩いてゐますと、生き甲斐がなく思ふ事もあります。悲しく暮し居りぬ。何卒御忘れなく御願ひ申し上げぬ。置いて來た娘は可哀想でなりません。今はどうしてゐるだらうと思ふと堪らないやうに悲しくなります。何卒く一生御忘れなく御願ひ申します。亂筆御許し下され度ぬ。誠に申し兼ねますが、皆様に御撮しの御寫眞一枚御分け下され度、幾重にも御願ひ申しぬ。かしく。雪より。

芳夫は母と共に彼女の手紙を読んだ。それは美しい筆蹟ではなかつた。殊に亂れた調子で書かれた其の手紙は、読み難い處も多かつた。

芳夫には彼女の生涯が暗く沈んで行くやうに思はれた。彼女が佗しけに一人で海岸の暗をさまよつて、波の音に誘はれるやうな姿が、まざまざと彼の眼の前に現れて見えた。芳夫は恐怖と氣

遣はしさで、彼女に若しも其様な事が起る場合をさへ考へた。彼の眼の前から彼女の寂しげな姿は消えなかつた。眞に芳夫が考へたやうに、彼女の生涯は寂しく暗い灰色で塗り込められてゐるやうであつた。一度蔷薇色に鮮やかな幸福の光が彼女の頬にも輝いたけれども、それは間もなく消え易い雲間の微光であつた。彼女の空は閉ぢ込められたやうに暗く、波の音のみ佗しく足下に打ち寄せて、彼方に遠く見える赤い灯まで辿り着く事が出来るかどうか、彼女は其の事を考へる丈の心の餘裕も無かつた。海岸に立つ彼女は、遠い灯を懐しく見入りながら、悲しい事のみ考へ續けてゐた。彼女の睫毛は潤つてゐた。

長い灰色の冬は漸く其の終りに近附いて、輝やかしい春が歩み寄つて来た。北の野を吹き荒ぶ風が、いつからともなく柔らかく人の頬を掠めるやうになつた。其の風は半年の間積りに積つて固まつた雪の肌を軽く撫でて過ぎた。やがて葉の落ち盡したアカシヤの並木の下の雪は、ざくざくと足の下に音を立てた。そして雪解の時は、町と野と人との上に、深い底から次第に根強く起つて来る、伸び行く生命の歡びを感じさせた。

芳夫は町を散歩して居た。長い間着馴れてゐた長いマントを脱ぎ棄てたい程の暖い風が吹いて来た。橋の通る處だけ往來の雪は薄黄を帯びて居たのが、折々照す冬の終りの日の光と、長い冬の間閉ち込められてゐた地熱との爲に、次第に解け去つて、やがて其處に數尺四方の地が現れた。黒く錆い土。雪國に半年を雪に包まれて暮した芳夫は、始めて土を見たやうな物珍らしさと物懐しさに、涙を誘ふ程であつた。「ああ、土、土、人は土の上でなければ住まれないんだ。」彼はかう

思つた。何故か彼は急に感傷的な心地になつて其處に佇んだ。

四五人の町の子等は、快活な歩調で、雪の下から現れた地の上に集つた。

「おい、土が出たぞ！土が出たぞ！」

彼等は互に顔を見合せて、喜ばしげに足を踏み鳴らして、地の上に躍るやうにした。芳夫はネルの頸巻をして、厚い毛絲の手袋をした手を懐に入れた彼等の姿を見て、軽く微笑んだ。

彼は町端れの野に立つた。雪解時の懐しさ！野の雪が暖い日の光の下で耳には這入らぬ程の心地よい囁きのやうな音を立てて解け去る時、遠く野の彼方に美しく燃える陽炎を見詰めてゐると、物柔らかい雪解道の香が芳夫の鼻を襲ふて来た。幼ない時からの様々な追憶は、海邊に寄せゑる小波のやうに、此の香に混つて、芳夫の胸には云ひやうのない夢のやうな歡びが漲つた。

それは春であつた。そして總ての物は蘇つた。アカシヤの竝木には輝くばかりの緑が蘇り、小鳥も蘇つて春の歌を唄つた。其の時空には其の小鳥の胸毛のやうな柔らかい雲が浮んでゐた。

北の國に春が蘇る程突然で、また自然の力の斯程迄に著しく鮮やかに人の前に顯れる事はなかつた。灰色の空と雲と、雪の上に落ちる微かな微光とに馴れた瞳は、急に輝やかしい春の園の眩ゆいばかりな色彩の間に彷彿程であつた。芳夫が散歩する小さい公園の池の水が、柔らかい風に吹かれて、さらさらと岸に寄せる時の歡びのやうに、總ての生物の血管には生命の奥深さから起つて来る躍るやうな歡びが漲つた。微かな甘い香を漂はすクロローバの野、其の柔らかい三つ葉、四つ葉、廣い野の木立の鮮やかな若葉、明るい林、そして紫のバラソル、赤い派出な帯。何處からともなく誘ふやうに芳夫の耳には小さな甘い囁きの聲が聞えて來た。

併し乍ら少年の心は驚くばかりな自然の輝きの中に微かに顫へた。蘇る春と共に彼の胸は空虚の寂しさに満たされた。少年にとつて春は物憂い時であつた。彼の心には何處からともなく忍び寄る憂鬱の精が、微かな足取で躍り廻つて、彼の心を落着かせなかつた。自然は春を抱いて舞踏した。併し彼の心は何物にも包まれぬ寂しさの中を、哀れに青褪めて過ぎる夕暮の魔の忍び足にも似てゐた。

春の嵐は街を斜に吹き廻して、塵は日の光を受けて薄緒く空に舞ひ上つた。春は却つて愁はしく寂しい心地で少年は學校に通つてゐた。次郎は芳夫を誘ひ、二人は、また孝一を誘つて、三人は川沿ひの柳並木の下を毎日學校に通つて行つた。芳夫は其頃は前の様には笑はなかつた。彼は黙つてゐる事が多かつた。次郎はいつも變りがなかつた。きつちりと穿いたゲートル、稍赤味を帯びた柔らかい髪の毛、異常に白い肌、其の爲彼は多く孤獨であつた。そればかりでなく彼はその耳と眼とに不幸であつた。稍遠い耳と稍微かに白く曇つた瞳とは、次郎の表情に寂しげな色を常に漂はしてゐた。次郎は一日でも芳夫を誘ふ事を忘れなかつた。そして若し芳夫が先に家を出た時は、次郎の失望は大きかつた。

孝一は其の小さい身體の表情が現はすやうに、才走つた氣質であつた。澄み切つた鏡のやうに、彼の瞳には凡ての物が鮮やかな姿となつて映つた。そして彼は突然に物を云ふ辭を持つてゐた。稍皮肉な調子を帯びた諧謔を含んだ言葉が、軽く彼の口から出るのを聞いてゐると、今迄黙つて歩いて來た芳夫も微笑まずには居られなかつた。

「君は相變らずだね。でも君の云ふ事は確かに眞理だよ。」芳夫は云つた。

「眞理？ 僕は其の言葉が嫌ひさ。理と云へば十分ぢやないか。眞理などと云ふと、眞でない理もあるやうに聞えていけない。」

孝一は其様に云つた。芳夫は眞理と云つても差支ないと心の中に思つたけれど、其の上云ふのを好まなかつた。次郎も何か云ひたけにしてゐたけれど何も云はなかつた。

川沿道にさつと埃が舞ひ上つて、朝の光が柳の新芽にちらちらと輝いた。

「厭な埃だね。僕は此頃は何んだか歩くのが嫌だよ。足がだるくて。」

芳夫は埃が通り過ぎると漸く眼を開いてさう云つた。

「足がだるい？ 何處か身體が悪いんぢやないか。」

次郎は氣遣はしさうに彼の顔を見た。

「なあに。」

芳夫は急に笑顔になつて元氣らしく歩いてみた。併し彼は何となく物憂い心地であつた。彼は

次郎も孝一も彼の心地を知らない無關係な友達のやうな氣がして來た。空虚な胸の寂しさに彼は堪へられなかつた。「暖い心がなければ我が胸は永久に弱くまた滅びるであらう。恰も太陽がなければ萬物が絶滅するやうに。」彼はさう日記に書き附けた。

太陽は高く空に輝いて、地上の物は其の強い光の下に生育して行つた。太陽は光と熱とを送つて地球の上の總ての物に幸福を與へやうとしてゐた。それが初夏であつた。優しく靜かに流れてゐた小川の水は、兩岸の菜の花の野に別れ、暖い水に影を映してゐた櫻草をも後にして、漸く勾配の急な小石の多い川幅の廣い所に強い響を立てて流れた。初夏の自然は調子の高い音響が漂ふ廣い自由な音樂堂であつた。漸く其の縁を濃くして行く竝木、公園の榊の樹、あかだもの樹、其の葉擦れの音、其の間からは鋭い鳥の叫び聲が聞えて來た。地の底から流れ出る水音は深い調子の基音となり、木の葉の戦ぎ、鳥の聲は急速な倍音となつて、自然の殿堂は莊重な力強い樂音に満たされた。空に浮ぶ白い雲も柔らかい乍らに時々強く眼を射るやうな光を照り返した。

總ての人、總ての生物は、自然の輝きの間に若やいだ勇ましい心で生きねばならなかつた。總ての物は全力を盡して生きねばならなかつた。一瞬一瞬を些の油斷もなく其の生活の爲に努力し

なければならなかつた。……そして強く黄金色の光を野と空とに漲らせて太陽は西の山に沈んで行つた。

總ての光と色と輝き、其の中に芳夫の心と身とは弱く嘆息した。彼の心は何物とも知れぬ憧憬に満たされて却て寂しく、彼の身體は輝かしい自然の力に堪えぬやうに物憂く疲れ果てた。

母はそれを心配した。そして彼は醫師の診察を受けねばならなかつた。彼の肉體は矢張病に捉はれてゐた。醫師は病名欄に脚氣と書き付けた。

「もつと早く來ればよかつたなあ。用心しなければいけないよ。何しろ靜かにして寝てゐた方がよいだらう。」

醫師は若い彼に向つて氣さくな調子でかう云つた。醫師の云つた通り彼の病症は輕くはなかつた。彼の皮膚感覺は癩痺して來た。それは手から唇の方まで及ぼして來た。醫師の與へる苦い藥を呑み始めてから、彼は自分が病に激しく犯されてゐるのを自覺する事が出來た。心臓は異様に不規則な動悸をした。

彼は蒼褪めた顔をして、初夏のぎらぎらした光を避ける爲に、黒い傘をさして毎日病院に通つてゐた。彼は物憂く鬱陶しい心地であつた。そして其の冷たい顔には汗が滲んでゐた。醫師は色々薬を變へてみたり、痲痺した脚の筋肉に電氣を掛けてみたりした。そして醫師の表情は直接に彼の心を動かして、彼は不安な表情を浮べ始めた。彼は陰氣な顔をして待合室の堅い椅子の上で懐中時計と見較べ乍ら自分の脈搏を計つてみた。一分の間に彼の脈搏は惶しく百に近かつた。彼は自分の肉體に關して、過敏な神経を持つやうになつた。胃、心臟、肺、腸、血管、彼はそれら總ての位置が明瞭に感ぜられた。彼の皮膚は總體に痲痺して居乍ら、一種變體的に鋭敏に反應した。

或時彼は醫師の机の上に置いてあつた「臨床醫典」を聞いて、脚氣に就て書かれた部分を蒼褪めた顔をして讀んでゐた。其處には脚氣の様々な症狀が書かれてあつた。彼の病症は其中で最も危険なものに丁度あてはまつてゐた。其處には冷淡な文字で其様な症狀を呈する時は、大部分は恢復が不可能であると書かれてあつた。彼は暗い不安な心地に滿された。彼は一方に自分は其の

最後の運命に陥らないであらうといふ希望から生ずる空漠たる自信に多少慰められ乍ら、しかも自分の肉體の存在が危うい状態に脅やかされてゐる事を知つた恐怖から、呼吸の止るやうな不安を感じた。彼は身體を動かすのが恐ろしかつた。蒼黒く沈んだ顔をそつと舉げて、彼は窓の外に輝かしい日光の漲つてゐるのを眺めた。

病院の長い廊下には、初夏の涼しい風が吹き過ぎてゐた。彼は診察室の方へそろそろと歩みを運んでゐた時、一人の老人が彼の通る傍に倒れてゐるのを見た。灰色の皮膚は其の瘦せ衰へた顔にたるんで見え、彼は苦しげに肩を大きく動かして呼吸をしてゐた。老人の肉體は危うく斷崖の上で暗い谷底を脅やかされてゐた。老人は葦のやうに弱く細い手を廊下に突いて居た。其の體は光りが薄く、人をも見えず、聲も出ないやうであつた。病院は却つて人を癒す所ではないやうに見えた。不規則な弱い老人の呼吸が芳夫の耳に傳はつて來た。急ぎ足に看護婦を連れて通り過ぎた醫師も、横目にちらと老人の方を見遣つたのみであつた。芳夫の心は憤ほろしく、蒼褪めた頬に血が急に上つて來た。そして彼は通り過ぎて行く醫師の後姿を睨むやうにした。彼の心の中は混

亂した状態となつた。醫師は何の爲に此の病院に居るのだらう？ 何の故に病院があるのであらう？ 彼は大きな殿めしい廣い病院を呪ふべき物のやうに感じた。

併し乍ら彼もどうする事も出来なかつた。其時は既に彼の弱つてゐた身體は昂奮の爲に立つて居る事すら堪え難くなつた。弱い胸には心臟が崩れるやうに動悸が激しくなつて來た。彼はよろめく足を引き擦つて診察室のベンチ迄たどり着いて斜めに腰を下した。そして後に肱を掛けて額を抑へて暫らくじつとしてゐた。彼の胸苦しさは容易には鎮まらなかつた。其の間彼の胸の中には肉體が減びに脅かされる不安が、老人の微かな呼吸や、灰色の頬と共に入り亂れてゐた。怖しさに閉ぢてゐる眼の前には、あらゆる幻のみの前後の連絡もなく通り過ぎた。

漸く動悸の靜まつて來た頃、彼はまたそろそろと廊下の方に歩み出てみた。其處には既に老人は居なかつた。併し彼は矢張不安であつた。減びやうとする肉體を救ふ爲に斯うして病院に集まつて來る人々の努力を、彼は痛ましい心地で眺めてゐた。人々は診察を受けるだけの爲にも、二三時間も堅いベンチの上で哀れな顔を見合せ乍ら待ち合はせねばならなかつた。

九

彼は毎日壓へられたやうな心地で病院に通つてゐた。彼の病氣は急に癒る様子も見えなかつたけれど、恢復して來る健康の感じが次第に彼の身體を充たし始めた。併し病氣の爲彼の肉體が弱くなつたと共に、彼の魂も感じ易くなつて行つた。彼は小さい事にも涙組ましくなつたり、惱ましく感じたりしなければならなかつた。夕暮など取り集めて物悲しい心地のするのが、彼には却て心地よさを誘つて來た。

大きな病院の中で眼科の待合室だけは比較的明るい調子を持つてゐた。誰も息苦しいやうな病人ではなかつた。それは内科の待合室と較べて一つの著しい對照を作つてゐた。毎日人々は多く病院に集つた。眼を病ふ少年達は廊下を快活に走り廻つた。芳夫は脚に電氣を掛けて貰ふ時が來るのを待つ間、廊下をそろそろと歩いたり、佇んでゐたりした。

窓からは明るい空の調子が眺められた。鮮やかな木の葉の緑、空の青、軽い白い雲。芳夫はば

んやり外の光を眺めてゐた。彼は取り止めた考へに耽つてゐるのではなく、唯鮮やかな陽の光を懐しく眺めてゐた。

其の時玄關の方から一人の少女が歩いて来るのを彼は見た。彼は其の少女に就ては何事も知らなかつたけれど、此の廊下で屢ば彼女を見てゐた。何時も靜かに、時には沈んだ調子に、彼女は廊下を歩いて來た。

芳夫は歩いて來る彼女の方をじつと見てゐた。彼女は俯向いて物を思ふやうな姿であつた。其時彼女はふと顔を舉げて、芳夫の帽子のひさしの下から見える何事か考へ込んでゐるやうな瞳を見ると、軽く微笑して通り過ぎた。其の時白い美しい齒並がちらと芳夫の眼に這入つた。彼女は急ぎ足になつて眼科の診察室の中に消えて了つた。芳夫は彼女の後姿を見送り乍ら不思議な心地がして來た。彼女は何故彼に向つて微笑したのであらう？ 彼女は彼に挨拶をした様でもあつた。彼は彼女に挨拶を返したであらうか。彼には解らなかつた。唯彼女が微笑した時の笑顔があでやかであつたのは、いつもの見馴れた彼女に似合はしくない印象を與へた。

初めの印象の淡い其の面影が不思議に彼の胸に食ひ入るやうに離れ難くなつたのは何故か、彼には全く解らなかつた。それは彼の胸の中に築かれてあつた白い砂の城壁、其の中には何事が隠されてあつたか、彼自らも知らずにもた城壁が、彼女の瞳や黒髪などから流れ出て來る小さい感情の波の屢ば寄せて碎ける間に、いつ知らず崩れて行つたからであつた。彼女は少年よりも僅かに一つ年上であつたけれど、此の年頃の乙女心は少年の未だ知らぬ世界を既に經驗してゐた。何事も知らぬ少年の胸には、いつしか柔かく暖い風が吹くやうになつてゐた。芳夫は其の微笑が何事であるかを知らぬ間に、其の心は深く其の中に捉へられてゐた。それは恰も彼の心に不思議な天國が創造せられたかのやうでもあつた。彼の心は穏やかな春の霞に包まれて軽く睡るむ薄紅の櫻の花瓣であつた。彼の心は暖い霧の中にさざめく春の小川の歡びであつた。

併し乍ら病院の庭の楓の木の葉のうら若い淡い綠色が、次第に濃くなり増るに従つて、芳夫の心には漸く悲しい曙が目醒めて來た。白い薄い銀や眞珠の暖い雲がうつすりと通り過ぎると、其

處には意外にも真紅の大きな花が、暖い霧の間に不思議な笑みを湛へて咲いて居た。其の花は芳夫には始めの程は唯驚異の色彩であつた。彼の心は物語の王子のやうに、軽い足取は殆ど舞踏のやうに、心の嬉しさを其儘に、其花に次第に近付いて行つた。然し乍ら丁度此の時、彼の心には軽い疑ひが起つた。そして不思議な花の笑ひの意味が朧であつたのが、今は疑ひとなつて目醒めた。漸く彼の心には悲しみと苦しさが生れて來た。何處からともなく彼の意識の片隅に、戀といふ字が懐しく怖しく、始めの程は微かな色であつたのが、今は燃えるばかりに、鮮やかに、烙き附くやうに現れて來たのは、其後間もなくであつた。其後は淡い悲しみの中に少年の心は閉ざれてゐた。やがて梅雨の時が廻つて來ると、其の悲しさは重く深く彼の胸の底の方へと沈んで行つた。

彼女の姿は大抵毎日病院の廊下に見えた。そして彼等は病院の窓に並んで寄り添ひ乍ら取り止めのない無邪氣な話を取り交はすやうになつた。併し少年は彼女に就て胸の中に思つてゐる事を只管に祕め隠すやうにのみしてゐた。彼女とても少年の眼付や、彼女の軽い言葉にも動いて見

える顔色や、物云ふ時も真正面には彼女の腫をさへ見ない少年の様子が、何事かを示してゐるのを感じぬのではなかつたけれど、彼女は其の心地をいたはり愛撫するといふ程の心地であつた。

梅雨の空は其の日も重く曇つてゐたけれど、軽い風が吹き出して雲は少しづつ動き始めた。そして彼等二人が窓に倚つて眺めてゐる病院の庭は、急に雲間から漏れ出でた陽の光の下に、ぱつと照り輝いた。少年の腫には小さい池の彼方に淡い紫色の花が塊まつて一叢圓く咲いてゐるのが見えた。少年は其の名を知らなかつた。

「あれは何といふ花？」芳夫は指さして尋ねた。

「紫陽花。」彼女はさう答へたきり黙つてゐた。彼も黙つて明るく照し出された庭に見入つてゐた。

池には水蓮の花が涼しげに午前の風の中に眠さうに浮んでゐた。そして其の花の純白な色と、河骨の黄色とが穏やかな對照をなして水に落着いて映つてゐた。いくつかの花壇には西洋の草花が植ゑられてあつた。彼はネルを着てゐたけれど、少し暑さを感じた程であつた。

「あなたは中學に行つていらつしやるのね。」彼女は突然沈黙を破つてさう云つた。芳夫は先程か

ら急に照し出した陽の光を眩ゆく思つて紫陽花を眺め乍ら、其の名を口の中で小さく繰り返してゐた。突然な言葉に驚いて彼女の方を見たとき、彼女は彼の方に顔を近寄せて優しい調子で云つた。

「何年？」

「四年。でも病氣になつてからずっと休み續けです。」

「さうね。早くよくなると思ふわ。本當に御大事になさいね。」

彼女は低い聲でかう云ふと急に曇つた顔色になつて彼の眼を見詰めた。彼も其の沈んだ調子の中に誘はれて、黙つて水蓮の方に眼を遣つてゐた。彼はそれに對して何と云つてよいか言葉を知らなかつた。物を云はぬ二人の上に太陽はじつと照してゐた。

「まあ、綺麗ね。一枚取つて下さいな。」

彼女は今迄の沈んだ調子とは全く違つた、澄んだ快活な聲を出して、また少年を驚かした。そして窓に近く繁つてゐる楓の若葉が陽を透して映えてゐるのを指さした。其の時細い指先の爪の

色が美しく見えた。それは少年の方から手の届く所にあつた。彼は小さい葉を一つ彼女に渡した。彼女はそれを受取ると、唇に當てて軽く息を吹き掛け乍ら嬉しげに微笑んだ。少年の心も樂しかつた。

彼が病院から歸つて來た頃には、また雨になつてゐた。梅雨らしくしとしと降り濛ぐ雨は、窓の外に鬱陶しく繁り合つた林檎や梨や櫻の若葉をそば濡らして、木立と屋根とに濛ぐ雨は音もなく、彼の心はしめやかな梅雨の中に嘆いて居た。

芳夫は墨を濃く磨つて白い紙の上に榮子、榮子と書いてゐた。それは彼女の名前であつた。そして彼は夕暮が何時迄経つても同じ調子に續いてゐるやうな、薄暗い綠色の光の中で彼女の言葉を思ひ返してゐた。何事かそれに就て定かに思ひきめようとするのではなかつた。唯彼は青葉の繁つた中に、憂鬱な遣瀨ない心地となつて、何時迄も其の儘にしてゐた。雨はしとしとと小止みなく降り續けた。

彼は其の頃若く感じ易い心の中に、一瞬毎に高まつては消えるささやかな情緒の波——小波の

やうに寄せて來たり、暗く大きな雲のやうに胸に覆ひかぶさつて來たりする情緒の影を、歌に表はす事を何時となく覺えてゐた。彼は唯其の情緒の上へのみ生きてゐるかのやうに歌を作つた。彼の歌は彼の生活とは離れて、派手やかな光と色とに漲つてゐた。それは血潮のやうな紅と、薄綠色の初夏の爽やかな風とに包まれてゐた。彼は歌つてさへ了へば満足であつた。芳夫は彼女と彼の悲しさを戀ふる心から歌つてゐた。

其の朝は既に晴れやかな眞夏の日であつた。強い太陽の光は繁つた木の葉を透つて、廊下の硝子窓にきらきらと反射してゐた。併し朝は未だ早かつたので、光の強さ程には暑さは激しくはなかつた。窓からは涼しい風がそよそよと芳夫の白地の筒袖をかすめて吹き込んでゐた。

其の日は何故か彼女は病人らしく其の黒髪をぐるぐると束ねてゐた。彼女の淋しい顔は少し蒼褪めて見えた。彼女は芳夫を見るといつものやうに軽く微笑を浮べたけれど、やがて彼女の瞳には物悲しい冬の夕の淡い空のやうな光が漂つた。彼は笑顔をする事が出来なかつた。二人は何か

云ひただけであつたけれど暫らくは黙つて向ひ合つて立つてゐた。

「私ね、もう眼は大抵いいから、もう病院には來ませんの。」

芳夫は意外な事を聞くやうな心地であつた。

「さうですか。」

彼は唯さう答へた。物足りないやうな心地がついで芳夫の胸に起つた。

「それでもあなたも此頃は大分いい様子ね。おからだを御大切になさい。九月からは學校に行けるでせう。」

「もう大抵大丈夫なやうです。ですけれど……」

彼は何か云はねばならぬやうに胸の底の方から湧き上るものがあつたけれど、それを何と云つてよいか解らなかつた。彼は彼女がもう病院に來ないといふ事が淋しい生涯に踏み入るやうに思はれた。彼はさういふ心地に就て何か云ひたかつたけれど、適當な言葉を見出す事が出来なかつた。彼女も黙つてゐた。彼等は白々と浪立つ秋の水を互に見詰めてでも居るやうに寂しげに黙つ

て立つてゐた。

「ではお大事に、さよなら。」

彼女はさう云つて挨拶した。其の聲の調子と立脚から消えて行くやうに見えた彼女の小さい後姿とは芳夫の記憶から拭はれる事はなかつた。そして總ては終つたやうに見えた。彼の唇は遂に永久に開かれなかつた。そして魂のみは温やかに、いとほしく涙ぐんでゐた。

彼は水薬の瓶を手巾に包んで重い足取りで家に歸つて行つた。

十

教室の中には秋らしい冷々とした風が吹込んで、教壇の上には白墨の粉がはらはらと微かに動いて見えた。午前の日の光は鮮やかに照して、夏休みの間に思ふ儘に延び切つた校庭の牧草の間からは、蠡斯が其の強い刻むやうな旋律を響かせた。

「どうも僕の文法は解らんといふ話で困るけれども。」

教壇の上には西川先生が英文法の講義をしてゐた。芳夫は西川先生のはつきりした聲を聞いて居ると、よく先生の云つてゐる事の意味が解つた。瘦せた小さい先生は身體の割合には大きな後頭部を有つてゐた。黒眼勝なはずきりした眼はいつも輝いて、彼の顔はいつも蒼白く美しかった。彼は他の教師達よりは若々しく赤い唇を有つてゐた。芳夫は先生が時々講義の間に言葉を罷めて空の方を眺める表情に注意してゐた。芳夫には西川先生はいつも遠い空の彼方に空想を持つてゐる人のやうに思はれた。

先生は黒板に大きな字で Subjunctive と書いた。其時芳夫は白墨を持つてゐる先生の手が、十二三歳の少女の手のやうに優しく細いのを見た。

生徒は餘り熱心に講義を聞いてはゐなかつた。先生も時々言葉を罷めて窓の方を眺めた。空には秋らしい雲が明るかつた。それを見詰めてゐると芳夫は寂しく果敢ない心地がして來た。廣い空と地との間に自分の姿がかぼそく微かに思はれた。病後の身體は冷たい椅子に長く座つてゐると直ぐに疲勞して了つた。先生の講義は次第に彼の耳から遠ざかつて行つた。彼は河岸の雜木林の中を空想の中で歩いてゐた。秋晴の空から射す日は軽く明るく林の下草に泌み込んだ。何鳥か軽く歌つて枯葉を二三枚はらはらと散らして飛んで行つた。芳夫は軽く跳び上つて細い枯枝を折り取つた。

彼はまた河沿の道を水に揺めいて黄色に流れてゐる月の光を見詰め乍ら彷彿してゐた。空氣はしつとり四方から迫つて來て、遠く蒼黒い空は無限に擴がつて雲もなかつた。

芳夫は既に幸福の過ぎて了つた後のやうな、空虚な心を抱いて教室に居た。其の空虚を冷たい

風が吹き過ぎた。彼はいつもぼんやりした表情で、病後の蒼褪めた顔には血の氣が長く見えなかつた。獨りで寂しく生きて居ると彼は思つた。大きな無限な宇宙の間に、彼は自分の小さい生の姿を見詰める時、それは僅に存在してゐるといふだけで、運命の避け難い威力の下に、其の腫をすら擧げる事が出来ないで人は動かされてゐる。……彼はそんな事を考へてゐた。そして多くの時間は空想の間に過ぎて行つた。

次郎も孝一も變らぬ友であつたけれど、芳夫は前のやうに隔てのない心では居られなかつた。彼は心の中に何事かを秘めて彼等の前に立つてゐた。彼は何氣ない顔で居乍ら、それを打明けては云はなかつた。

孝一の室にはいつもアルコールランプや試験管や硝子のコップや藥品を入れた小さい瓶などが澤山並べてあつた。彼は其の頃殊に數理や化學の方程式などに興味と愛著とを感ずるやうになつて、その中に勤勉に暮してゐた。彼は租い机の上に微分や積分の本を重ねて置いた。芳夫は此の

小さい實驗室に彼を訪ねて話すのが好きであつた。亞鉛に硫酸を濺いで拵へた水素に火を點じたのを、孝一は其儘吹き消さずに置いて話してゐた。芳夫は時々其の方に眼を遣つた。

孝一は天才的な頭を持つてゐた。其の上彼はいつも冷靜で、落着いた快活さを持つてゐた。それで芳夫は彼の明晰な物言ひと、時には皮肉に聞える程な鋭い言葉を好まずにはゐられなかつた。

小さい實驗室の窓は西向きであつたので、秋の夕日が黄色に窓掛を明るくしてゐた。

「だつて犬のやうなものでも自分の利害といふやうな事は考へるやうだよ。」芳夫は云つた。

「僕は犬などには自分といふ考へはないと思ふね。あいつらは人が動いて行くと、それを摸倣して、いや摸倣するといふ考へもなく、自然に自分も動いて行くらしいね。」

「だつて自分が傷つけられたのと外の犬が傷つけられたとの區別は、犬にだつて解るだらう。」
「それは別さ。」

孝一は簡單にさう決つてゐるやうに云つた。彼等は其様な小さい事を始終議論してゐた。芳夫はあまり空想的であつたけれど、そんな話から次第に大きな人生の問題や、宇宙の問題や、神の

事などを導き出しては孝一と話してゐた。孝一はどの問題にもはつきりした考へを持つてゐた。芳夫はそれに一々満足する事は出来なかつたし、孝一も空想的な考へでは解決にはならぬと思つてゐた。併し二人の話は結局そんな問題に落ちて行つた。

孝一は話上手といふのではなかつたけれど、簡單に要領よく話した。それで芳夫は孝一の話を知りてゐる時には、不思議に殆んど物を云はぬ次郎の事を思ひ出さずにはゐられなかつた。彼の耳は此頃また少し悪くなつたやうであつた。學校では特別に色の白い彼に對してあらはな嘲罵の言葉を浴びせ掛ける者もあつた。其様な時次郎は唯おとなしく堪へて居ねばならなかつた。それを見ると芳夫はいぢらしく思ひ、殊更次郎に親しくした。彼に對する同情の爲に、芳夫は握り締めた拳が震ふ程悲しく思ふ事もあつた。其様な時彼は次郎の味方となつて、愚かな奴を一人一人次郎の前に謝罪させてやりたいと思つた。——二人は毎日一緒に學校から歸つて行つた。

或日彼は次郎が熱心な口調で讀む事を勧めて置いて行つた本を開いて見た。それはヘレンケラーの自傳であつた。其處には芳夫の氣も付かずに居た不思議な世界があつた。不幸な運命の下

に生れて来たやうに見えた女主人公は、實は幸福であつたと云はねばならなかつた。鮮やかな筆で描かれた女主人公の周囲の美しく明るい自然、芳夫はそれを讀み終つた時、ほつと溜息をついて、窓から月の沈まうとする空を眺めて空想を續けてゐた。其の時ふと彼は次郎が此の本を彼に貸した事を考へて、今迄の楽しいやうな心地は、急に哀れな暗い雲の爲に遮ぎられて、薄く鈍くなつて行く日の光のやうな心地となつた。彼は今どうしてゐるかしら。芳夫は餘り豊でない次郎の家庭の様を思ひ浮べた。彼は幾何學の本などを丁寧に本箱に仕舞ふだらう。彼の卒業を待つてゐる髪の白い小柄な彼の父はもう床に就いたらうか。矢張彼のやうに白く曇つた眼を持つた彼の美しい妹はもう寝た頃だらう。次郎が此の本を讀んだ時は、彼は少なからず喜んだに違ひない。芳夫はそんな風に思ひ續けて悲しい心地であつた。月は庭の木立の間に沈まうとしてゐた。彼は次郎や孝一の事を始終思つてゐたけれども、自分の心だけは彼等が知つてゐないやうに思はれた。心に秘めた事は彼等にも云はれなかつた。彼は自分の取りとめもない寂しい心地を獨りで守つてゐた。

十一

其の前夜から急に變つた天候は、激しい吹雪を一夜中町の上に吹き荒れさせた。吹き寄せられた雪は窓の前に小山のやうに積つて、殆んど屋根の雪と積きさうになつた。そして朝芳夫が眠を醒ました時には室の中は、積つた雪の爲に薄暗かつた。

其の日は冬の試験の最初の日であつた。往來は大通りに出る迄は全く雪で埋まつてゐた。往來は常よりは餘程の高い位置まで登つて、家並よりも高い處を通るやうになつてゐた。それは往來を通る人に常とは全く違つた感じを與へた。

大きな平たい雪は風の既に止んで了つた朝になつても降り止まなかつた。芳夫の新しい外套の金釦も忽ち綿で包まれたやうになつた。製麻會社の大きな煙突が中空に聳えてゐるのがぼんやり見えて、濁つた薄鼠色の空に溶けて行く煙は、一頻り細やかに降り頻る雪の爲に見えなくなつた。自然の微分子に過ぎないやうな人は雪の中で盡めてゐた。いつ迄経つても同じ色に擴がつて

るる濁つた薄鼠色の空は、沈黙して人を嘲つてゐた。そして枯れた林に失望の嘆息のやうな唸り聲を起させた。

靴とゲートルと頭巾との雪を拂ひ落して登つて行つた芳夫は、教場の前の廊下で、仲間が惶しく動揺した調子で集つてゐるのを見た。

「そんな不公平な事があるものか！」

「試験など受けるな、受けるな！」

「教場に這入らない事にしようじゃないか。」

そんな粗暴な聲が聞えて來た。群集は愚かに憤慨して居た。何故の不公平か芳夫には解らなかつた。然し群集は歴史の試験を受けないと云ひ張つてゐた。芳夫は群集の中に引き止められて、自分で自分の態度を如何に決定すべきかを考へる餘地もなかつた。其時彼等の仲間の中で最も小さい身體を持つてゐた孝一のみが、試験を受けるのが當然だといふやうに、一人群集を離れて教室の机に向つてゐた。群集は彼をも仲間に加へねばならなかつた。そして彼に向つて脅かすやう

な言葉を發する者もあつたけれど、彼は理由のない愚かさには煩はされぬ様な顔色で、矢張机に向つてゐた。

試験用紙を小脇に抱へて、西川先生が監督の爲に、靴を踏み締めるやうにして、何事か考へるやうに下を向いて靜かに歩いて來た。彼は最初は群集の動揺に氣付かぬやうであつた。群集は彼のやうな小さい弱々しい教師を追ひ退けて、不公平な、卑劣な教頭の前で——彼等は教頭をさういふ人物であると解釋してゐた——充分彼等の我儘を主張しやうとして揺動した。中には愚かな醜い高聲で罵る者もあつた。芳夫は其の群集の中から西川先生の方を眺めてゐた。

群集の騷擾の前に彼は驚いて首を擧げた。彼は立ち止つて何故の動揺かを理解しやうとする様に、いつもの通りの蒼白い顔で彼等を見渡した。美しい眼と唇とが稍暗く見えた。其時壓迫するやうに群集は意味の通じない叫び聲を擧げた。

「諸君達は何をしてゐるか。試験を受けたくない者は、こんな處に居ないで早く歸り給へ！」群集の總ての耳に彼の聲が靜かに強く響き互つた。そして群集の總ての瞳は、彼の深い靜かな瞳に直

視されてゐるやうに感じた。沈黙と静寂とが群集を包んだ。彼等は皆臉を伏せて、従順な羊のやうに列をなして教室に這入つて行つた。そして沈黙の間に答案に向つた。彼は何も云はなかつた。外には雪が重く降り積るのみであつた。彼はストーブの前に椅子を持つて行つて窓に向つて座つた。灰色の空は動かずに擴がつてゐた。それを見詰めてゐる彼は試験や群集の動搖の事を考へてゐた。

西川先生が學校を去る事になつたのは、新しい學期が始まつて間もなくであつた。それは主として愚かな他の教師達の間生きる事が、彼を煩はしく思はせた爲であつた。試験の頃の群集の動搖等も、其の醜い教師達の間感情の衝突が間接の原因となつて起つた事であつた。其様な間に生きるには、彼は餘りに純潔な心であつた。そして彼の挨拶を聞く爲に生徒は講堂に集つてゐた。誰も形式的な告別の挨拶を聞かうといふ者はなかつた。

彼は其の蒼白い顔を舉げて講堂の學生の上を見渡した。彼は何か云はうとするやうに見えた。

彼の眉は昂つて見えた。學生は急に静まつて、驚きの顔色で、彼の強い低音が莊重な調子で響いて來るのを聞いた。いつも下を向いて考へに耽るやうにのみ思はれる彼が、此様に立派な辯舌を持つてゐるのは、彼等には全く意外であつた。彼は言葉を續けて云つた。

「私は潔く諸君と訣れて行きたいと思ひます。教員の更迭の頻繁な本校の事であるから、諸君の中には私が此處を去る事に就て不快に思はれるかも知れません。けれどもどうか誤解のないやうにして頂きたい。私が此處を去るのは決して諸君に對する愛の少い爲ではない。北國の冷たい空氣と寒い氣候とは、残念乍ら此の弱い私の身體には堪え難いからであります。私は深く諸君を愛してゐます。」

さう云つて彼は言葉を切つた。學生は感動して猶言葉を續ける彼の黒い輝いた瞳を眺めた。

「然し乍ら、諸君、私は決して此の土地の氣候其物が悪いといふものではありません。唯私には此處は適しません。此の偉大な自然の中に在る諸君は實に幸福だと云はなければなりません。諸君の頬は眞に野に熱した林檎のやうに紅いではありませんか。どうか愚かな醜いもの手に陥る事

なく健全な發達を祈ります。私は猶云ひたい事もありませんが、今はもうさう多く云ふ必要はないと思ひます。」

彼はそれで急に言葉を切つた。學生は其の突然に驚かされて彼の方を見遣つた。校長は頭を垂れて講堂から出て行つた。其後に従つた彼は非常に昂奮してゐるやうに見えた。顔はいつもの通り蒼褪めて見えなければ、瞳は輝いて奥歯を噛み締めてゐた。彼は拳を堅く握つて、稍荒々しい足取りで講堂から歩み出て行つた。

學生はぼんやりして立つて居た。何故に彼が其様に昂奮してゐたのか芳夫には解らなかつたけれど、彼が學校を去るのは、生徒に對する反感でもなく、健康の爲でもないといふ事は、彼の言葉の調子でよく解つた。

多くの愚かで哀れな教師の間に忠實な心を持つて生徒をも隣人として愛してゐる教師は、其様にして去つて了つた。——西川先生は南の國へと去つた。

十二

平原を流れる河岸の雜木林は、葉が悉く落ち盡して、疎らな枝が交はつて、さながらに冬の光景であつた。平原が無限に續いてゐるやうに、雜木林も疎らに無限に續いてゐるやうであつた。大きな河には、薄青い水が、音を立てずに流れて行くやうに見えた。そして河と野との上に、霧が冷たく覆ひ被さつて、空が低く彼の頭に近く垂れ下つてゐるやうであつた。其の辯雜木林には何處から射すともなく、微明りが照して、全體は灰と乳との混つたやうな暖い調子であつた。

彼は何處から來たともなく、忍びやかに何物かを求めるやうに、林の間を彷徨つてゐた。

灰色な狹霧の間から、彼よりも丈高い氣高い乙女が、薄い紫色の面紗の蔭に隠れるやうにして現はれて來た。紅の色のやうに其の唇は美しかつた。彼は前からそれが榮子である事を知つてゐた。

「あなたはもう十八になつたのね。」

彼女の聲はいつもよりも澄んで柔らかであつた。

「ええ、十七、十八。十七と云ふのと、十八と云ふのでは、全く感じが違ひますね。」

「さうですか。——私は花の中ではコスモスが好きです。」

彼女は勝手に自分の云ひたいだけの事を云ふやうに見えた。

「ええ、あなたはコスモスの花のやうですから。」

「あの、私はあなたを思つてゐます。芳夫さん。」

彼女は芳夫の胸に充ち互るやうに、さう云つて、急に紫色の面紗の蔭に隠れた。彼女は噎り泣いて居るやうであつた。そして彼女は芳夫から次第に遠く離れて行くやうであつた。彼は小兒のやうに白い毛絲の帽子を冠つてゐたのが、眼の上に被さつて来るやうに感じた。霧が次第に濃くなつて行つた。そして薄紫の面紗は次第に淡く、見えなくなつて行くやうであつた。霧が芳夫の眼を覆ふやうにした。急に林は冷たくなつて、木の枝からも冷たい雫が垂れて来るやうであつた。淋しい風が、無限の涯から、吹き募つて来るやうであつた。彼は何も云ふ事が出来なかつた。

そして熱してゐる頬には、冷たい涙がはらはらと傳はつた。

芳夫は父の後から隨いて行つた。父と子とは無限に廣い野を旅してゐるやうであつた。兩側には荒れたやうに見える畑地が続いてゐた。そして一軒の百姓家が寂しく立つてゐた。赤い百合が笑ふやうに、黄色い向日葵が怒つてゐるやうに、紫と紅との蝦夷菊は嘆き悲しんでゐるやうに、其の百姓家を取り巻いて咲いてゐた。大きな音乍らうら寂しく、風が玉蜀黍の畑を渡つて行つた。そして蕎麥の花は風に揺られて白く慄えてゐた。空は灰色に被さるやうに擴がつてゐた。

父と子とはとぼとぼと沈黙の儘歩み續けてゐた。そして畑地を離れて、蕪れ果てた道を辿つた。其の道は人間が如何しても利用する事の出来ない、自ら火を發して燃えてゐる泥炭地を通り抜けてゐた。やがて道は砂地を辿つた。それは平原の道で、其の傍を深く速い水が、漲るやうに、褐色に流れてゐた。幅の廣い河岸に立つて、渡船を呼ぶ父と子は小さく見えて、白足袋を穿いた二人の足は、細く痛々しく見えた。

二人は河沿ひに歩いてゐた。やがて夕べの時となつて、俄に空の灰色の雲は西の空に切れて、其處から太陽の光が野の上に流れた。むらむらと平原の雲は、醗酵するやうに動揺して、様々の形に一時に變化した。太陽は沈まうとする瞬間に、其の大きな光體の輝きで、地球を満たしてゐた。幅廣く漲るやうに流れてゐた河、——それは野の姿から考へてみると石狩川のやうであつた。——その河は黄金色に映え互つて流れて、野の無限まで輝いてゐた。父と子とは歩みを止めて、夕べの輝きの中に立つて、大きな自然の間に沈んで行く太陽に向つて、振り向いて小手を翳してゐた。父と子とは何處へ旅するかを知らぬやうであつた。

十三

更けて行く夜は靜まり返つて、雪は音も無く降り積つてゐた。そして寒さは轟々と窓硝子に迫つて、芳夫の室の暖爐は既に消え掛つてゐた。窓硝子に氷り着いた水蒸氣は、取り止めもない繪模様であつたのが、次第に羊齒の葉のやうな模様に見えて來た。暗い空に星が三つ程何事かを豫示するやうに冷たく光つた、先程迄何か調べ物をしてゐた父も、既に床に就いたらしく、家の中には物音も無くなつた。

其時惶しく電報の呼び聲が聞えた。芳夫はそれを受取つて父の室に持つて行つた。父は既に床には就いて居たけれど、未だ眠つては居ないやうであつた。

「ああ、よしよし、一寸其の電燈を點けて行つてお呉れ。」

父は起き上り乍らさう云つた。實業家の生活をしてゐる父には、電報は珍らしい事ではなかつた。然し芳夫は父の室から退き乍ら、何故か、其の電報が喜ばしくない報知を齎して來たやうな

心地がした。

九〇

次の朝早く父は忙しさうに支度して旅行に出掛けた。其の朝は晴れやかに新しい朝日が、眞白な雪の上を迂るやうに輝いてゐた。地平線の方の雲は未だ濃い鼠色に沈んでゐたけれど、雪は太陽の光に蔷薇色に映えて、陰は美しい紫色であつた。鮮やかな冷たい空氣の心地よい朝であつた。芳夫の父が旅行するのも珍らしい事ではなかつた。併し彼は何か重く心苦しい感じで、父を玄關に見送つた。

其頃殊に感じ易くなつた芳夫は、一家を包む空氣が重苦しく澱んでゐるのを、氣附かずにはゐられなかつた。父も母も何事も云はなかつたけれど、父は殊に忙しげにしてゐたし、夜も更ける迄沈黙して、机に向つて仕事して居た。彼は疲れたやうな表情で歸つて來る事があつた。芳夫は思ひ做しか父の頬が此頃瘦せてゐるやうに思はれた。

それは決して突然な事ではなかつた。一般の經濟界の不況から金融が緩漫になつて、多くの事

業は其頃不運な破滅の境遇に逢はねばならなかつた。芳夫の父の關係してゐた或る銀行も遂に破産した。父の友の一人は、彼が經營してゐた會社の事業の破綻に心を疲らせた餘り、遂に其の正しい心を失つて、悲慘な死に自ら其身を委ねた。其等の新聞記事を、芳夫は暗い心地で讀まねばならなかつた。其等は彼の心には重荷であつた。

「未だお前に云はなかつたけれど、——お前にも大抵は解つてゐるだらうけれど、御父さんの御仕事の方も、此頃不景氣で思はしくない上に、銀行もあんな風になつたりしたものだから、家も今迄のやうにしてはゐられません。何も今どうと云ふのでもないけれど、お前ももう大分大きくなつたのだから、よく考へてものをするやうに。外の子供達には、そんな事は知らせる事はありませんけれど。……」

二階の廣い座敷の窓から下の町を見下してゐた母は、或日芳夫に其の話をした。彼女は此處迄云つて、外を眺め乍ら考へに沈んだ。

「けれど御父さんなどは、いつも眞面目に潔白に御仕事をなさつてゐらつしやるから、どんな事

があつても世間の信用だけではありませんから、矢張り御仕事の方はやつて行かれます。まあ、兎に角どんな事があつても勝手な我儘な考へを起さないやうにしなければ駄目ですよ。お母さんなども、此處から見ると、あの長屋の人達などは、此の寒いのにあんな着物を着て働いてゐるのを見ると氣の毒になります。それを思へば勝手な事などは考へてはゐられません。」

「ええ、ええ。」

芳夫は時々さう答へ乍ら、母の言葉を聽いてゐた。臆けな推察の中から、明らかな事實の前に彼は引き出されたやうなものであつた。母も其等の事を芳夫に告げねばならぬのは、哀れであるのを知つてゐた。それで彼女は凡てを和らけて彼に話したのであつたけれど、彼は母の言葉の片端からも、一家の經濟上の困難をよく推察する事が出来た。芳夫は其時になつて始めて、何事も知らずに楽しげに無邪氣にしてゐる弟や妹に就ても、考へねばならぬやうに感じた。

其等凡ては彼の心には重荷であつたけれども、彼は自分自身の苦痛よりは、父や母が苦痛の中にゐるのを思ふ事が苦しかつた。父の心では如何様な場合にも一人の紳士として——寧ろ武士と

して振舞はねばならなかつた。それ故彼は心の底に苦痛を抑へて置いて、笑顔で多くの人にも接せねばならなかつた。「人間は種々な境遇に堪えて行かねばならぬ。」彼は自分の今迄の長い生涯を振り返つて見て心に頷いて居た。そして彼は家庭でも食卓に座れば、幼ない子併にさへ相手になつて談笑してゐた。そしてなるべく家庭の空氣を明るくするやうに努めてゐた。それが殆んど彼の寛大な性格の發露であるやうに見えた。自分に對して嚴格な彼は、他に對しては常に緩やかな敵しの心を持つてゐた。

芳夫もなるべく軽い微笑を常に失はぬやうに心掛けて居た。併し彼の心の扉は常に閉ぢられてあるやうに悲しく重かつた。そして其様な時には反つて様々に亂れた思ひが、胸の寂しさを犯し騒がした。幻のやうに、友の顔や、學校の教師の表情や、自分では過ぎて了つた事と思つてゐる初夏の思ひ出などが、更に心の落着きを失はせた。——「榮子。」彼は心の底の底で小さくさう呟やいた。彼は彼女の事を思ひ出して反つて寂しかつた。彼女に自分が心に堪えてゐる悲しみと苦しみを告げたならば、彼女は彼に同情の言葉を與へるだらう。彼はさう思つた。併し乍ら彼の

他の心は彼を嘲るやうに云つた。——「お前は未だそんな事を考へてゐるのか。お前はもう坊ちやんでは居られないのだぞ。」

そして彼は父がかうして皆の前に居る時と獨りで居る時とは、全く違つた表情で居るのを苦しく思つた。

父は先程から母に向つて、其の夕芝居を見に行く事を勧めて居た。母の沈んだ顔色を見て、父は勵ますやうに云つた。

「田舎廻りにしては藝も中々立派だから。」

「はい、でも今日は寒いし、それに氣も進みませんから。」

母はさう答へて火鉢に手を翳して居た。彼女は一家が経験しなければならぬ苦痛を、そんな時には殊に何倍にもして考へて、胸を痛めてゐた。

「無理に勧めるのではないけれど、氣晴しになつて反つてよいかも知れない。——お前が心配し

てもどうもならないのだから。」

父は母にだけ聞えるやうに低い聲で云つて自分の室の方へと去つた。

芳夫は落着いた心地では居られなかつた。弟や妹などの笑ひ聲は賑かであつたけれど、家の何處かに不幸と暗の影が漂つてゐるやうに思はれた。彼は夕方の町の灯を見る積りで、賑かな通りの方へと向つて行つた。

黒い空には星が瞬き始めた。雪路の上には通りの店の灯が暗く影を映して、人通りも少なかつた。橋の跡が美しく照し出されてゐる平らに氷つた街路の上を、芳夫はぼんやりした心地で歩いた。遠く明滅するやうに見える灯が、次第に近附いて、眼の前に急に黄色に解けて、其の光は茫と四方に散るやうであつた。彼は心が稍軽いやうに感じた。そして暫らく歩いてゐる間に圓い月が山の端に登つて、町は明るく照し出された。枯れたアカシアの並木の影は、雪の上に寂しく美しく映つてゐた。銀鼠色の雲が月の光の中を明るく動いて行つた。

彼は心の中に波動のやうに高まつた時、靜まつたりする心の怪しい影を追ひ盡すのに疲れて來

た。取止めもなく思ひ惑ふのみでは、どうする事も出来なかつた。彼は自分の心を哀れに思つた。父と母とが苦しい壓迫の下に堪えて居る事を思ふのは、彼には今は最も深い悲しみであつた。そして彼は弟や妹の事を思つた。互に妨げともならず、互の援助をも強く要求する事なしに生きる事が出来た今迄の幸福が、其時始めて彼に意識せられた。今は彼等は彼よりも幼なく、随つて彼は彼等を保護するやうにして生きねばならない。併し彼は彼等の爲に何事を爲し得るであらうか。彼自身に就てさへ、彼は何事をも爲し得ないではないか。父と母とは子の爲にのみ苦痛を経験してゐるやうなものである。そして子は永久にそれを充分には知らずに、各の道を進むに忙しい。それが人間の負はされてゐる永遠に調和しない苦惱の一つの様に芳夫には思はれ出した。

彼は平らな雪路の上を何處ともなくとぼとぼと散歩を續けてゐた。其時厚い毛皮の外套を着た背高い二人の歐羅巴人の男女が、彼を追ひ越して行つた。彼は空想から呼び醒まされて、あはてた足取りで歩き出した。其時月がまた厚い雲の間に隠れて了つて、並木は黒く雪の中に立つてゐた。

十四

寒さの最も激しい時を過ぎて、野の雪は漸く堅くなつた。雪國ではそれを堅雪と呼んで、人々は木を切り出す槌などを、自由に其の上に動かす事が出来た。雪は堅く氷つて何處迄も續いた。

數百人の中學生は、曇つた空の下で、郊外の丘と野の上を兎を狩つてゐた。丘も谷も總て平らに覆はれて、急な斜面も雪の爲に緩やかになつてゐた。雪は總てを覆ひ、灌木林は埋まつて、柳などの枝先が雪の上に現れてゐた。十人程の群を作つて、彼等は手に棒を持つて、大きな兎を追つてゐた。丘の斜面の下には、網が張られてあつた。彼等は喜ばしげな叫聲を時々揚げた。

併し芳夫と次郎と孝一とは、外套の衣囊に手を入れた儘、群を離れて丘の反對の側の雪の上を歩いてゐた。そして次第に兎を追ふ群からは遠ざかつて、彼等の叫聲なども聞えない程遠く離れて歩いてゐた。

芳夫は其邊をよく知つてゐた。雪のない時ならば如何様な小徑をもよく知つてゐた。今は雪の

爲に總ての地勢が稍不明瞭になつてゐたけれど、それでも小川の流れてゐる處や、畑と芝原との境界などはよく判つた。

彼等は小さい丘の斜面に添ふて廻つた。其處に何の枯木か、衰れに蝕んだ葉が一つ附いた枝が、雪の上に出てゐた。芳夫は手を延ばしてそれを揺ぶつた。枯葉は容易く雪の上に落ちて了つた。

「少し休まうか。」

芳夫がさう云ふと、皆も其處に雪の上に腰を下した。其處からは左の方に雜木林が枝が疎らに見えて、遠くには落葉松の殖林が廣く擴がつてゐた。その彼方に、一里程の平らな飾りのない雪の野の彼方に、町があるのであつた。何處かの工場の煙が、眞直に灰色の空に騰つてゐた。野の上には重い光があつた。丘の裾を小川が緩い曲線を作つて流れてゐるのであつたけれど、今は見えなかつた。

芳夫は物憂く沈んだ心地であつた。そして皆は暫らく黙つて居た。彼等は先程から沈黙勝であつた。次郎が物云はぬのは不思議ではなかつたけれど、孝一さへも今日は日頃の快活と伶俐とを

失つて了つたやうに、物思はしげに芳夫には見えて、それが更に彼の心をも沈めてゐた。彼等は先程から學校が彼等に不必要な煩はしさを加へるのを愚な事だと云ひ合つて、其様な事を話したのみであつた。

「でも僕達ももう直き卒業だね。」

次郎は云つた。

「さう。」

芳夫は氣のない返事をして、孝一の方を見た。孝一が何か其様な時に、彼等を笑はせるやうな、巧みな事を云ふであらうと、彼は思つたからであつた。然し孝一は何とも云はずに眼を伏せてゐた。

「君は今日はどうかしてゐるやうに見えるよ。さつきから黙つてばかり居るから。」

芳夫は遂にさう云つて孝一の肩に手を掛けた。

「僕が陰氣に見える？少し困る事があるものだから。矢張り解るかねえ。」

彼は嘆息するやうに云つた。

「僕の父が悪いものだから。昨日診察をして貰つたら、どうも胃痛らしいと醫者が云ふから。醫者はそれでも氣休めを云つてゐたけれど、どうも大分病氣も進んでゐるらしくて、——あれは手術も出来ないつて。今になつて手術をすれば動脈を切るやうになるから、其の上齢も取つて居るし、其儘靜かに養生するより外はあるまいと醫者は云つてゐた。」

次郎と芳夫は突然な友の大きな不幸に、眞面目な眼付をして、傷ましうに孝一の顔を見た。

「まあ、さう長くは生きられまい。——然しどうもさういふ運命なら仕方もないのかも知れないけれど。僕は昨夕もよく寝られなくて、其事ばかり考へてゐなければならぬものだから。ぼんやりして何も解らないやうな頭ならいいと思ふけれど。其の辭矢張り又死ぬ時迄もはつきりした意識を持つてゐたいと、僕はいつも思つて居るから。」

「胃痛だからつて何も絶體に治らないと云ふ譯はないではないか。」
低い聲で次郎が云つた。

「いや僕も自分で慰めになるだけの事は、昨夕からすつかり考へてみたけれど。まあ、餘り心配しないで呉れ給へ。少し歩かうか。」三人は立ち上つて、丘を下つて、氷つた小川の上を渡つて、雜木林の方に歩き出した。三人は一つの重大な事を話した後の沈思に耽つて居た。

「今年の卒業生には醫科志望が多いやうだね。」暫らくして次郎が云つた。

「さう御醫者様ばかりでも困るだらうけれど。」孝一が淋しうに笑つた。彼は其頃になつて物理学を研究しやうと考へ始めてゐた。其等の問題は深く研究すればする程多様であつて興味が深かつた。そして其等總ての現象の奥に統一的な原理があるに違ひないと彼は想像してゐた。

「君達はそれでも上の學校に行つて研究をする事も出来るし、卒業しても張合があるだらうけれど、僕などはそんな事もし居られないし、學校を出れば直ぐ働かなければならないから、卒業といふ事が、僕には、君達よりは深い意味があるやうに思はれる。」

次郎は云つた。そして三人は夫々異つた時に生れたやうに、異つた運命を持つてゐた。

「學校に這入るといふ事は、研究や自分の發達にとつて、便利な事もあるだらうけれど、僕達は

どうしても上の學校に這入らなければならぬといふ事はないのだから。それよりは自分で満足した、落ち着いた氣持で、生活が出来たらばと僕は思ふね。」

芳夫は次郎を慰めるやうにさう云つた。次郎は彼の方を一寸見て、又靴先を見詰めながら歩いた。堅雪の上に三人の靴の跡が竝んで附いて行つた。

「君は矢張り文學の方を研究するやうに決めたの？」

芳夫の左を歩いてゐた孝一が、何氣ないやうに尋ねた。芳夫にはそれは重大な問題であつた。彼ははつきり決めたとも、決めないとも答へられなかつた。

「どうも未だ決められないのだけれど。僕はお前の目的はと聞かれるのが、一番困る事なのだよ。人間は矢張り何か職業を持たなければならぬのだらうか。併し僕には何をしたいのか解らないよ、ね、醫者、裁判官、官吏、銀行員、教師といふやうに、色々な職業を考へてみてもどれも出来ない事もなさうだけれど、どれにも満足は得られないやうだし、——僕はいつも、世の中に色々な人が居て、皆色々な境遇で暮して居るのを見ると、不思議な氣がする。大きな廣い空、

綺麗な花、僕には何か斯う不思議な謎のやうな氣がする時があるよ。僕はさういふ人生の問題を研究してみたいよ。校長が喧しく云ふ天職といふものがあるとすれば、僕のはまあそんな處だらうと思はれる。——それで若し學校にでも行くとすれば、僕の性格としては、醫科や法科に行くよりは、文科にでも行く方が適當だらうと考へて居るのだけれど、文學と云つても、僕など何も知らないのだし、シエクスピアのものやツルゲネフのものなどを、翻譯で少しばかり讀んでみたり、其外は雜誌など見る位なもので、一向解らないのだけれど、——併し學校の方はどうとも判らない。家の事情もあるし。——」

「御父様でも反對するのかい。」

「父には未だ話さなかつた。此間中から話さうと思つて居るのだけれど、話し難いものだからね。家の事情といふのは、つまり經濟上の問題なんだよ。——殊にそんな場合だから、父も賛成はしまいと思はれるし。けれど僕は此頃は殊にそんな事などで考へさせられる事が多いものだから。人生の問題などと云つても、容易に解るものではないけれど、つまり不思議な感じに打たれると

いふやうで。——倫理の時間に校長が云つたね。シヨペンハウエルといふ哲學者は、此の人生は苦痛で、この世の中は悲哀の谷だつて考へたつて。それが厭世説でいけないのだつて校長は云つたけれど、僕は此頃になつて、殊にさういふ考へ方の中に、深いものがあるやうに思はれるよ。」

三人は黙つて歩いて居た。彼等の靴の音のみが、ざくざくと聞えた。そして次第に夕暮の近附いて来る曇つた空から、細かい雪がさらさらと降つて來た。其の時遠く丘の彼方から、枯木の間を體操の教師の鳴らす集合の合圖の笛が聞えて來た。彼等は足を返さなければならなかつた。

「わざわざ御苦勞にも兎など捕らなくてもいいのに。」

「本當に！」

芳夫は諧謔と冷笑とを交へて孝一が云つたのに賛成した。耳の遠い次郎はうつかりして居たので、彼等が何か云つたのが聞えなかつた。彼は氣疎い目付で彼等の顔を見たけれど、二人は次第に激しくなつて來る雪の中を沈黙して歩いてゐた。次郎は外套の頭巾を冠つた。三人は俯向いて急ぎ足になつた。

十五

其の冬の終りから春に掛けて、芳夫の日記帳には、断片的に次のやうな事が書き付けられてあつた。

——自然の力は何物にも較べる事は出來ない。絶體的に強大である。人間は大きな宇宙の一分子たるに過ぎない。小さな私は、身體も魂も、全く自然の間に、其の意の儘に漂はされる秋の枯葉のやうなものである。

——強い日の光が鮮やかな白い雪を照してゐた。雪は銀のやうに輝いて、私の疲れた眼には眩し過ぎる程であつた。並木の影は長く、石造の西洋館の影は長方形に、雪の上に落ちてゐた。其の影は純粹な紫色で美しい。南の方から雪解時のやうな風が暖かく吹いて來て、外套を着て居る

と汗ばむ程だ。透き通つた水のやうな青空を見詰めて居ると、春の近付いて来るのが解る。其の癖私の心はどうも沈んで居るやうだ。

——ナポレオンの傳記を読んだ。私はどうも英雄崇拜などといふ心理は理解出来なかつたが、彼のやうな強い自我があつたならば、生活の上にも不安は感じなかつたかも知れない。彼は自己の力に對する自信があつたやうだ。私も矢張り力があつたらばと思ふ。力。自信。ナポレオンの母とナポレオンの最後が私の心を惹いた。

——人生の問題、文學、哲學。精神的な事業が物質的に困難を感ずるといふのはどういふ譯であらう。私は矢張り一家の事情などに就いても考へなければならぬ。——然し私は精神的に死ぬ事はどうしても出来ない。

父は東京の方から中國地方迄の旅行に出掛けた。父の努力や困難、其等を考へる時、私は最も

苦しい。

私は父の青年時代の事を考へる。維新時代の變亂、若々しい心を抱いて、華やかな希望の前に活動した父、そして今の困難。母の悲哀。私は自分の責任に就て深く考へねばならない。私の心は弱いのであらうか。私は勇氣がないのであらうか。私は榮子の事を思ふ。心の奥に彼女の面影が閃くやうに映つた。砂漠に咲いてゐた赤い花のやうに、私は私の過ぎた戀を眺める。父が旅行から歸つて来る頃には、私は中學を卒業して居るだらう。それ迄には私ははつきりと此の問題を考へ定めねばならない。

——運命を占ふやうな積りで、眼を閉ぢて、ぱつと聖書を開けて見た。人差指の指して居る處を讀んで見ると、斯う書いてある。

「我が子よ汝の父の教をきけ、汝の母の法を棄ることなかれ。これ汝の首の美しき冠となり汝の項の裝飾とならん。わが子よ惡者なんぢを誘ふとも従ふことなかれ。」甚しく不安な氣持に捉はれ

て来た。其時又私の内部から冷然と私を嘲笑するものがある。それが云ふ、「偶然で運命を占はうとするのは愚劣だ。」

併し少しも落着かない。矢張り不安だ。

——学校の愚な友人達は、此頃は毎日のやうに入學試験の事を話してゐる。私は次郎に同情する。入學試験を受ける事のみが、人生の目的のやうに彼等は話してゐる。うるさく悲しい心地がする。

——金井先生が漢文を講義してゐた。是が中學で受ける最後の授業だ。

「ああ、今日はもうお別れだから静かに。」

彼はさう云つた。併し皆は矢張り喧しかつた。私は怒りが激しく胸の中で燃えるのを感じた。私は騒かしい教室の中で悲哀を感じて、愚かな四方を見渡した。孝一が寂しさうに笑つて居た。

學校から歸る時、金井先生に門の處で逢つた。朽葉のやうに艶のない其の顔、衰れな眼、白い髪、先生はよぼよぼした足取りで雪路を歩いて行つた。

——雜誌文學は甚しく私の頭を腐らす。色々な作者の作品は、私に色々な刺戟を持つて來るけれど、其等は結局私に無益な疲労を加へるばかりである。彼等は卑しい問題や、愚かな言説を爲す事を、彼等の職業と考へてゐる。——私は無限に嬉しい事でも、堪へられぬ程の悲しい事でも、徹底的な心の激動を欲する。——今日は日の光が赤く雪を照して、山の色は霞んで見えた。林には霧が掛かつてゐた。——明日から私は試験を受けねばならない。やがて試験が済む頃には雪も解けて、懐しい土の香と草の緑、——私の頭は暗いやうな重い壓迫を感じる。

——卒業式、中學も終つたと思ふと、私には歎びや希望よりは、重く濃く立罩めた、怪しい悲しい心地である。

——夕方散歩した。私の心は死んだ灰の様に、何の興味をも感ぜずに生きてゐる。空、雲、木、其等總てが、私には唯荒れ果てた姿に見える。幼ない時からいつも懐しいと見た町の灯も、單に黄色な茫然とした色に過ぎない。私は何かを求めて與へられないのだ。そして自らも明らかに其の求めて居るものを知らない。

私は街を歩いて居て、若い女の美しい顔に私の心を惹かれて居るのを知つた。それは少なからぬ驚きと恥かしさである。私は彼女を深く思つて居ると云はれるだらうか。私は彼女の面影をのみ、神聖なものとして、私の胸に秘めて居たと云はれるだらうか。私は自分の心を驚きと恥かしさで眺めてゐる。

——お前は臆病者だ。お前には勇氣と努力とが缺けてゐる。

——夜中突然な苦痛に眼が醒めた。胸の動悸が甚しい。私は手で心臓の邊を壓へて居た。衰弱を感ずる。

——風が強く吹いて居る。蒔え出でて間もない中庭の草が揺れて居る。そして淋しい雨が不規則に滌いでゐる。果敢ない人生の無限の感じが胸の中を往來する。風が吹く。草が揺れる。

——私は河岸に立つて居た。川の水は黒く、波もなく、押されるやうに流れて居た。私の心も沈黙の儘に、川水と共に、暗に押し流されるやうであつた。其時大きな赤い月が、雲を分けるやうにして、中空に登つて來た。木の葉の戦ぎ、其の音、明るく照し出された山の雲。

——嗚呼遂に孝一の父は死んだ。彼の悲しみの爲に、彼の父の爲に、私は基督教徒のやうに祈りたい。彼は私の前では涙も流さなかつたけれど、彼の内心の動亂は私にはよく判る。春先の風

に塵埃は舞ひ上つて、其の中を行く白い葬列は影のやうであつた。私は彼の爲に祈りたい。彼も荒い人生の波間に苦しまねばならない。聾々と現實の痛ましきは彼を取り捲いてゐる。「總て運命と思つて諦めてゐる。」と彼は云つた。そして彼は又一家の異常な急變に伴ふ經濟上の整理などの困難があるにも拘はらず、「試験にさへ及第したら、學校にも行けるだらう。」と云つて居た。彼のやうな天才には其の道が阻まれてはならない。

——墓參の歸りだと孝一が寄つて行つた。彼と私とは今日は何故か新舊思想の衝突に就いて多く話した。彼は又急に鈴蘭の咲く野の傍を今日は通つたと云つた。そして私の顔を眺めた。私は去年の初夏彼や次郎と共に、鈴蘭を探りに行つた時の事を思ひ出した。緑の野の處々に白く塊つて其の花が匂つて居た。家に持つて歸つて机の上に置いておいたら、餘り強い香で頭痛がして來た。其でも私は其の香を嗅いで居た。私は親しい友とさうして取止めもなく、煩ひなくして居た時を思ひ返すと、寧ろ痛ましく思はねばならない。學校を出てから、次郎はどうして居るかしら？

十六

「無理にどうしてもといふのではありませんけれど、私の性質や傾向から考へて、矢張さういふ様にしたいと思つてお願いしました。其外の問題に就ても充分考へた積りですけれど。」

父は芳夫がさう云つてゐる間黙つて聞いて居た。彼は火鉢に火が少なくなつて居たのに炭を足して居た。微かに残つてゐた火は、やがて勢よくおこつて來るやうであつた。

芳夫はさう云つて言葉を切つた時、父の手許に眼を遣つた。彼はふと「埋火をかきおこして老の寢ざめの友とす」といふ、何かで讀んだ文句を思ひ出した。其時「父も老いた」と自分の心の何處かで溜息の様に囁く聲が聞えて來た。父は暫らくして云つた。

「もう何度も云つた事だから、お前にも大抵私の考へは解つて居ると思ふから、別に云ふ事はない。矢張それをやりたいと望むなら、やつて見るもよからう。」

芳夫は意外な事をでも聞くやうに、首を上げかけたけれどまた下を向いた。其時彼の心は躍る

やうに、彼の前には限らない光があるやうに思はれた。併しそれは一瞬の間であつた。其の光は直に消えて、彼は苦しい心地に沈んで行つた。彼は自分が無責任な我儘な行爲をして居るやうに思はれた。彼は許された時に、自分の心を振り返つて、責めるやうな心地が激しく起つた。其の時彼の歴へられた心は、言譯のやうに苦しげな聲で呟いた。「お前の取つた道は、それでも最も選ばれた道と云はなければならぬ。」彼は父の寛大な心の前に感激して坐つて居た。「哀れな心よ。」彼は自分がそのやうにして、父の敵しに對して歡びを酬いる事が出来ず、却つて諦めのやうな失望を與へて居る事を知つて、悲みの中に沈んで居た。

其の時母が茶をいれて室に這入つて來た。「鬼に角さう決まつた上は、氣を散らさず勉強するやうに。」——私はお前の考へて居る事はまだ少し單純に過ぎるやうに思ふけれど、——殊に文學や藝術の事は、若い時に考へる程容易な事ではない。然し自分の意志さへしつかりしてゐたら、それでよい。意志が最も大切だから。お父さんなども若い時には其の事にまだ氣が付かずにゐた。——それから物事は總て細かく嚴密に考へてやるやうにしなければいけない。」

父は其様に優しい調子で話し出した。そして母と子とは靜かにそれを聞いて居た。芳夫も稍輕い氣分になつて父の言葉を聞いて居る間に、いつの間にか忍び込んだやうに、彼の胸には楽しさが微笑み始めて居た。

——身體の弱い母と、老いて行く父とを残して、自分の途を行く？ 父の鬚に白いのが澤山混つて居るのを見ても、私は浮ついた心地で華やかな希望などを追つては居られない。私の心は不満足な空虚な感じで満ちて居る。——彼は散歩をしながら、物思ひに耽つて居た。彼の頭の中は不秩序に亂れて居て、纏りが付き難かつた。彼は自分の心を省みて、空虚な苦しさの中に居る事は解つたけれど、其の不満足の状態から遁れる術を知らなかつた。

空も地も、初夏の夕のしつとりした漏ひの中にあつた。雲に滲むやうに仄な月の光が、次第に明るくなつて來た。そして美しい雲の間から、圓い月が現れた。川岸の白楊の木の間から、黄色に月の光が、濕つた地の上を照し出した。川波にも月の光は咽ぶやうに揺めいた。其の麗やか

な光の中を、芳夫の袷には猶肌寒い風が寂しく吹いて居た。

芳夫は重苦しい心地で、自分の影が月の光に細長く照し出されるのを見詰めて居た。彼が進むと影も共に動いて来た。彼は許された広い野で、また道を失つた旅人の淋しさや、悲しさを味はねばならなかつた。彼は父、母、一家、其等に對して、更に一層直接な交渉の間に、自己が苦んで、而も自己の生命は蝕まれる事なく、其様にして自己の情意の満足が得られたならば、彼は如何様に幸福だらうと思つた。深く蒼く澄んだ夜の空は、月の光に明るかつた。其の空のやうに澄み互つた静かな心地は、彼には許されないのであらうか。彼は重苦しい心を動ますやうに、手や頭を振り動かした。併し彼は聽てまた頭を垂れて、とぼとぼと足を進めて行つた。彼の心は空虚のやうであつた。それは何物にも頼る事を知らぬ哀れな心であつた。

ふと黒い猫が彼の道を横切つた。彼は思はず足を止めて、叢の中に這入つて行つた猫の後を、ちつと見詰めて居た。其時突然に、彼の心には、此の哀れむべき状態からの遁れ處として、萬事を委し切る事の出来る主宰者を期待するやうな、一種の憧憬が閃いた。彼は神に祈る事が出来る

ばと思つた。白楊の木蔭で、月の光の間で、心から信じて祈る事が出来たら、彼は如何程幸福だらうと思つて、溜息をついて空を眺めた。彼は幼ない時の無邪氣な心に歸つたやうに、月を崇めるやうに見詰めて居た。彼の心も次第に澄んで行くやうであつた。併し乍ら其時また突然に、心の一方の暗の中から、誰かの叫ぶ聲が聞えて来た。「早き死か、長き戀か、狂か。」それは半ば權威あるものの聲のやうに、彼を人生の光明から遠ざけて、絶望の淵の方へと導いて行くやうであつた。彼はまた木蔭の小徑を川沿ひに歩き出した。月は明るかつた。

次の日の午前、父は芳夫や、彼の弟や、妹などと共に、公園の池に浮んで居る白いボートに乗つて居た。初夏の日の光は、軽く鮮かに池の面から反射して居た。ボートは軽々と水の上をこつて、小さい弟や妹は、歡ばしげに手を擴げて「速いよ、速いよ」と叫んで居た。彼は中學に通つて居る弟と共にオールを動かして居た。彼の心の底には、何か離れ難く固まり着いたやうに、惱まじさが動かなかつた。併しそれも初夏の明るい太陽の光と、水の自由さとの爲に、次第に解

けて行くやうに感ぜられた。彼は弟と顔を見合せて、力を入れて軽いボートを速く進めた。父は舵に坐つて居た。彼は新しい型の背廣を着て、緩やかに腰を下して居た。

「水を掛けちやいかんぞ。」さう云つて彼は小さい子の歡ばしげな様子を見て微笑んで居た。

芳夫は其時、池の岸の柳の木の影を、次郎が歩いて居るのを見た。それは確かに次郎であつた。彼はボートの上から次郎を呼んだ。併しそれは次郎の耳には餘り遠過ぎた。彼は池に添うて急ぎ尾に通り返して、町の方へと遠ざかつて行つた。芳夫は其の上彼を呼ばなかつた。

十七

——次郎さん。

君からの手紙を受取りました。長く君に御無沙汰をして居たのを咎めないで下さい。實は私も自分の生活などに就いて、種々心を煩はす事が多く、其の爲君にも御無沙汰になつて居ました。お手紙で君が寂しい石狩川の岸で馴れない仕事に就いて居る事を知り、君の様子を想像して、非常に感動しました。朝早くから日が暮れる迄、人夫の監督などをするのは、中々な事ではないと深くお察しします。顔も日に焼けて、元氣だと知つて、私は安心しました。色々苦しい事もありませうが、何卒忍耐して君の仕事に努力して下さい。私は人間の眞の努力が其處に在ると思ひます。私はあの廣々とした大平原の雑草の彼方に沈む夕陽を眺めて、大きな石狩川の邊に立つて居られる君が、たとひ今は小さい仕事でも、次第に其の努力の集り積ると共に、誰の前にも恥づる事なき程な、偉大な結果を齎す事を信じます。私はあなたが刻々に手を挙げ、足を動かし、言葉

を出して爲し遂げる、其の一瞬間の事業其物に、大きな価値があると考へます。次郎さん私は君のいつもの様子から考へて、君が一人の忠實な事業者である事を信じ、且望みます。空しい希望などを追つて、我々は暮して行く事は出来ません。我々は着實で地を踏み締めるやうにして、生活しなければならぬと思ひます。偉大な自然の中に、自由な空気を呼吸して居る君が羨しい程です。

私は七月の一日の夜汽車で孝一君と共に出發しました。仙臺で孝一君が下りてからは、馴れぬ長い旅に疲れて、車窓から見える平凡な、單調な景色に、倦み果てるばかりでした。何といふ長い單調な旅だらうと思ひました。汽車の進みが大變遅いやうに思はれました。

汽車が上野に近付いた時は曉方でした。そして太陽が杜の上に輝き昇り、百姓家の庭に蘇鐵の葉などが見えました。陽の光がきらきらとして居るのを見て、北國で育つて來た私は、矢張り此の邊さへ、南の國らしく感じました。車窓から見える、柔らかな草の生えた山には、殖林がしてありました。北海道の茫漠たる平原や、大森林を知つて居る私には、大變違つた、不思議なも

のをでも見るやうな、印象を與へました。上野に近づくに随つて、汽車と電車とが並んで走つたりしました。「忙しい東京」といふ考へが、私の頭に這入つて來ました。そして矢張私の心には上京といふ字の持つて居る甘美な調子が感ぜられました。それは殊に私が小兒であつた頃の追憶が、臙ながらも、東京といふ所をよい處と私の頭に思はせるからでした。けれどまた私の心には、試験の事や、其外色々な落着かれない問題が多い爲、私は不安らしい眼付で、車室の中の人を見渡しました。

併し私の東京に就て持つて居た臙な記憶は、夢の中の王國のやうに、何處かに消え失せて、影もありませんでした。雑踏、電車の騒音、醜い町の裝飾、けばけばしい色彩、狭苦しい道路に舞ひ揚る塵埃。そしてきらきらと暑い日の光は、瓦屋根を照して居ました。私は是が東京かと思ひました。是が都かと思ひました。今の世に、美しい靜かな空想の都を望んで居たのは過であつたのかと思ひました。それは兎に角として、私は自分が胸に抱いて居た美しい追憶、——小兒の時の臙な記憶にも、東京は靜かな綠色の町でした。——その追憶が一堪りも無く打ち碎かれて了ふ

のを、悲しいと思はずにはゐられませんでしたが。私は俤の上から、騒がしい東京の町に對して苦笑し、果は冷笑するやうな心地にさへなりました。此様な處では、人の魂の發達は、覺束ないやうにさへ思はれました。次郎さん。人間の心を孚んで呉れる大きな自然の中に居る君を幸福だと思ひます。自然は決して冷淡ではありません。

それで私は試験も受けました。私はぼんやりして暮して居ます。

石狩川の護岸工事に就て、私は君がもつと詳しい様子を知らせて呉れるやうに願ひします。君の健康を祈つて居ます。

——孝一さん。

私は先づ心から君の及第を祝します。私は前から思つて居ました。「天才の道を何物の妨げ得るものぞ」と。そして私は今、それが明らかになつたやうに思ひます。君は御父上の死の後に來た此のささやかな歡びに對して、今更のやうに大きな犠牲を拂つたやうな氣がすると云はれます。

君の心地には私も深く同情します。然も矢張私は君の前に光の道が延びて行くのを見て、歡びに堪へません。

私は君の歡びの前に、私の暗い心地を廣げて、君の樂しさに不必要な影を作るのを、残念に思ひます。けれど私は今は苦しさに堪へ難く、其の心地を君に訴へたく、せめてそれを慰めとしたいやうな心地でゐます。私は自分の落弟といふ事を知つた時は、思はず、「ああ、愚かだ」と呟きました。自分が愚かなのか、また其外の何物かが愚かなのか、私にも解りません。私は何とも云ひ難い愚鈍な心地がしました。次いで私は苦い經驗だと思ひました。私はもとより自分の努力の足りなかつたのに、氣が付かない譯ではありません。けれど私の心は、此様な處で、私の道が障礙に逢はうとは考へて居ませんでしたので、云ひ難い不調和を感じました。私は直にそれが父や母に大きな失望を與へるのを考へずには居られません。

私の此頃の陰鬱な心は、更に取付く島もないやうに沈んで行きます。其上此頃は暑さに著しく身體の弱つたのを感じます。私は瘦せたのが自分の眼にも解ります。身體のどの部分も不調和を

感じます。心臓の鼓動が激しく、脈搏が速く、私は惱ましい心地で居ます。

其上、此の數日は毎日の雨です。雨、雨。蒸暑く陰鬱に曇つた空からは、絶間なしに雨が降り注いで居ます。丁度私の沈んだ心の調子がそれに似てゐます。私は今になつて雨の怖しさを知りました。重苦しい空です。何故に自然は私の苦痛を憐んで、少しは恵みを與へないのでせう。せめて私の殆んど絶望に近い心に仰ぎたいのは日の光です。日の光を仰ぎたい！

私の心は乾枯びたやうです。私はもう戀人の暖い心などは、求めるに疲れ過ぎました。所詮人は全く孤獨の中から外に出る事は出来ません。人と人とは全く離れたもので、相互に何の係りもないもののやうな氣がします。私は雨に濡れて、街の中を歩き廻つて居ます。私は此頃では、自分の心に養ひを與へる術をさへ知りません。

——次郎さん。

洪水に就ての御見舞を有り難う。私の居る處は高臺ですから、別段な障りはありませんでした。

新聞には「東京市水に圍まる」等といふ標題もあります。私は今は自分をも、其他の何物をも、嘲笑したいやうな氣がします。君は私が平生の心地とは違つてゐるやうな様子らしいので心配すると云はれます。私は自分でも自分の心が哀れに愚かになつたのを知ります。實は私は北海道に直にも歸りたいと思つてゐましたのに、二三日うかうかしてゐる間に、もう汽車が通じなくなつて居ました。私は何事をも凡て嘲りたいやうな心地がします。人をも、自分をも。

私は此頃は晝寢をしたり、夜店をぶらついたり、活動寫眞を見たりして暮して居ます。そして其の哀れな姿を顧みて、涙ぐむ事もあります。私は自分で自分をどうする事も出来ません。私は伯母の家に、人々の親切な心盡しの間に居ながら、取留のない、慰まぬ心地で暮して居ます。私はじつとして本を讀んだり、物を考へたりして居る事は出来ません。私の心は疲れ果てたやうに、其儘其處に倒れて了ひさうです。私は刺戟ばかり要求します。

そして夜は中々眠られませんが、暑苦しさの中で考へる事は色々あるやうでも、結局私は老いて行く父や、身體の弱い母の事を考へます。そして私が此様に、自分の道に躓いた様になつて進ん

で努力する事も出来ぬ状態を顧みて、心に責められます。そして私は思ひ疲れたやうにとろとろとします。私は身體が疲れ果てました。

——孝一さん。

君は此頃毎日農科大学の化學教室に遊びに行き、硝酸銀や葡萄糖など御研究の由、羨ましく思ひます。私は其處の繁り合つた楡の大木や、小川や、クローバの原や、牧舎や、牛や、其等總てを思ひ出します。殊に夕暮頃は、斜めな夕陽が、緑の野に黄金色に流れ込んで、複雑な色彩を現して詩のやうな心地のする大學の郊内を私は思ひ出して、そして汽車がまだ通じない事を思ふと、また嘲笑の心地と腹立たしさを感ぜずにはゐられませんでした。

先日私は友人に連れられて、公園で音楽を聴きました。木の葉の濃く茂つた公園の小徑は、電燈があるにも拘らず、小暗い感じでした。そして人の心を浮き立たせるやうな進行曲の響が聞えて來ました。

私は其處でアカシアの木を見付けました。其の細かい葉が、強い電燈の光に照されて、夜の微風に戦ぎながら音楽に聴き入つて居る人々の白地の浴衣に鮮やかな影を投げ掛けて、其の影はちらちらと微動して居ました。それは眞に美しく、私は急に早く歸つて、アカシアの並木路を散歩したくなりました。

私は友人と銀座の方へ散歩しました。私の心は音楽を聴いても、そんなに浮き立ちませんし、銀座の美しい灯などを見ても心は動きません。矢張私は何か陰氣な心地で居ます。そして却つて美しい町に反感が起りました。私の新しい友人は都會人らしい、趣味の高雅な青年で、私が時々北海道の事を話すのを興味を持つて聞いて居ました。馬の牽く橋の話など彼を喜ばせました。

「こんな街に牛がゐるんですか。」などと彼は尋ねました。

「いいえ、町端れの寂しい草原などに居ます。」と私は答へました。都會の人には、牛が町の中で草を食んで居るなどと云ふ事は、想像もつかない事なのです。

私は先日鎌倉や江の島などを歩いて來ました。賑やかな面白い處には違ひありませんが、私の

今の心では、其邊りに樂しげにして居る人達は、全く無意味です。私はそんな避暑などをしてゐるやうな、ゆつくりした心地ではありませんでした。

それで私は自分の情意の不満足な状態に考へ廻らし、自分の魂の歩みに就て思ふ時、前途は總て暗黒なやうに思はれて、絶望に近い心地がします。私は此頃では、それでも稍落着いて考へる事も出来るやうになりました。それで矢張り私は反省がまだ足りなかつたやうにも思はれます。私はもつと自己内心に立ち歸つて、精細に考へて見る必要があるやうに感じました。

私の此頃の次第に沈んで行くやうな憂鬱は、自分の仕事に關する不安や、また落第などと云ふ事の爲、更に強調されて居る事は確かです。私はいつも父や母や一家などに對して、罪を犯して居るやうに感じます。少くとも善を爲しては居ないやうに考へられて、苦痛を感じます。私は此の矛盾の感じの間から、私の態度に就て考へて居る間に、私はまだ自分の苦しみ方が足りないのではないかと思ひました。其時私の頭には犠牲といふ字が閃きました。犠牲、自己否定、さう云ふ程の問題ではないかも知れません。けれど私は自己を犠牲とする程の覺悟が起つたらと思ひ

ます。自己の主張と否定と、是は小さい弱い私に取つては、かなり大きな問題のやうです。私は此の秋から冬は、北國に靜かに暮して、其等の問題を十分に考へ、そして私の歩みを幾分でも確實にしたいと考へてゐます。

十八

其の夏の洪水は東北地方の交通をも全く途絶へさせた。芳夫は遂に横濱から出帆する汽船で、北海道に歸らうかとも思つた。丁度其時秋田の方を通る汽車が通じたので、彼は上野から出發した。

彼が東京を去る夕べは暑さの激しい日であつた。彼は俵の上から、往來の緒い砂塵の中を蹴くやうにして通り過ぎる人々と、兩側の屋根に燃えて、眩ゆく反射する夕陽とを眺めた。そして物騒がしい街の騒音の間には、一日の疲れが既に何處ともなく混り響いて、車の轍の喧しい音の間から、死の様に、怖しい天地のあらゆる音の絶滅が窺つて居るかのやうであつた。彼は項垂れた並木の葉の緑が、暑さの前に怯えて居るやうなのを眺め乍ら、自分が歡びや楽しみみの爲でなく、父や母の許迄の旅をするのを考へた時、彼は急に氣が進まなくなつた。彼は歸省して、住み馴れた町を敢歩しても、彼の心は楽しくはならないだらうと思つた。そしてまた次の瞬間には、暑苦

しい東京の空に浮ぶ雲を眺めて、矢張り彼は北國の靜かな雪の中に歸つて考へなければならぬと思つた。彼は俵の上で、惱ましい夏を東京で過した日々を思ひ浮べ、其間彼を勞はつて呉れた伯母の家庭に、幸ひのあるやうにと思つて居た。

薄暗い電燈を灯して動き出した車室の中に、彼は煩はしい心地で、沈黙して座つて居た。時は一瞬毎に過ぎて、過去の闇の中に葬られるやうであつた。そして再び彼の意識に顯れて來ないものならよいと彼は思つた。一本の蠟燭を灯して人生の旅路を辿る時、未來の闇は彼には豫測する事の出來ない未知の國であつた。そして過去は矢張り闇の中に没して居るけれども、記憶はたとひ臆になつても、一度經驗した事は、全く消え失せて了ふ事はない。そして過去と未來との闇は、現在の弱い燭の光の國を、刻々に狭めるやうに、四方から迫るやうに、芳夫には思はれて心細かつた。總て四方から追ひ迫るものを退けて、光の國を益々輝やかにし、過去を葬つて、新しい生命の歡びに入る事が出來たらと芳夫は思つた。

併し乍らそれは取留めもない空想であつた。芳夫は直にそれに氣が付くと、益々暗い心地に沈

まねばならなかつた。彼は悩みから自分を救ひ出す爲に、其の悩みが何處から來たかを明らかにしやうと考へ始めた。然し芳夫の悩ましい心地も、明らかに是と定めて見る事が出来る動機から出て居るものではなかつた。彼はそれが深く自己の性格に具はつた必然性の顯れであると考へるのが、其の場合最も説明し易かつた。そして其様に考へねばならぬのは、彼には絶望的な事であつた。彼は途方に暮れて、武藏野の空に悩ましげに亂れて居る雲が、暗く闇に包まれて行くのを見て居た。暑さの爲に弱つた彼の身體は、疲労し易かつた。やがて彼はうとうとと苦しい眠りに落ちた。

彼は車掌に肩を揺ぶられて眼を醒ました。「誠にお氣の毒ですが、線路の流失した處がありますから、徒歩で連接する事になりました。」

車掌はさう云つて居た。車室から出ると、假プラットホームが粗末に造られてあつた。人々が其の上を長く續いて歩いて行く足音が、暗の中に物凄じく聞えた。濁つた水が嘯くやうな音を

立てて、其の下を流れて行つた。

芳夫は人々の間に、鞆を提げて歩きながら、息苦しく感じた。大きな野の小高い丘の上に、篝火が燃えて、物凄く其邊を少し明るくして居た。芳夫は此處が何處であるかを知らなかつた。併し彼は煩はしい心から、それを知らうとはしなかつた。空は塗り潰されたやうに眞黒であつた。月があつたらと彼はふと思つた。何處とも知らぬ野は、暗の中に水に荒らされて居た。彼は息苦しい身體を、沈黙の中に人々の間に運んで居た。

汽車はまたそれから何時間程走つたか知らなかつた。彼はふと眼を開くと、車窓からは空に白い光を照り返す雲が三つ四つ閃めいて居るのが見えた。そして其の間に月が隠れたり、顯れたりしてゐた。赤黒い血のやうな月であつた。烏羽玉の闇の中を、汽車は全速力で走つて居た。そして不思議にも一瞬間其の喧しい音の間に、千草にすだく蟲の聲が聞えて來た。遠くに淋しい赤い灯が見えた。彼は胸迫るやうな心地で眼を閉ぢた。

津輕海峽の空には、ちぎれ雲が速い風に追はれて、東北の方へと飛んで行き、荒模様を豫示して居た。そして沖合に汽船が出た頃は、波は甲板の上を洗ふやうになつた。疲れ切つた芳夫の身體は船酔の爲に苦んで、舷に碎ける浪の音は、怪しい調子に、彼の不幸な暗い心地に傳はつて來た。彼は理解出來なかつた。彼は何物にも頼る事が出來なかつた。そして彼は反抗的に、陰鬱な心の底から、叫び聲を擧げて居た。人生は苦痛である。そして何故か、一度悩みの道に歩み入つた者には、運命は飽く迄暗く重く附纏つて、彼には到底救ひは與へられないかと思はれる程である。

「唯自分一人で強く生きるんだ！」彼はさうより外には考へる事が出來なかつた。其處に神は在つても、彼はそれを信じる事は出來ない。彼は欺かれて生きる事は出來ない。宗教は愚人の據り處である。強者と賢人とは宗教を必要としない。彼は怖しくそのやうに考へて居た。船は激しく揺れて、彼の心は悲しみに沈んで居た。

そして其の悲しみは旅の終りに近付くに随つて強くなつた。彼は石狩の野の夕暮を走る汽車の窓から夕焼してゐる雲を眺めて居た。纏て其の燃ゆる様な光は、次第に薄く微かになつて、空には淡い影の様な雲が散つて、北の國の野には、夏乍ら涼しい風が吹いて來た。彼は悲しい心の底に沈み乍ら、彼の遁れ處を憶れるやうに、榮子の事を考へた。彼はそれを遠く過ぎ去つた幸福と考へてはゐたけれど、彼は屢々其の追憶に捉はれて居た。併し乍ら薄暗い車窓から野を眺めて居る彼は、彼女の面影さへ今は彼の胸に微かになつて行く様な果敢なさを感じた。彼は彼女の面影を鮮やかに思ひ浮べる事が出來なかつた。今は彼は全く孤獨の中に生きねばならぬ様に感じて、機關車の惶しい汽笛を、物悲しい心地で聞いて居た。

芳夫は其の若く傷つき易い心を次第に蝕まれた。彼はもう夢の中に生きる事を許されなかつた。そして彼は歸つて來た家庭に、苦しい心地で暮さねばならなかつた。彼は穩やかに守られて生きて來た自分の魂が、一つの障礙に逢つて、如何にたやすく亂され、またそれに依つて、彼の性格の基調が、如何なる傾向を持つて居るかを明らかにされたのを知つた。それは彼には苦痛であつ

た。彼は陰氣な心地で、自分の魂を常に省みねばならなかつた。

彼の父や母には、短い夏の都の生活の間にも、彼が多少變つた様に思はれて不安であつた。彼の感覺は無意識の間に明るい電燈の光や、派手な色の對照などに馴らされて居た。總て都の騷擾を煩はしく思ひ乍らも、彼の瞳の奥には、離れ難く都の美しさも消え難く残つて居た。そして彼は田舎の生活の單調に苦み始めた。前には明るく美しく見えた街も、今は薄暗く淋しい通りに見えた。人々は鄙びた姿と地味な衣を着て散歩をして居た。彼は總て物足りなかつた。兩側には暗いやうな小さな店が竝んで居た。

彼は散歩から歸つて來ると早く床に就いた。夕方から吹き出した風が激しくなつて、庭木を揺ぶつてゐる音が彼の胸に侘しく聞えて來た。彼の父は庭を造る事を好んで、始終庭に下りて手入れをして居た。彼は其處に植ゑられた若い庭木の成長の年數と、老いた父とを竝べて考へる時、胸迫る侘しさに堪へなかつた。

彼は弱い心から、孤獨に一人で強く生きる事を誇張して考へて居た。彼は惱ましい考への間に、

總ての落着きを失つて、惶しく片寄つた考へ方をのみして居た。彼の心には遠い、まことに調和した考へは浮ばなかつた。庭にはざわざわと楓の葉らしい葉擦の音が、絶間なく聞えて居た。

芳夫の暗く沈んだ心地は、決して偶然の事ではなかつた。それは運命の戯れが、彼の上に加へる打撃を豫示する嵐の前の空のやうに、何事もなく見え乍ら、既に重苦しい壓迫が窺はれた。

彼の若い命が、殆んど死に迄脅かされたのは、是が始めてではなかつたけれど、而もそれは餘りに突然に彼を襲つたやうに見えた。彼は初秋の朝の散歩に、ツルゲネフの「父と子」の世界に就て思ひ、纏て少なからぬ疲勞を覺え乍ら、それを餘りに暖い秋の陽の光の爲とのみ考へて、家へ歸つて來た。然し乍ら彼の顔は餘りに蒼褪めて居た。

「おや、お前、どうかしたの？」

母は氣遣はしげに尋ねた。彼は何事でもないと答へやうとしたけれど、其の時彼は既に物を云ふのさへ苦しく、突然な眩暈を感じて、母の前に倒れて了つた。それは餘りに豫測し難く突然な事であつた。唯彼も、また他の人々も、運命の測り難さを深く知らなかつたのであつた。

其時は彼は既に四十度以上の發熱であつた。醫師はチフスと診断した。彼の頭は氷で冷された。彼の意識は朧になつて了つたけれど、其間に苦痛だけは明らかに感じて居た。そして彼の身體は、燃えるやうな熱の間に悶えて居た。彼は此の苦痛から遁れる事が出來ぬのをもどかしく思ひ乍ら、次第にうとうと、朧な意識の中に、我を失つて行くやうであつた。

彼は釣臺に乗せられて、病院の方に運ばれて行つた。彼の意識は醒めては眠り、眠つては醒めた。彼は釣臺の上に這ふやうにして倒れた時、重く熱のある頭に、枕が冷やりと觸れたのに驚かされた。其時外には清澄な秋の空氣が漲つて居た。彼は誰かが彼の額の上に掛けて置いた白布を透して、秋の陽が生暖かく泌み入るのを感じた。彼は其の白布が煩はしく感ぜられたので、毛布の間から手を出して、少し右の方へとそれを動かした。彼の熱の爲に鈍くなつた眼に、木々の葉が眩ゆく映つた。併し其の強い色彩が眼に入ると、彼は急に眩暈を感じて苦しかつたので、彼はまた白布を額の上に引き擦つて來て、じつと眼を閉ぢた。釣臺の動搖は次第に激しく、彼はまた朧な意識の中に眠つた。然しそれは快い眠りではなく、壓へられるやうな苦しさであつた。……

：病院の女關に差掛る頃、彼はふと父の顔が眼に這入つた。父は嚴重な顔色で彼の顔を覗き込んで居た。……彼は病室の寢臺の上に看護婦に抱かれて運ばれて居た。彼がよく知つて居る醫師が其の太つた顔に、親しげな色を見せて、彼の顔を覗き込んで居た。

彼は總て何事も忘れて了つた。彼の身體は怖い敵の前に、自ら防ぐ術を知らぬ程、激しく脅かされて居た。其時の彼の悩みは純粹に肉體からの悩みであつた。彼が病室に運び入れられてから、一週間程の間は、彼は全く意識を失つて居た。眼を閉ぢて居るかと思へば、白い眼を天井の方に向けて開いて居た。彼はうとうととして、眠つて居るか醒めて居るか、區別の附かぬ間に生きて居た。そして突然に大きな聲で讒言を云つた。其間苦痛が絶へず彼を襲ひ、彼は哀れに惱えて居た。

病症は最も危険であつた。彼は始終讒言を云ひ續けて、苦痛の止む時はなかつた。そして激しい熱の發作の爲に、彼は寢臺から飛び下りた。數人の看護婦は流石に驚いて、彼を寢臺の上に連れ戻つて、猶ほ身體を動かして惱えて居る彼を壓へ付けて居た。

一週間程の間彼は意識を失つて居たけれども、然し安らかに眠る事は出来なかつた。醫師は其の不眠症を氣遣つて、赤い紙に包んだ、味のない麻醉劑を彼に與へた。然しそれは單に彼の眼を閉ぢしめるのみで、苦痛は云ひやうなく彼の心を壓迫して居た。彼は絶へずいらいらした心地で惱え續けて居た。

四十度以上の熱が急に三十六度以下に降り、忽ちまた四十度以上に昇つて行つた。醫師は暫らく黙つて彼の病床の傍に立つて居た。そして彼の疲れ果てて汗ばんだ額を眺め乍ら考へて居た。總て彼は看護婦に支度を命じて、病人の心臓の下の邊に注射した。そして彼は猶ほ何事か看護婦に命じて、其の室を立ち去つた。病人は何事も知らなかつた。

其時病室の外には診斷を終へて來る醫師を待つて、芳夫の母が氣遣はしげに立つてゐた。「如何で御座います、病人は。」

彼女は醫師を見ると直に尋ねた。

「左様。」

醫師はさう云つた儘、暫らく黙つて居た。彼女には直に解つた。矢張り悪くなるばかりかと思ふと、彼女は深い失望の中に沈んだ。醫師はそれきり暫らくは何とも云はなかつた。「あの、手落だけは御座いませんやうに。」彼女は醫師の顔を見上げて云つた。

「いや、其點は御心配なさる事はありません。病院では出来るだけの事はやつて居ますけれど、何分にも御病人の症状は、どうも甚だ危険ですから。尤も決して失望なさるには及びませんけれど。——兎に角今夜が最も大切な時です。今夜さへどうか過せましたら、まだ御病人もお若い事ですすから。」

丁寧な醫師は其處迄云つて口を閉した。母の心は暗く沈んだ。

「一寸病人の様子を見て参りましたも、よろしう御座いませうか。」

「いや、それはお止しになつた方がよろしいでせう。何分にも今あなたの御顔が見えては、急に感情が昂奮したりして、熱が上つたりしますといけません。病症に急な變化が起りますと、取返しがつきませんから。それに傳染病室にはお這入りにならぬ方がよいです。」彼はさう云つて歩み

去つた。

然し母は其儘芳夫を見ずには歸られなかつた。彼女は看護婦に頼んで、そつと入口の戸を少し開けて、芳夫が白い毛布に包まれて居るのを見た。彼は眠つて居るやうであつた。母は涙を泳へてそれを見て居た。

醫師は長い廊下を獨りで歸つて行つた。彼は診察を済ませて來た病人達の上に、軽く思ひ廻らして居た。そして芳夫の事を考へた時に、少し頭を傾けて、右手を衣囊に入れながら、低く呟いた。

「どうも仕方がない。」

然し乍ら、芳夫は次の朝には、稍落着いて見えた。そして其後は、醫師も不思議に思つた程、穏やかに日々が續いた、病は既に其の最も峻しい山路を通り越したやうに見えた。そして芳夫は漸く次第に健康を恢復して來る望みを、總てに現はして來た。次第に低くなつて行く順調な熱に

も、また食事にも。

そして彼は其の疲れ果てた身體を仰向けに床に臥せた儘、秋も終る頃の寂しい陽の色が、病室の硝子窓から、忍び込むのを眺めたり、他の病室から傳はつて来るしはぶきの音や、廊下を忍びやかに通る看護婦の足音などを聞きながら、或時は過ぎ易く、或時はたどたどしい一日を、ぼんやりと暮して居た。

臚であつた意識が明らかに従つて、彼は退屈に堪へねばならなかつた。天井を張つた細い板を、一枚一枚と數へ盡して了ふと、もう其日は何をやる事もなかつた。疲れ切つた頭は、何一つ纏つた考へを蓄へて置く事も出来なかつた。そして日々は過ぎて行つた。

或日の夕方、病室に薄暗く電燈の灯つた頃の事であつた。電燈には病人の眼を刺戟しない爲に黒い布が掛けてあつた。夕方熱があつて、夜になると落着くのが、其頃の彼の徴候であつた。薄暗い光がぼんやりと病室の隅を残して、臚に照し始める頃になると、彼は疲れた身體の置場に困

つて、取換へたばかりの水枕の堅さに苦しんで居た。彼は身體を動かす程の氣力もなく、仰向に寝た儘、手を延して看護婦に脈を計らせて居た。看護婦は病床日誌に熱や脈の數を誌し終ると、其處にあつた椅子に腰を下して、彼を慰さめるやうに何事か話し始めた。彼女は二年前に彼が毎日病院に通つて居た頃から、此の病院に居た看護婦で、彼が此の病室で、漸く意識を恢復して來た時、見知つた彼女の顔を思ひ出す事の出來たのは、少なからぬ喜びであつた。彼女は僅か見ぬ間に彼が非常に大人びたと云つた。

芳夫は心が落着いて居なかつたので、彼女の話を、唯ぼんやりした心に聞き流して居た。併し彼は遂に其儘ぼんやりして居る事は出来なかつた。それは彼女の話の間に、榮子といふ言葉が、突然に彼の心に錐を突き刺すやうに響いたからであつた。

「榮子さんはそれはお可哀さうでしたよ。丁度此の室でお亡くなりなされたのです。」
彼女は左程驚くべき事ではなく、唯同情すべき事のやうに、靜かな調子で話して居た。
「本當にあの頃はあなたとは仲よしでしたね。丁度あなたの姉様のやうでしたね。」

彼女は優しい聲でさう云つた。そして彼が餘りの驚きに、殆んど息も吐けぬ程に、眼を閉ぢて居るのを、靜かに彼女の話聞いて居るやうに思つた彼女は、其頃の事から、彼女が入院して居た頃の事を芳夫に話した。それは退屈に倦んで居る彼には、耳新しい事だらうと、彼女は思つたからであつた。芳夫は然し乍ら、彼女の話が聞えなければよいと思つた。然し聞かすには居られなかつた。彼は耳を澄まして、どのやうな小さい聲をも聞き遁さなかつた。

「あんまり熱が下らないものですから、何もあがられませんでね、それが不思議にお亡くなりになる前の日に、卵の半熟を大變おいしいつて、おがりになりましただけで、もう駄目でしたの。」

芳夫は身體が震へるやうであつた。彼はもう其時の彼女をはずきりと思ひ浮べる事が出来た。次第に薄らいで行つたやうな面影は、今は却つて鮮やかに、まざまざと彼の眼の前にあつた、慄ましげに熱に疲れ果てて。芳夫は頭を右の方へ少し動かした。

「それは嘘だ。偽だ。そんな事はない。」

彼は心から其事を全く思ひ消さうと努めた。併し乍ら最も單純に語られた事は、最も深い眞實

を含んで居た。彼はどうしてもそれを思ひ消す事は出来なかつた。

其の夜は彼は胸と手足とが震へて、悲しさの間に憐れに惱んで居た。そして暫くは堪へ難い思ひに惱へて、暗い電燈の下で、毛布に顔を押し當てて、死人のやうに動かなかつた彼は、纏て苦惱と悲哀とに疲れ果てて、氣絶するやうに眠つて了つた。……彼の寢て居た病室は、何時の間にか燃え盡して、黒焦になつて居た。彼の寢臺は焼け朽ちて、見る眼も痛ましく、黒い土の上に野獸の死骸のやうに横はつて居た。ふと氣が付くと、彼自身の身體も、半ば泥に塗れて、濕つた、きたない土の上に倒れて居た。そして倒れて居る彼の眼に、釣臺に乗つて此の病院の女關に差掛つた時に見たと同じやうな、嚴重な眼付の父の顔が映つた。彼は此様な無殘な姿を父に見せるのが堪へられぬ苦痛であつた。父は其の武士らしい顔に、あらゆる忍耐と苦痛とを顯はして、じつと彼の顔を見詰めて居た。芳夫は身體と魂とのあらゆる力を振り起して、倒れた肉體を引き起さうと努めた。……夜も餘程更け亘つて、看護婦も寢靜まつた頃であつた。芳夫は不思議に落着いて居る自分の心を訝かり乍ら、瘦せた肋骨の上に手を當ててみると、空洞からでも響く

やうに、心臓の鼓動が極めて靜かに、しかも調子よく響いて居るのを感じた。夢であつた、と思つて眼を舉げると、物音の無い室には、黒紗を透して照す赤黒い死のやうな光が鈍く満ち亘つて居た。もう秋も終る頃の寒い夜風が、冷たく窓硝子の外を吹き過ぎると、狂人を收容してある七號室の方から、彼等が眞夜中に躍り狂ふ足音が、亂雑な、然し乍ら陰氣な拍子に、とんとんとんとんと響いて來た。其時芳夫の瞳は氷のやうに冷たく冴えて來た。死から蘇つた人ででもあるやうに、彼は空虚な眼を睜つて、長い間薄暗い鼠色の壁を見詰めて居た。

限りなく澄み切つた瞳と、限りなく冷靜な頭で、壁の一隅に見入つて居た時、彼は其處に白い服を着た看護婦が、其の壁を後にして立つて居るのを見た。彼は日頃此の病室に出入する看護婦の中の誰だらうと思つて、暫らく無心に其の顔の邊りを見詰めて居た。薄闇の中に暫らくは誰とも見え分かぬにも拘らず、彼の心は別段強ひて早く、其の顔を見分けやうとするのでもなかつた。然し乍ら暫らく其の眼許を見詰めて居た芳夫は、其時始めて、眞に突然に、榮子の顔を思ひ出した。榮子が看護婦の服を着て、其の懐しげな目付で、彼の方を見詰めて居た。

「丁度此の室でお亡くなりなされたのです。」物靜かな言葉が再び彼の耳の底で鋭く響いた。芳夫の心は其時少しも動かなかつた。彼の心は震へながら、美しいものに誘はれるやうな心地であつた。彼は紺碧の清い青海原に、身も魂も共に沈み果てるやうな快さを感じた。彼は最も冷靜に、限りなく強い、大きな迷信に捉はれて行くのを感じた。彼は冷やかに微笑んで居た。彼は其時程平らかな靜かな心を、其後一度も經驗した事はなかつた。彼の瞳に漂つて居た微笑の色は、其の一生を神に捧けて、あらゆる禁慾を経た、有り難い聖僧が、自ら天國に招かれる時の瞳の色のやうであつた。……………

翌朝また熱が昇り始めたのを、看護婦は驚いて醫師に報告した。醫師は氣遣つて色々な質問をしたけれど、芳夫は蒼褪めた顔に微笑を浮べて居るのみで、何とも返事はしなかつた。

其後徐に芳夫は落着いて行つた。そして次第に彼は平生の意識を恢復して來た。何時の間にか秋が去つたとも知らぬ間に、或日病室の窓に初雪が降つて來た。

「入院なさつてから五週間位ですね。」

看護婦のさう云ふ聲を聞き乍ら、彼は寢臺の上に仰向に臥して、大空高く眺め入つた。見渡す限り広い大空を、横に流れる無限の大川の様に、雪の片が動いて居た。下に降るのかどうかは解らなかつた。唯雪の片が動いて居るのが、彼の眼に這入つて來た。彼は今度は腹這ひに寢臺の上に身を投げて、窓の外を遠く眺め遣つた。雪は灰色に降り降つた。斜に吹き付ける雪もあつた。木々の葉は大抵凋落して、佗しい初冬の野の姿が、むき出しに芳夫の瞳に映つて來た。かれがれになつた芝草の上に、雪は音も無く落ちては消えて居た。芳夫は此時佗しさが緊々と身に迫るのを感じた。暫らく離れて居た人の世の懐しさが、彼の心を強く襲つて來た。人間らしい色々な感情や物思ひが、彼の胸の中を亂れて通つた。此時始めて芳夫の心は再び此世に蘇つた。

病は遂に彼を離れて去つた。熱も平生に復して、其後二週程経つてから、彼は遁れる様に退院した。彼は振り返つて病院の大きな建物が黙つて立つて居るのを見た時は、其中に秘められた様々の悲しさや怖しさが、彼を嘲る様にも思はれ、彼を憐む様にも思はれた。自分乍ら驚く程瘦せ

た身體を、斜に寄せ掛けて、彼はそろそろ俣を進ませ乍ら、自らの心の經驗を顧みて、寂しい微笑を漏して居た。

或日、彼は暫らくつけずにある日記の頁を繰つて見た時、ふと入院する一週間程前に、「榮子の悲しい運命と云ふ様な事が思はれる。彼女の顔立と姿とは、何事か其様な感じを示すものがあつた。」と書かれたのを見出した。彼はそれを書いた記憶はなかつたけれど、明らかに彼の手蹟であつた。彼は云ひ様の無い驚きを感じ乍らも、暫らくは暗い眞面目な顔で、其の文字に釘付にされた様に見詰めて居た。然し遂に彼は病後の寢れた顔に寂しい微笑を浮べて黙つて居た。

今は芳夫は榮子の事を自由に考へる事を許された様であつた。彼は果敢なく佗しい心地で四方を見廻して、廣い世に孤獨に生きる自分を憐んだ。今は彼は榮子の事を考へても、心は惱まなかつた。唯彼は彼女が哀れであつた。彼は果敢ない心地で、彼女の魂の安らかな眠りを希つて居た。そして病後の疲れた身體を養ふ爲に、何物もない寂しい冬は、彼を包み始めた。廣く涯なく曇つた空は灰色であつた。其の空の様に、彼の心は全く空しく、佗しくなつて居た。

病後の弱つた身體を勞はり乍ら彼は冬の始めをばんやり暮して居た。彼には總てが味氣なく思はれた。彼は是から廣野の限り無い黄昏を、何處迄も旅して行かねばならぬ様な心地がして居た。彼は病院に行つて醫師の診察を受けて居た。長く彼は身體が十分に恢復しなかつた。未だ血の氣の無い暗い、紫色に見える爪を見乍ら醫師は云つた。

「此様な事ぢや困るから、未だ十分注意しなければ、……何しろすつかり丈夫になる迄は、餘程大切にしなければいけないよ。」

彼は頷いて窓から冬の空の平らな一色を眺め遣つた。——彼女はもう此の病院にも居ない。其外何處迄旅して探しても、彼女は生きては居ない。それはもう否む事は出来ない事實だ。併し彼女に對する自分の感情には變りはない。併しそれは不思議な事ではないか？ 併し生と死の間には、果して嚴重な區別があるだらうか？ 生も死も變りはない。自分は彼女を戀して居なかつ

たのかも知れない。あの人生の奥深い神祕の前に、高い懷疑と苦惱とを持つた儘に、若く倒れた偉大な獨歩が、「戀を戀する人」を考へた様に、自分は戀の爲に戀をして居たのかも知れない。併し乍ら彼女は今は却つて自由な世界に生きて居るに違ひない。彼女は何時も清い心で自分の思ひ出の中に生きて行くに違ひない。彼女の事を考へるのは、自分の胸を淋しく哀れにする。けれど死が彼女を更に悲しい運命に沈めたのではない。彼女は今は自由な世界で楽しく生きて居るであらう。さうでなければ、彼女に懐れる、靜かな淋しい自分の心地は、説明する事は出来ないではないか。——芳夫は其様な事を考へ乍ら、病院の窓から、單調な午後冬の空の色を眺めて居た。病院を出ると、彼の弱くなつた皮膚には、冷たい空氣が泌み渡る程であつた。外套の襟の天鷲絨に頬を埋めて歩いて居ても、鼻と耳とは冷々と感ぜられた。既に北國の冬は總てを包み始めて居た。雪は既に野も山も街も木も屋根も悉く覆ひ盡した。そして物の音は靜まつて、夕暮の近寄つて来る雪の町の上には、丁度芳夫の胸の慄へと調子を合せる様な、淡く悲しい情調が漂つて居た。喧しい音を立てて通る馬車さへも、今は北國の冬に、詩趣と調和とを齎して、音も無く橋を

牽いて、馬の首には鈴を付けて進んで来た。厚い毛皮の外套を着て、襦を何處かに急がせる人々は楽しい宴に招かれて居る様にも思はれた。其の鈴の柔らかな清い音。平らな雪の白い路の上には、懐しい鈴の音が漂つて居た。

空は概ね暗く灰色であつた。其の夕は殊に早く薄暗くなつて来た。雪の上には佗しい冬の影が映つて見えた。其の時遙か遠く西の地平線の方に、小さい蔷薇色の雲が美しく閃いた。

芳夫は少し疲れて居たけれど、町端れの方迄、何時の間にか歩いて居た。彼は其處から細くなつて居る雪道を傳つて、川岸を歩き始めた。遠く町の真中にある時計臺から、夕暮の時を告げる鐘が聞えて来た。それは四時を告げて居た。

廣い河原は全く雪で覆はれて、大きな荒れ果てた雪景色には、美しい何物もなく、夕闇は物怖しく其の上に迫つて来た。河を距てた彼方には、枯れた林が風に噎んで居た。河原は廣く遠く打ち黙して居た。芳夫は其處に一つの黒い點が蠢いて居るのを見た。何だらう？ 彼は瞳を其の方に向けて、長く見詰めて居た。次第に迫つて来る夕闇の間に、漸くにそれが人である事が解つて

来た。小さい人、彼は自然の力が身に迫る様に感じた。そして肌を侵す寒さに慄へて居た。

其の時突然に、沈んで行く太陽は雲を破つて、冷たい黄金色の輝きを投げ始めた。そして驟く隙に山々の色も映え互つた。それは今迄の暗い沈んだ調子と較べて、驚くべき莊嚴であつた。氷を浮べて流れる北國の川は、先程迄薄黒く見えたのが、次第に黄金の液體を流すかと疑はれる程であつた。けれどそれも一瞬の間であつた。聽て野は前よりは更に佗しく、暗の中に吸はれて行つた。其の間寂しい心で、芳夫は身動きもせず、雪路に立つた儘、暗に包まれて行つた。

一度は陰鬱な心の底から、神への憧憬を、單なる愚かさと弱さと考へて、反抗的にも、人生を不調和な醜いものと暗く思つて、半ば絶望的であつた芳夫の魂も、其後に與へられた運命の示しに深く沈んで、世の眞の姿を微かな乍らも窺ふ事が出来てからは、不思議な微光の、何處からか忍び入るのを感じて、餘りに高らかに、愚かな自己の誇りの中に、憐れにも、自己をすら傷つけて居たのを、自らの本然の魂の前に、深く恥づると共に、彼の心には、次第に、遠く限り無い調和に對する憧憬が、微かな月の光の中に、渚に寄せる小波の様に、湧き上つて來た。

川岸の柳とボブラの並木よ、

柳は項垂れてボブラは高く、

其の葉裏の白の細き旋律は、

大空の雲に歎きを送る。

何をか歎く

暗き心よ。

憧憬も無く

我は彷徨ふ。

白き石なる聖とき會堂に、

夕は燃ゆる聖燭の微明り。

ふくよかに強く漏れて聞ゆる、

ひたぶるなる讚美歌の聲。

空虚の心よ

瞳を開け。

我が戀人よ

共に額づかむ。

さう云ふ様に歌つた過ぎた春の思ひ出の中の憧憬は、再び廻つて歸つて來た。芳夫はそぞろな心であつた。彼は許される儘に、大いなるものの前に跪きたかつた。併しそれは彼の心の一面であつた。如何なる時にも離れ難く沈んだ暗い心は、川岸の教會の敬虔な牧師の説教を聞く様にと次郎が勧めた時に、快い返事を與へなかつた様な、怠慢とわだかまりとを、常に持つて居た。實に彼にとつてはたやすくは何事をも求むる事さへ出来なかつた。彼は空虚な心を抱いて、夕の散歩を、雪路の上に、川岸の枯れた木立の下を、教會の前を通る時、説教の後に祈禱を終へた人々が、信ずる心から楽しくされて、會堂の中から靜かな雪の上に流れて來る灯に守られ、送られる

様に現はれて、男も女も、愛の恵みの中に、外の寒さをも氣付かぬ様に、雪の上に、靴や下駄の擦れ合ふ鋭い音を響かせて、家路に急ぐのを見る時、彼も此の空しい心の中に、何物かを與へる爲に、彼等の群に投じて、よいのではあるまいか？ たとひ醜く憐れな魂でも、神の教會は、彼を追はないに違ひない。罪人をも救はうとするに違ひない。彼はさう考へて居たけれど、しかも猶ほ求めるに勇氣が足りなかつた。

併し乍ら、遂に彼はある夕、教會の入口に近い、隅の暗い椅子に腰掛けて、俯向いて牧師の説教を聞いて居た。會堂の中は、彼が思つて居たよりは、明るく壯嚴に、美しく廣やかであつた。それは彼のおどおどした心を、彌更に面はゆく思はせ、彼は自分が、かかる聖い集りの間には、ふさはしくないのを感じて、成る可く暗い處にある椅子を選んだのであつた。彼は俯向いて牧師の説教に耳を傾けて居た。

牧師は熱心な調子で話して居た。彼は未だ若かつたけれど、其の胸には、敬虔な聖なる焔が、高く燃え上つて居た。芳夫は彼の面差を見た時に、直ちに、牧師の胸に燃ゆる熱誠を確かめる事

が出来る様な気がした。それは偶然な推察や臆説ではなく、彼の心には、さう信ぜられる根拠があつた。

牧師の面差には、軽く物を見過して了ふ事の出来ない、眞摯な苦惱が、尊く現れて居た。彼は孰れかと云へば、蒼褪めた面長の顔であつた。そして其の面影は、不思議に彼の心を離れ難い、西川先生に何處か共通な處を持つて居た。併し西川先生に見る様な、華やかな唇と、澄み互つた瞳とは、牧師には見えなかつた。彼の眉は深く沈んで暗く見え、彼の唇は色褪めて居た。彼の聲は深い底から鋭く響いた。彼は話して居た。

——近來私は青年の間に、此の人生の空虚落莫として幾多の疑問に満ち、其の中に生きて行く事が、大いなる苦惱であると云ふ聲を、屢ば聞きます。そして遂には我が肉體を、自ら滅す者すら多いのを見るのであります。私は此の現象に對して、一つの云ひ難き慘しい感情が湧き起るのを押へる事が出来ません。眞に其處には笑ふ事の出来ぬ必然と、血と涙とのあるのを見て、私は深い同情の感に打たれます。然し乍ら、我々は何事に對しても、徹底的な省察と、自己に對する

深い反省とを必要とするのであります。我々は單なる一片の感情に支配せられて、涙を流して居るべきではありません。私は茲に、生命に對する徹底的な考察を、皆様と共に分ちたいのであります。私は思ひます。我々の生命の價值は、誠に自らは是を滅すには、餘りに大いなるものであると。

——生命の深い神祕に探り入るのが、偉大な哲學者や詩人の事業であります。我々の生命は、決して我々一箇のみの生命ではありません。我々の生命は、廣く大きな總ての人類の生命であります。總ての個人の生命は、離す事の出来ぬ密接な關係に於て、互に相集まつて、茲に始めて大きな眞の生命を爲して居るのであります。我々は此の大いなる生命を與へ給ひし天なる父に、如何に感謝すべきかを知りません。そのみではありません。我々の生命は、更に廣く人類のみならず、總ての造られたるもの、生物も無生物も獸も木も石も、其等凡てを包括する、大いなる生命なのであります。一羽の雀も、父の許しなくば、地に落つる事がないと、聖書に誦されたのは、此の大きな調和した生命の示してはいないと、私は秘かに考へるのであります。一個の小さい石

が、右から左へ移される事さへ、此の大自然の總ての部分に、必ず影響を及ぼすのであります。況んや我々の生命の力の及ぼす影響は、如何に大いなるものでありませうか。是れ神の與へ給ひし生命であるからであります。

——「嘗て我が射たる矢の何處に飛びしや、行違も知らでありしを、不思議やわれ彷彿行きし時、森林の中にふと、紛ふ方なき我が矢を見出でたり。我嘗て空に向ひて、吾が心の歌を歌ひしかど、そは中空に消え果てて、今は記憶さへなかりしに、不思議や或る時、吾が友其の歌を歌ふを我聞けり。」かういふ意味を歌つた詩人もありました様に、神の御力の儘に左右する我々の行爲は、一擧手一投足と雖も、消え果つる事はなく、何處かに其の影響は明らかに残つて、大いなる宇宙に、我々の魂の力は、満ち互つて居るのであります。

——人生の無意味と寂莫とを感じる事がありましたも、我々は常に絶望してはなりません。重い努力の翼を撓まずに動かして、次第に神の御國に近付く時は、先に遙けき夕暮方の空に見失つた小さい水鳥が、今は彼方の小島の岩根に、其の翼を休めて居るのを見る事が出来るであらうと

思ひます。我々は信じて撓まぬ覺悟が必要であると思ひます。ああ、愚かな憐れな汚れた我々の魂、私は深く我々の無知と罪惡とに對して、恥と怖れを感じるのであります。實に我々は努力と精進とが足りません。我々は眠つて居る様に日々を過して居るではありませんか。ルーテルは惡魔の姿を見たと言はれて居ります。フランシスは其の身體に、救ひ主の受け給ひし傷と同じ傷を受けた程、信仰深かつたのであります。我々は夢に周公を見たと言ふ孔子の前に、深く恥ぢねばなりません。………

何時の間にか、稍悲しい調子を帯びた牧師の強い聲は、聞えなくなつて居た。そして祈禱も濟んで、人々は讚美歌を歌つて居た。人々の憧憬と讚美に、堂の中は輝やかしく美しくなつた様に思はれた。婦人達の居並んだ方の席からは、殊にふつくらと清らかな聲が聞えて來た。彼は黙した儘、入口の傍に立つて居た。

聽て人々の席は亂れて、お互に挨拶を取換して居た。彼は獨りで會堂から去らうとして居た。其時人々の間を分けて、丈高い牧師が彼の前に立つた。芳夫には恰も牧師が、彼に何か云ふ爲に

来た様に思はれた。遠く壇の上で見た時よりも、近く彼の前に立つた牧師は、面寝れがして、痛々しい苦惱の間に、眠られぬ夜を過ぎた痕が、臉に現れて居た。牧師は彼の前に立つて、じつと芳夫の顔を見詰めた。

「どうか是からも度々お出で下さい。」

彼は低い力の籠つた聲でさう云つた。

「はい。」

芳夫は小さい挨拶を牧師の前に残して、會堂を去つた。外の空氣は冷たかつた。そして彼の心は、落着かぬ戦きに慄へて居た。彼は勞はられた罪人の様な心地がして居た。彼は追はれずに恵まれた乞食の様な心地であつた。彼は牧師が彼に向つて物言つたのが、解らなかつた。彼は何故に牧師が物言はぬ中に、會堂から外に遁れて居なかつたのかと、不思議な心地がした。牧師が彼の前に立つた時は、既に何か彼を捉へる様な力が、働いて居た様であつた。そして彼は無意識に、それから遁れやうとして居たけれども、それは出来なかつた様であつた。牧師の寝れた面影

が、彼に強い力を働き掛けて居るのが感ぜられた。

芳夫は心の中で、牧師の説教を繰返して居た。生命の價値、彼は其の事に就て多く話して居た。「寂しき胸にも、神ぞ住み給ふといふ事を、皆様に告げ知らせたい。」さう彼は云つて居た。人は神の恵みの間に、幸福はなれるに違ひない。彼はさう思つて空を見上げると、無数の星が鑲めた氷の花の様に、黒い空に瞬いて居た。それは天國の微笑の様に、彼に向つて招いて居る様にさへ思はれた。そして彼は何となく幸福な心地がして來て、胸を張つて、冷たい空氣を、深く吸ひ込み乍ら歩いた。彼は空の星を仰ぎ乍ら、孰れの星の瞬きに答へやうかと思つて居た。

「然し、」彼は其の時、急に胸の中を、小さい暗い影が通り過ぎるのを感じて、眉を擡めて考へねばならなかつた。「然し乍ら、自分は何を求めて居たのであらう。自分は何に慄れて居たのであらう。何を信ぜよと與へられたのであらう。自分は何故に幸福に思つたり、生活が充實して居る様に感じたのであらう。日頃の沈んだ心地が、何故其様に急に變り得るものであらう。」

彼にはそれは不可思議で、寧ろ不合理な、愚かな事に思はれた。彼は考へねばならなかつた。

彼は直ぐに快活な心地を失つて、沈んだ調子で、一人暗い雪路を辿つた。

牧師は神と云つた。愛と云つた。芳夫は其の言葉を美しいと思つた。けれどそれは果して何であらう。彼はそれを知つて居るか。それを何の不思議なく信ずる事が出来るか。彼は基督教徒の間に立つて居た異教徒ではなかつたか。彼の姿は如何に醜く憐れであつたであらう。牧師は彼を憐れんで、彼に物言つたに違ひない。けれど神とは何であらう。神を信ずれば心の平安を得られるとしても、それには先づ神を知らねばならない。彼は其の大きな問題を、雪路を二三町歩く間に、考へて了はうとして居る様であつた。其の時彼は樗牛が、基督教を排斥して、熱心な調子で、國家主義を論じた文章を思ひ出したり、「宇宙の謎」と云ふ題に心を引かれて、買ひ求めた本に書かれてあつた、一元的哲學と名付けられた、彼の心には壓迫に感ぜられた、乾き果てた機械的な世界観などを思ひ出して居た。それらは總て彼の心に領き難いものであつたけれど、彼は其等に依つて、妙からず不安にされて居た。總て其等は猶ほ熱さない彼の心に、容易く動搖を與へて居た。「さうだ、神はきつと宇宙の間に働く力だらう。」

彼は急に一つの明らかな解決に近付いた様に、思はず低い聲で呟いた。

「總てのものが此の力に依つて造られ、動かされて居るに違ひない。其の力は到る處に働いて、在らざる處がないのであらう。さう、力。——けれど其の力は矢張り木や石や小川や森などの様に、自然に存在して居るだけのものではないか。それでは自分はそれに對して如何すればよいのか。信じても信じなくても、其の力の働きに變りは無いではないか。若し神を力と考へるならば、その神は一つの冷たい物理現象に過ぎない。それは歡びに躍つたり、歎き悲しんだりする、生きた命とは何の係りもない。それでは如何して神を信ずる事が出来るか。信ずる心が如何して幸福にされ得るであらう。」

彼は其の混雜した考へ方の間に、遂に全く新たに考へ直さねばならぬのを感じた。けれど彼は、それは遂に理解出来ぬ問題の様な心地がして來た。神、愛、恵み、力、宇宙、基督教、そんな言葉が、断片的に彼の頭の中に現れては消えた。彼は牧師の氣高い姿を思ひ起すと、自分は遂に、何事をも知る事の出来ない、憐れな魂の様に思はれて、恥かしく感じた。けれど彼はまた其

時直ぐに、彼の胸の底から、嘲ける様に湧き起る感情を、壓へる事が出来なかつた。それは啞いて居た。

「彼等は餘りに容易く信じて居る。彼等は與へらるる儘に信ずる事が出来るから、幸福かも知れない。けれどそれは愚かだ！ 信仰ではない、服従だ！」

彼は沈黙して歩いて居た。夜は暗く寒かつた。

彼は悲しい心地がして來た。長い間の憧憬は、僅か一度、燃える様な信仰の熱誠を胸に抱いて居る牧師の説教を聞いた後に、忽ち消え失せて行かうとするではないか。ああ、神、それは遂に捉へる事の出来ぬ、影の様なものであらうか。彼は自分の信ぜぬ心の陰鬱と不安とを顧みて、悲しい心地であつた。

次の日は夕映雲の赤黒い色が、町の西を限る山脈の蒼く沈んだ色と、重い莊嚴な對照を現はして、雪の廣野は鈍色に、何處迄も續いて居た。彼は一人で雪の一本道を進んで行つた。野の彼方

を黒い煙を吐いて汽車が走つて行つた。聽てそれは雪に埋まる様に見えなくなつて了つた。

「何處さ行くでがす。」

彼は急に訛の多い、解り難い言葉で呼び掛けられた。一人の老いた農夫が、破れてぼろぼろになつた、黄色く色の褪めた毛布を纏つて、彼の後に近付いて來た。

「何處といふあても無いのさ。」

彼はさう答へ乍ら、其の老いた農夫が、餘程酒に酔つて居るのを見た。農夫は確かに酒の爲に餘程其の心が樂しくなつて居る様であつた。

「さうかね。」

農夫は答へて、彼と並んで歩いた。

「大分いい景氣だね、お前此頃儲かつたのかい。」

芳夫は笑顔になつて農夫の顔を見た。老人は急に手を振り動かして顔を擧めた。

「何が、お前さん、儲かる事があるべえ。あんな奴が。旦那風ばかり吹かし居つて。俺も色々な

ところも渡つて歩いたけれど、あんな奴は見た事もねえ。」

農夫は心の怒を顔に現はして居た。四方に渡つて歩く貧しい農夫は、頻りに芳夫に向つて、地主の横暴を訴へて居た。彼の息は酒臭かつた。彼の緒く焼けた頬は、艶やかに燃えて居た。けれど眼は曇つて居た。彼は錢は酒に交換すべきものと考へて居る人種であつた。

「今日はお前何處へ行つた。」

「一寸お寺さ行つた。それから少し町に用もあつたし——魂の行きどこの事は、お寺さ行つて聞くでがす。」

彼は安心した口調でさう云つて居た。芳夫は其時、意外な事を聞いた様に、農夫の緒い顔を見上げた。

枯れた林の間から鈴の音が聞えて、懸て馬橋が一つ現れた。そしてそれは遠く遠く地平線の方に、雪の野を走り去つた。芳夫は農夫に別れて、一人でそれを見送つて居た。彼の悲しみは、其時沈んで行く太陽の微光と共に、雲の廣野の上に、揺めいて漂つた。

二十二

芳夫は其の冬を友もなく寂しく過した。彼にはさうした孤獨に暮すのが、運命のやうに思はれた。今は諦めに似た心地が彼を支配して、彼は熱情のない胸を抱いて、次第に物を見る眼は冷淡になつて行くやうであつた。自分にそれが感ぜられても、彼は如何する事も出来なかつた。彼は自分の心を顧みる時、此孤獨のみが彼を助けるのだと思つた。それは、今の様な状態で人に接したならば、少なからず、自分をも他人をも、傷つける事が多いだらうと、彼は思つたからであつた。彼は折々河沿の教會で、牧師の説教を聽いて居た。そして彼の牧師に對する親愛と同情との念は、次第に個人的に深くなつて行つたけれども、彼の説く道には、理解出来ぬ處も多くなつて行つた。それは芳夫の心を苦しめて、彼は時には、全く牧師から離れた方が、彼の爲によいのではないかとさへ、思ひ煩ふ事もあつた。

彼は其頃は、靜かに物を公平に考へる事の出来ぬ様になつて居た。頭の中は、時には風に吹き

廻される様に、動搖する事もあつた。さういふ時は、弟達の賑やかさも、彼を復したしく思はせ、彼は自分の靜平を失つた心から、人間を厭ふ心を、誇張して考へる様になつた。そして彼は町を離れて、野を散歩するのを慰めとして居た。幾分でも、人間から離れて、自然の中に居れば、彼の心は穏やかに、悩み少く感ぜられた。

そして冬は過ぎて、雪解時となつた。芳夫は空想に耽り乍ら、雪解道をぼんやりと歩いて居た。彼は現實からは、全く離れた様な、空想の幻を描き乍ら、暫らく無意識な歩みを續けて居た。けれど體て彼はまた、單調な生活から受ける、倦怠の壓迫に堪へ難くなつて來た。彼は遠く離れて居る孝一や、石狩川の岸に、雪に埋もれた様にして生活して居る次郎などが、夫々に、如何様な生活をして居るだらうと、思ひを馳せて居た。彼等の手紙は、折々、其の直接の生活には餘り觸れて居ない様な問題を、彼の處に告げて來た。——兎に角私の生活は寂しい。——芳夫は何事かを纏めやうとする様に考へ始めた。——その寂しさは、時には悲しさを導いて來る。餘り生活が單調だ。砂漠の旅にも、赤い花の咲いて居る事はあるだらう。若し私の歩いて居る、此の細い雪

の道の彼方に、榮子が顯れる事があつたら。——私は何を考へて居るのだらう。私は餘り愚な事を考へて居る。——暖い心。燃える様な楽しい戀。それは私には、總て遠く過ぎ去つた問題ではないか。——人は離れて造られてある。人の魂と人の魂と、それが離れない抱擁をする事はあるまい。其等は夢だ。人を愛する。私はそんな事は疑はしい様に思はれる。何事も自己の爲だ。たとひ小さくとも、自我を主張して行く事、それが總ての中で、最も大きな、唯一の眞實だ。私はそれが、社會的な生活に對しても、決して矛盾にならない様に思はれる。先づ何よりも、個人の完成が、最大の問題だ。それから美しい社會も作られて行く。——私の生は淋しい、悲しい。けれどそれは止むを得ないではないか。空虚な生命でも、それを胸に抱いて、私の道に勇ましく進み入るより外はない。充實した生命の歡びにあると感ずる人は幸福だらう。けれどそれは夢だ。幻影だ……

其夜芳夫は牧師の室で話して居た。明るい電燈の光の中に、暖爐の燃える音が、暖かさうに聞

えて居た。外は何時の間にか雪になつて、静まり返つて居た。本箱には、牧師が好んで讀む外國の詩集などが、美しく並んで居た。暖爐の上の鐵瓶は、快い音を立てて、夢を誘つて居た。二人の姿は、不規則な形に、壁に影を映して、雪の夜の寒さの間に、此の室の中だけは暖く、其の中からは、外の暗さと雪との間に隠されて居る、様々の神祕や傳説、其等は少年の頃から、人々の胸に離れ難くなつて居るものが、殊更に物怖しく想像された。

「さうです、あなたの考へはもつともな様です。自我、尊いものに違ひありませんね。それはあなただけでなく、現代人にとつて、共通な煩惱です。つまり個人と家族や社會といふ様な團體との關係の問題としても考へられますね。さう、胸の中の我を滅して了ふのは、悲しくてつらい事です。どうも其間の矛盾は、解き難い煩惱です。」

暫らくして牧師は言葉の調子を變へて云つた。「あなたは犠牲といふ事を考へた事はありますか。」

「一寸考へてみた事はあります。」

「私はその方から考へて行つたらと思ひますね。基督が『そは生命を全うせんとする者は、之を失ひ、吾が爲に生命を失ふ者は、之を得なければなり。』と仰つたのは此の問題に對して、何等かの光を與へるものではないかと私は思ひます。尊い言葉だと私は思ひます。」

「如何いふ様に考へたら宜敷う御座います。」

「犠牲とするといふ事ではないかと思ふのです。犠牲になつて、我を失ふ者が、眞に我を得る者ではないでせうか。例へば家族に對しても、國家に對しても、總て隣人に對しても。」

芳夫は黙つて俯向いて居た。彼は矢張り、何處迄も迷つて行かねばならぬ様な氣がして來た。彼は遂に牧師の言葉を了解する事が出来なかつた。矢張り自己の要求の主張より外に、生きて行く道は無い様な心地で、彼は牧師の前で黙して居た。

そして遂に再び春は廻つて來た。春の陽は暖かくまた遍く、雪の解え去つた野の上に漲つた。野には未だ萌え出でた緑の草はなくて、雪の下から現れた枯草が見えた。廣い野の雜木林の丘に

は、二三人の青年が、仰向に臥て陽を浴びて居た。春の日は暖かく、小川は嬉しさうに歌ひ始めた。

常磐木の暗く堅い色の外には、緑色は見えなかつたけれど、空の青は澄み互つて、谷間谷間には真白な雪が、猶消えやらずに残つて居た。それは鮮かであつた。

芳夫は去年からの枯れた芝生の上に身を横へて、眞青な空を仰いで居た。限りない大空から、陽の光は隠やかに彼の頬を照して居た。町を遠く離れた丘には、總ての物の響きは消え果てて了つて居た。風の音、人の聲、其等總ては、眞晝の静寂な陽の暖かさの中に葬られて居た。そして其の静けさは、次第に深く濃く芳夫を包み始め、彼は其の中に、恰も心の淨めを受けて居る様な感じがして來た。彼は春の日の中に解ける様に感じて、俯し乍ら耳を澄まして居た。静まつた四方の空氣は、次第に濃く彼の周圍に集まつて來る様であつた。そして何者か彼の耳に聳く様であつた。それは自然の愛の聲に違ひなかつた。彼はうとうとと枯草の上に眠り乍らさう思つて居た。彼は夕日を浴びて町に歸つて來た。不思議にも彼の心は、平生とは全く違つた安らかさであつ

た。そして恰も見知らぬ町に旅して來た様な心地で、賑やかに美しい夕べの街を眺めた。そして美しい女が柔らかに化粧して、彼の傍を通り過ぎた。野の林の梢に掛かる、白い雲の様な柔らかさを、彼等の瞳は持つて居た。芳夫は和らいだ心地で、四方を見廻し乍ら、彼が歩いて居る町の美しさ、彼と共に歩いて居る人とを、讚美する様な心地となつて來た。

其の時自然は春の歩みを續けて居た。そして芳夫の心も、自ら誘はれる様に、其の恵みの中に軽くなつて居た。灰色の空が低く垂れ下つて、人々の魂に壓迫を加へる時を、今の延び行く命に輝やかなしい春と較べると、それは驚くべき相違であつた。陽の光は恵みの様に、彼の心をも次第に暖め、和らげ様として居た。

夜の雨の暖かさは、しつとり大地に泌み込んで、野には春の妖精が舞踏して居た。木の芽はささやかに、自由な空氣を歡び、野の草は總て緑に輝いた。暖い空氣は皮膚に快く、野の新しい匂ひは、彼に命の歡びを教へやうとする様であつた。水蒸氣は空に満ちて、美しい雪は、高い山と青い

空との間に、調和して柔らかに浮んで居た。水田に滌ぐ小川の水の嘯き、漸く延びて行く麥の芽、畑打つ乙女、物焚く煙、道行く老いた農夫が、長閑けに輪に吹く紫色の煙、其等凡てに、春は緩やかに吐息して、希望にち満ちた瞳を、次第に見開かうとして居た。けれども芳夫は、其間で、遠い空を眺め遣つて、深い溜息をつかねばならなかつた。それは、春の恵みは深く彼の心に沁み入つたけれど、彼は、それをすべて受入れる程の自由さを持つて居なかつた爲であつた。そして彼は現在の野の光を眺めるよりは、彼の若い生命が、逆着けて來た小さい道を振り返つて、其の追憶の中に、喜びや恵みや悩みを、再び辿つて居る事が多かつた。そして春は漸やく濃やかになつて、櫻の花が公園に亂れ咲いた。茶屋の小さい紅の旗は、春風に翻つて、斑に白粉を塗つた、醜い顔のさすらひ人が、琴を鳴らし乍ら、酔ふて歌ふ群集の間を分けて通つた。春は濃やかに、群集は花に酔つて居た。

然し間もなく逝く春の風は、慌しく其の花を散らして了つた。そして其の風は、次第に強く野に吹き荒れて、毎年其頃には、野火が平原數十里を焼いて、人々を驚かした。山林の枯枝、熊笹

の葉、其等は激しい音を立てて、たやすく燃えて行つた。野火は北海道には珍らしい事ではなかつた。けれども燎原を焼く火は、其の年は餘りに激しく燃えた。其頃は、毎日乾き切つた西風が、生暖かく町の埃を吹き上げて居た。そして其の風は、町の上に折々煙を送つて、其の煙はまた黒く焼けた熊笹の葉を、往來の上に飛ばす様になつた。

「また山火事だ。雨が降る迄は消えないぞ。」人々はさう云ひ合つて居た。火は西を限る山脈の彼方で燃えて居た。そして毎日毎日西風が吹き續いて、雨は降らなかつた。火は次第に燃え擴がつて、町に近付いて居ると、新聞は人を脅かす様に告げて居た。そして火は遂に平原の西を限る山脈の後から燃え出でて、人々の眼に映り始めた。長い山脈は、美しく燃え上る火の冠を載いて、四五日は其儘であつた。人々は夕べから町に出て、山火事を眺めて居た。それは餘りに美しく、餘りに大きなイルミネーションであつた。人々は流石に稍不安を感じ始めた。街の上に飛んで來る、焼けた熊笹の葉は、餘りに多く、風は餘りに乾くばかりであつた。

芳夫は夕べになる毎に、二階の窓からそれを眺めて居た。其年は、野火はそれのみではなく、

毎日の新聞紙は廣い北海道の彼方此方で、牧舎が焼け失せたり牛や馬の哀れな最期や、折々は人間さへも、犠牲になる事を知らせて居た。芳夫は彼方の空に見える火が、遙かに廣い野を焼いて居る火の一端である事を思ふと火の怖しさよりは、人の營みの果敢なさが思はれた。そして燃え上る火の盛な姿は、彼の沈み果てた冷淡な心には、不思議な嘲笑の様に映つた。自然は其の大きな強い力を彼に示して居るのみで、何事も云はなかつた。彼は其の時、弱い自分を心に恥ぢた。彼は思つた。「小さい生涯の追憶に、哀れな心を疲らせて居るとは何事だ。人に與へられる經驗は、それが如何様に哀れな、惱ましいものであらうとも、更に歩みを續けて行く場合の階段としてのみ其の眞の意味と價值とがある。弱い魂は滅びる外はない。大きな人生の道に進み入れ。努力して進め。」彼は自分を勵ましてさう云つた。

或日冷たい風が吹いて、其夕から雨が降り出した。二三日街は煙に閉ぢ込められて、日を包む煙は、丁度鼠色の霧の様に見えた。血の様な色に物凄く、太陽が西の山に沈んで行つた。

二十三

それから三月程後、夏の眞盛を、芳夫は目的の學校に入學する事の出來た小さい満足を胸に抱いて、東京から北海道へと旅して來た。東北の野には、線路に添ふて月見草が咲き、圓い稔やかな山には、馬が嘶いて居た。津輕海峽では、船室の窓から、眞珠色の雲が美しかつた。そして彼は札幌の停車場に降りた。

彼は手紙の行違ひの爲めに、何事も知らなかつたけれど、其時は既に、彼の家族は其處には居なかつた。彼は彼の家の門が堅く閉されて、標札の跡のみが残つて居るのを見た。

然し乍ら、其の頃は、彼も漸く、輕々しく様々の事に驚かない様になつて居た。彼は閉された門の前を歩き歸りし乍ら、父と母と家族の上を思つた。其頃の一家の事情などを考へ廻らして、彼は、彼等がもと住んで居た、高原の町に移り住んだに違ひないと思つた。閉された家の中は、ひつそりと静まり返つて居た。彼は急に涙組まれて來た。さすらつて行く一家の運命、總て人の

運命はさすらひであると思ふ時、彼は涙が止まらなかつた。そして其時のみは、自分の弱さを批難する事の出来ぬ心地であつた。彼は涙で自分を慰めて居た。曉方の夏の太陽は、靜かに往來に其の光を投げ始めた。彼は門の前を歩き歸りして居た。

彼の考へた通り、一家は數日前に、高原の町に移り住んで了つた。芳夫の父は、其處で經營して居た事業に、専ら力を注ぐ爲、一家と共に、彼には恵みを與へなかつた町を、遂に去つた。そして新しい事業は障りなく進んで居た。芳夫の父は、如何様な時にも、倦む事なく、忠實で努力的であつた。

夕暮の薄暗の中を、石狩の野を走る汽車に芳夫は乗つて、高原の町へと急いで居た。彼は車窓に倚り懸り乍ら、物思つて居た。彼は何事か人生に就て知り得た様な感じを持つた。それは彼が自から何事か人生の旅路の上に爲し遂げたといふ感じと結び付いて居た。彼は寂しい乍らに慰められた。

野の闇の中には、八月の野に熟れた麥の穂を焼く火が、車窓の兩側に、夥しく燃えて居た。夜

の闇は限りもなく黒く擴つて、其間を、汽車は急速力で、激しい音を立てて走つて居た。彼は一家に就て思ひ續けて居た。彼等が再び移り住んだ町は、彼の少年の時を孚んだ處であつた。佗びしい高原の姿は、總て彼の記憶に、鮮やかに残つて居た。

汽車が其町に着いたのは、眞夜中であつた。喜ばしげに出迎へた父の元氣な顔と、白い母の顔とが、玄關口に浮き出す様に見えた。弟や妹は既に眠りに就いて、新しい家の中は、靜まり返つて、父母と彼とが話して居る室には、明るく電燈が點つて居た。

芳夫は其夏を、高原の靜かな空氣の中に過した。それは彼に、生活に對する反省を與へるに充分であつた。

夏の暑さは忽ち去つて、秋が訪れた。然し其處には、秋は殆んど、冬の初めの段階の様に思はれた。晴れやかな日も、風は涼しく冷たく、曇つた日は、冬空の怖しさを、人々に豫示して居た。嵐の日は、畑の末枯れた玉蜀黍は、ざわざわと佗びしい音を立てた。

芳夫の家は町端れにあつて、庭の外は、直ぐ馬鈴薯の畑になつて居た。椽側に立つと、石狩岳やヌタクカムシユベの峯や十勝岳や、また空氣の澄み互つた日には、遙かに天鹽岳の見える時もあった。大空には、高原の雲が美しく群がつて、山脈の遠大な姿を、護る様に見えた。或時は、其の聳えて鋭い輪廓が、恰も神々の玉座の様に見えて、それが次第に叢立つ白い雲に包まれて行く事もあつた。

庭には白百合が氣高く咲いて、それが桔梗の紫と、純潔な對照を見せて居た。其日は、空は雨模様を見せて、冷たい風が吹いて居た。二週間程前の、激しい暑さを顧みると、それは不思議な程であつた。其頃の晴れ互つた空には、夜も燃え上る蠟燭の光の様に、星が眩い程に輝いて居た。今はそれが遠い夢の様に思はれて、冬の薄暗い瞳は、鈍く人々の前に開き始めて居た。曇つた空を見上げると、小さな赤い蜻蛉が、無數に群れ飛んで居た。

母は金雀枝を活けて居た。

「今日は大變涼しい様だね。風邪を引かない様にしないと、いけませんよ。」

彼女は椽側に立つて、ポプラの葉が、ちらちらと動いて居るのを見詰めて居た芳夫に云つた。

「え、直ぐ涼しくなつて了ひますからね。」

「もうこれからは直ぐ冬だからね。春先は、暖くはなるし、何となく氣も引き立つ様だけれど、これかれはもうお天氣も悪くなるし、穴の中にでも這入る様で、心細い様な……」母はさう云ひ掛けて外を眺めた。

「此處は夏から直ぐ冬になる様なものですね。秋は本當に短い間ですからね。夏が過ぎれば、直ぐ寂しくなりますね。」

「半年は雪の中に埋もれて居るのだからね。」

母は靜かにさう云つた。

芳夫は外に出た。暗い鼠色の雲が、次第に低く、あかだもの梢を、接吻する様に見えて來た。空氣は殆んど露點に近く、冷たく濕つて居た。暗い天氣は、晴れやかな日の氣分を、芳夫から渺なからず奪つて、彼は頭が重く感じたけれど、暫らく野を歩き廻つて居る間に、彼の額は、次第に

冷えた空気の中に、冷たく落ちて来た。葱の畑、馬鈴薯の畑、玉菜の畑。そして處々に、玉蜀黍が風に揺らめいて居た。夕暮の薄闇い空に、ボブラがすすくと突立つて居た。

彼は稍延びた髪が、冷たい風に弄ばれるのを、心地よく思ひ乍ら歩いて居た。

次第に夕闇が四方から近付いて来た。彼の歩く道のみ薄白く見えて、彼方の杜から、鳥が五六羽薄闇の空を、斜めに飛んだ。靜かな空気の中に、顔へる様に、蟲の聲が聞えて来た。廣い野の何處からも、蟲の聲が響き始めた。

彼は小高い丘に立つて、町の方を眺め遣つた。電燈が點り始めて、低い家が黒く、薄闇の中に並んで居た。廣い野に散らばつて、黒土を耕して生きる農民達の爲に、野の中心に、此町が出来て、數萬の様々な運命を持つた人々が其處に粗い家を建てて住んで居た。大きな自然の間に、町は小さく弱く見えた。夜の闇は次第に町を包み始めた。其中に生きる人々の憐れさ。町は自然に對して、其の領域を要求する事は出来なかつた。町端れに、家と畑とが互に並んである様に、野は町の中に常に其の力を延ばして居た。

其町は、大都會の様な美しさもなく、また田園の様な餘裕もなかつた。其處に住む人は、生きる爲にのみ、其の力を用ひ盡して居た。彼等は幸福を求めるといふ事を知らなかつた。

——然し、彼等はそれだからと云つて、不幸だとは思はれない。土を耕して生きる農民も、破れ易い、木造の家を建てて、其中に眠る者も、皆此の人生の、大きな事業の一部を果して居るのだ。彼等は與へられた命を、忠實に守つて生きて居る。彼等は努力して居る。それが不幸だとは思はれない。それが憐れな運命だとは思はれない。人生には影もあれば光もある。けれど其等は共に人生の姿だ。誰でも失望する事はない。純な心で、強く生きて行けばよい。地を踏んで着實に生きて行くより外はない。人生は幻ではない。一つの大きな、意味深い實在だ。——

芳夫は野を歩き乍ら、さう思つた。野邊は暗くなつて居た。彼は今迄歩いて来た道を、振返つて見乍ら、更に彼の前に擴がつて行く生活の道に就て思つた。そして彼は、激しい寒さの中に、冬を過しては暮して行く、一家の様々な運命を思つた。そして彼は、如何様な運命でも、それに忠實であるのは、尊い事だと思はれなければならなかつた。實在は漂つて行く影の美しさではな

く、様々の経験の中から編み出された、愛や忍耐や努力の姿である。寂しい港町の遠くの灯を見詰めて暮す、彼の幼い日を守りし一人の女も、長い間に、餘程老いたに違ひないと、彼は思つた。實驗室や天秤や、暗室や顯微鏡などを友の様にして暮して居る友も、一人の人としての運命を、忠實に亨けて居る。それが人々の生活の價値である。彼は人々の運命を、祝福したい様な心地であつた。

スタクカムシユベの莊嚴な巖は、暗夜の空に見えなかつた。彼は、其の火口原湖の深く沈んだ色と、千古の雪の純白とが、恰も、總ての人の罪を淨める様であると云はれてあるのを思ひ出して、其の神祕的な莊嚴な山を、尊く思つた。

彼は總ての物に親しく感じた。彼は、山や木立や、小川や、其等凡てに、呼び掛けたい様な心地となつた。凡ては彼の彷彿して行く魂に、孚みを與へる物の様に思はれた。

彼が通り掛つた時、闇い左の牧舎の方からは、牛の啼く聲が、深い調子に聞えて來た。農家の入口からは、爐に燃える火と、楽しいな家族の夕餉とが、黄色な洋燈の光に照されて暖かさうに

見えた。

芳夫は彼の家近く迄來ると、父の打つ鼓の音が聞えて來た。

「お父さんの鼓は遠く迄よく響きますね。」彼は歸つて來ると父にさう云つた。

「あゝ、風下にはよく聞える。」

父は笑ひ乍らさう答へた。

白樺の戀人